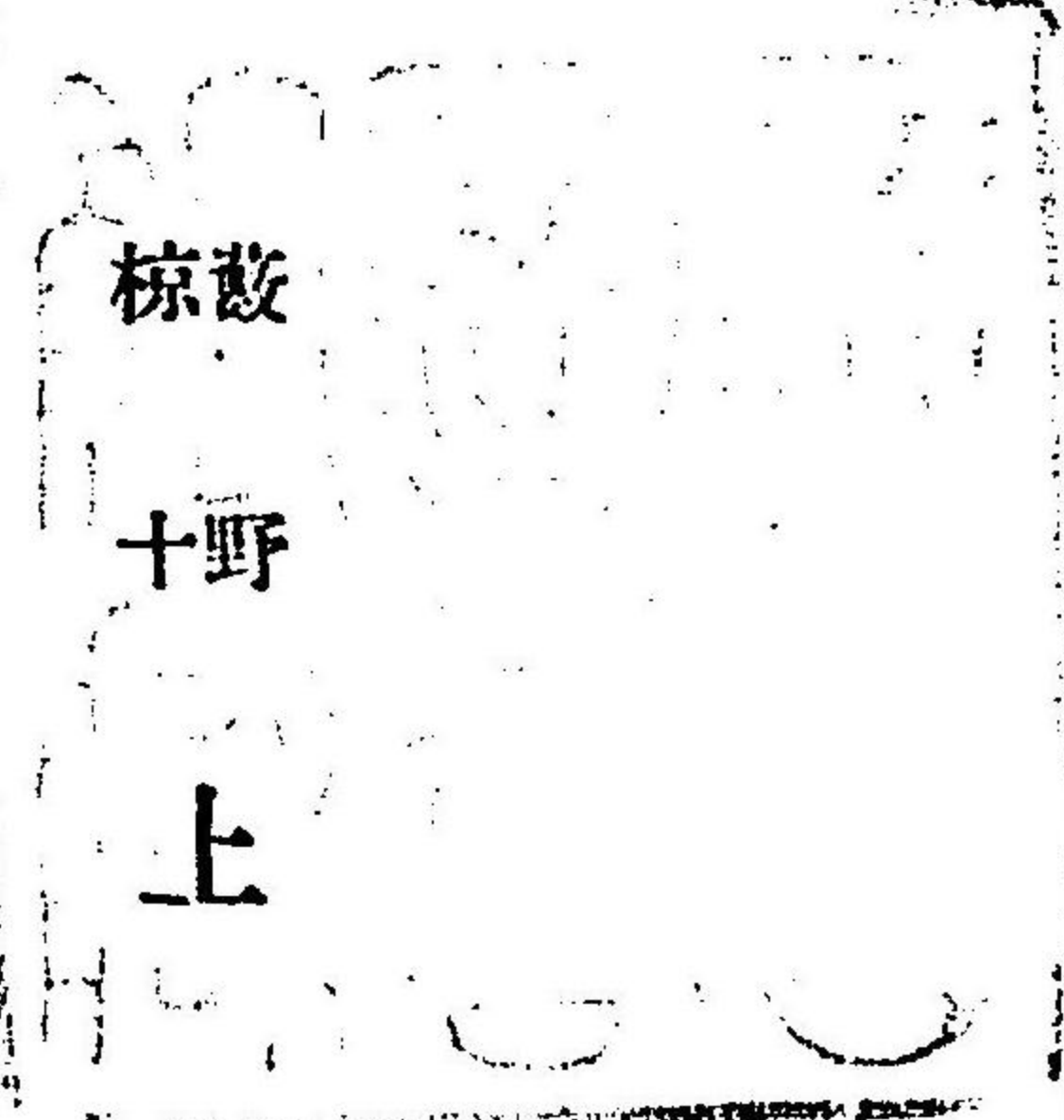


31-529

明
治
三
十
年



棕
葭

十
野

上

方

見

物

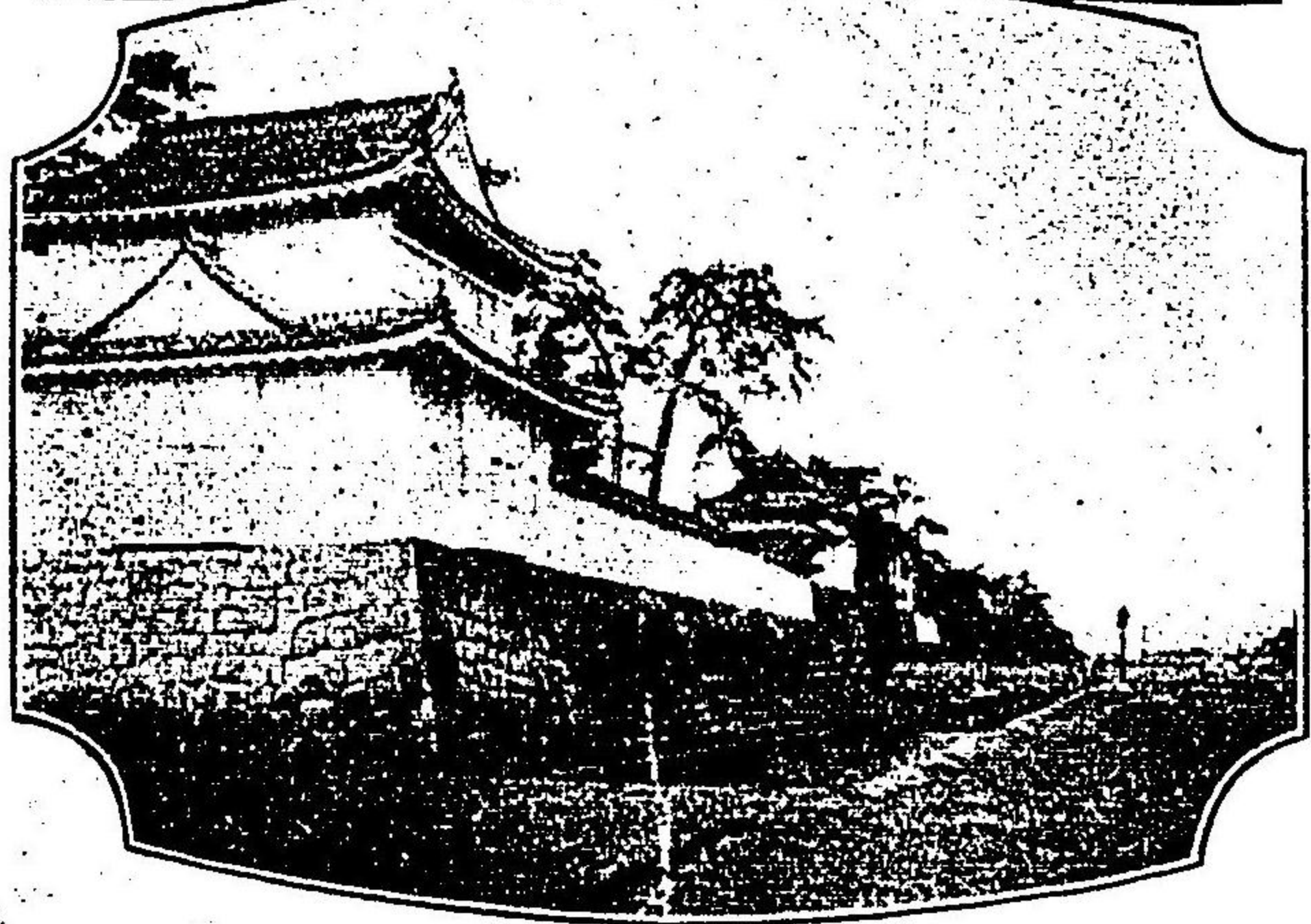
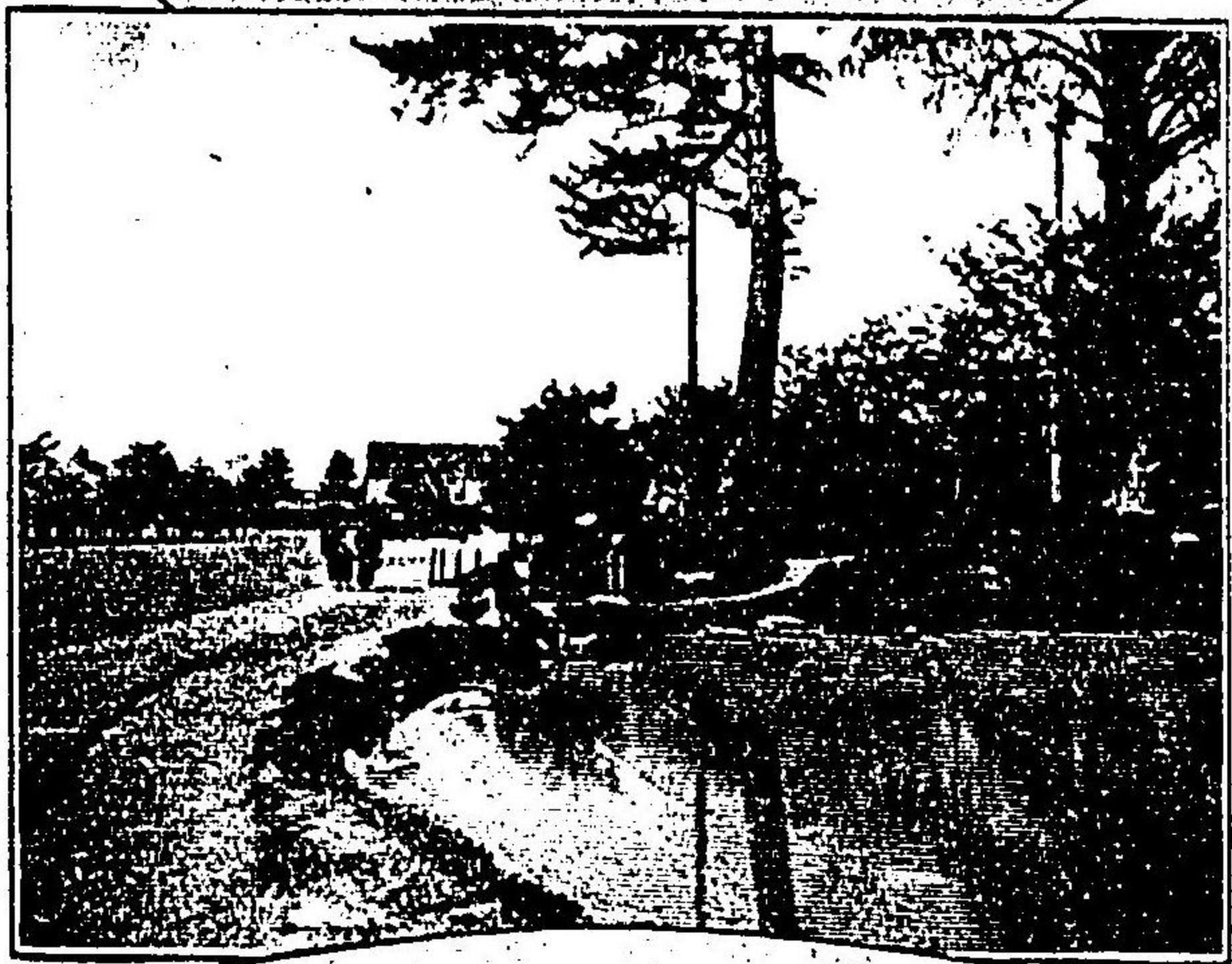
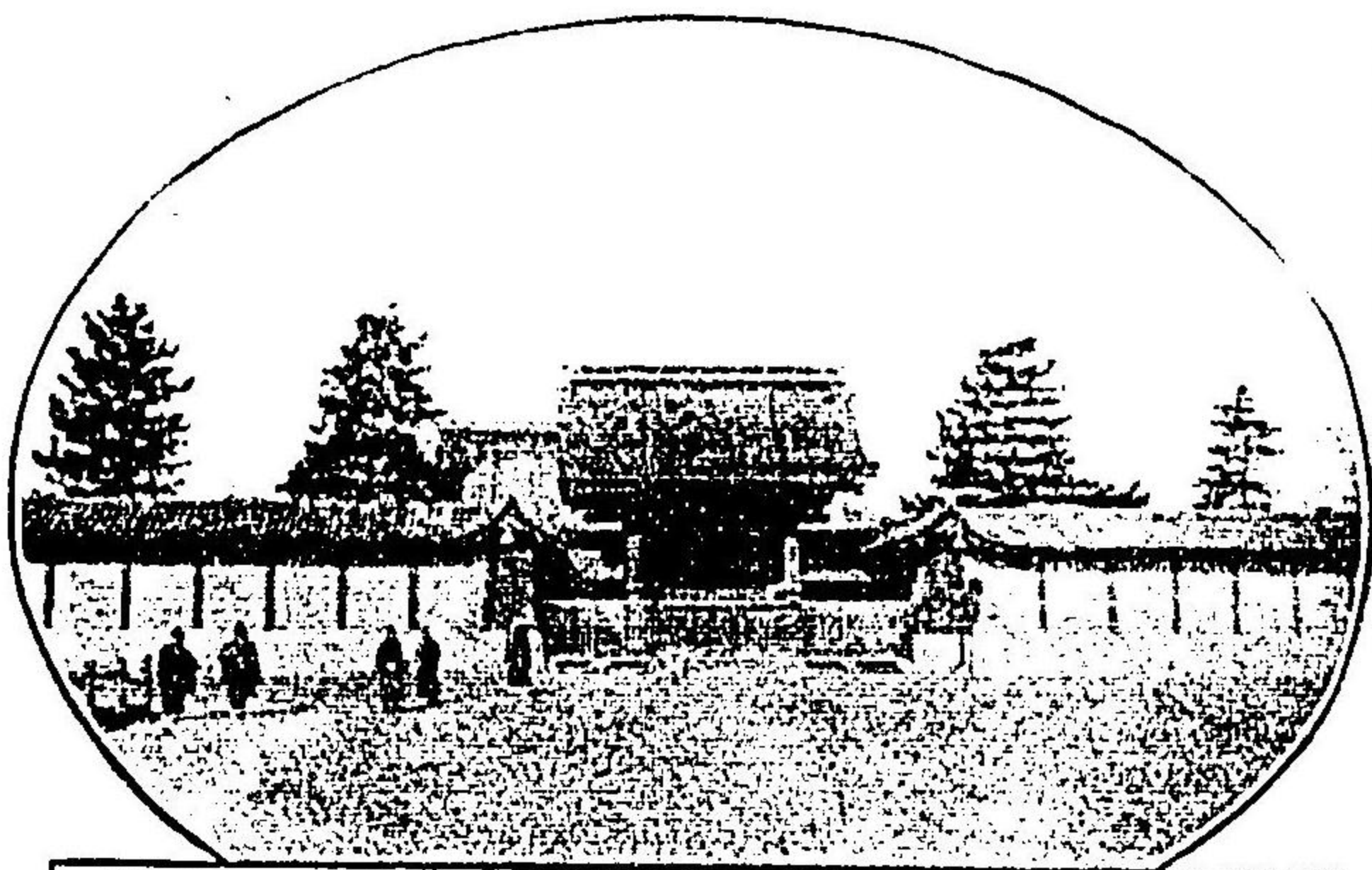
明治
41 6 19
内交



鞍野棟十君之像

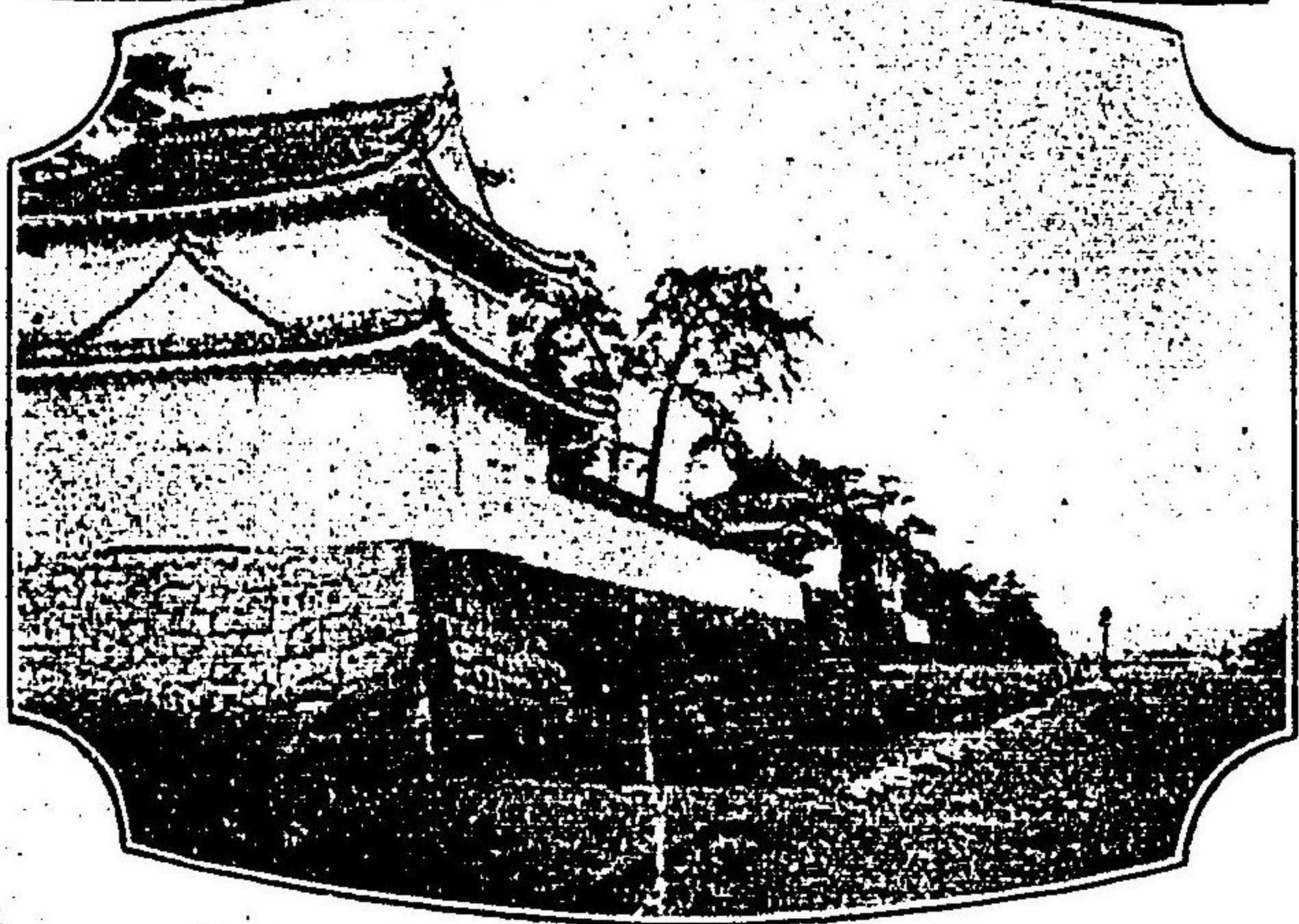
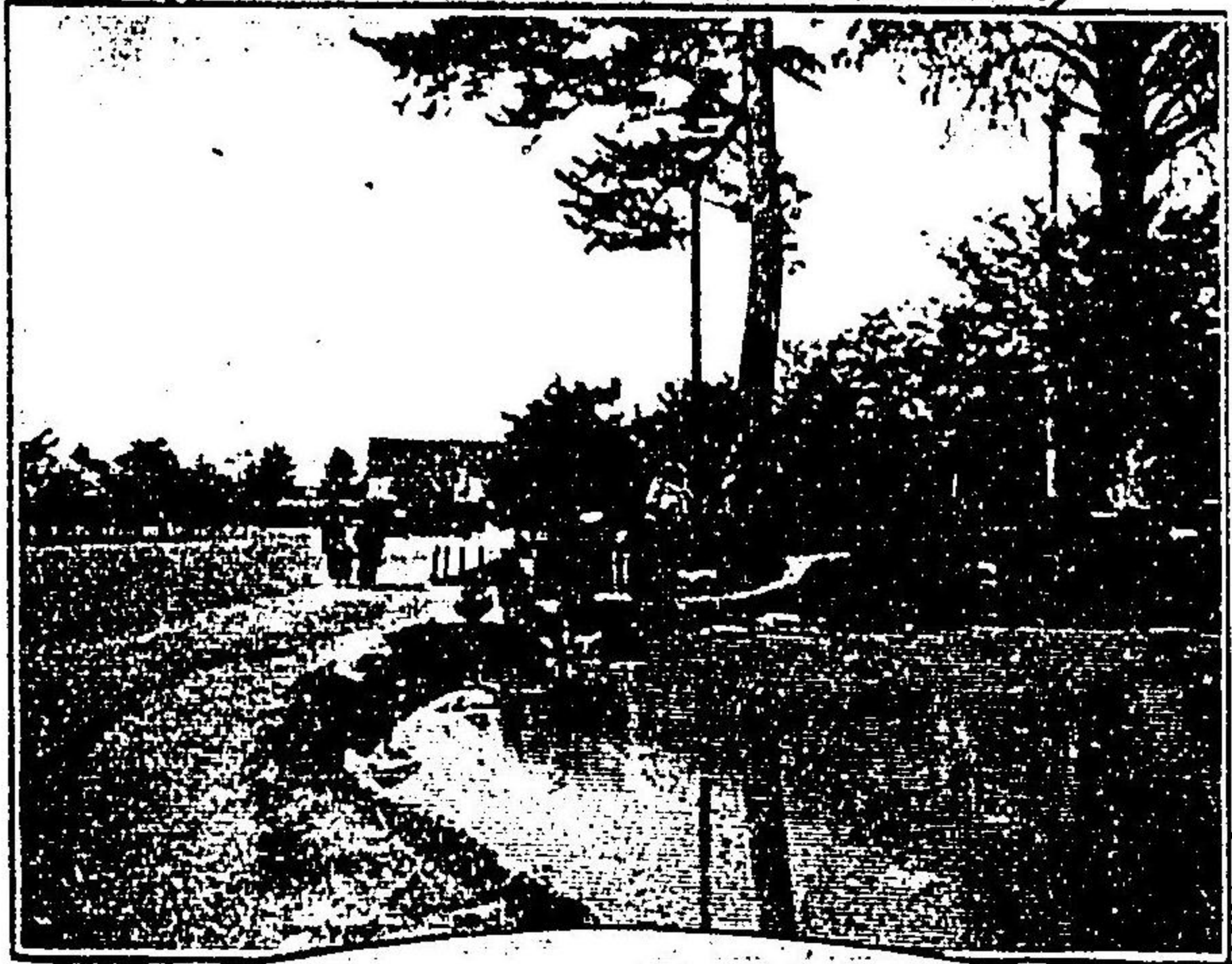
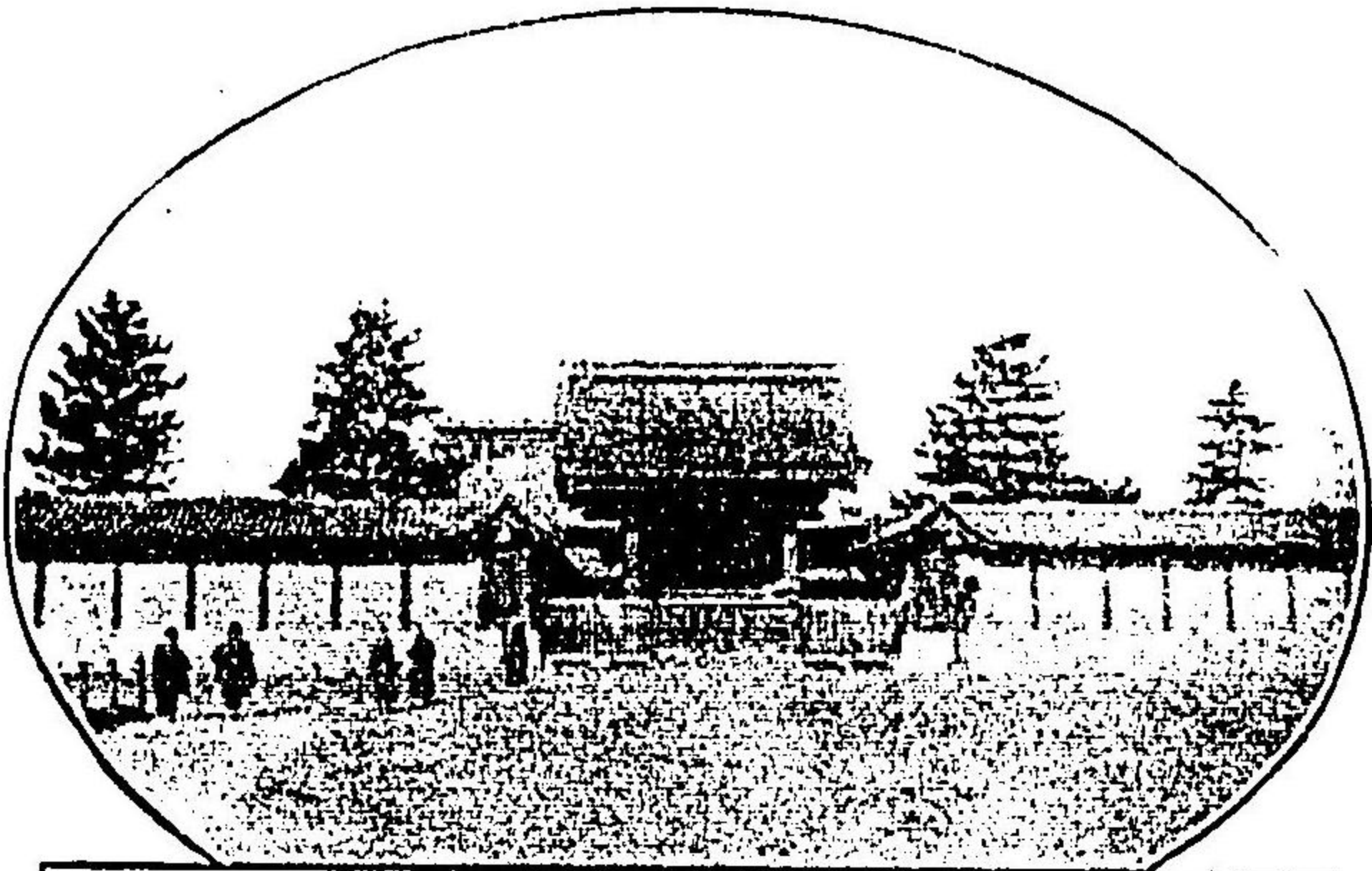
五

御所の溝は三尺足らずに、二條城の濠の大ききを見、のう昔野、腹が立つわい、



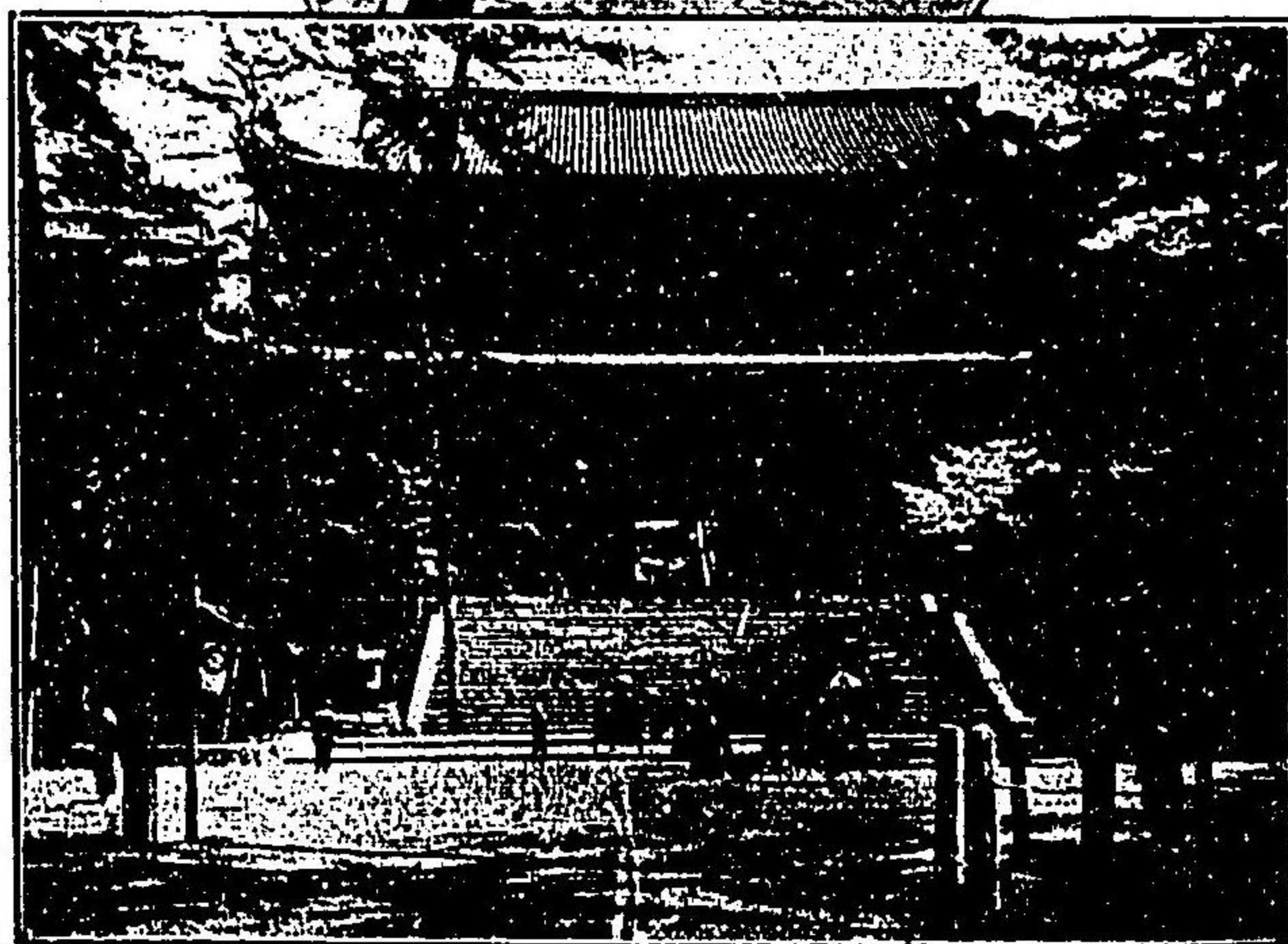
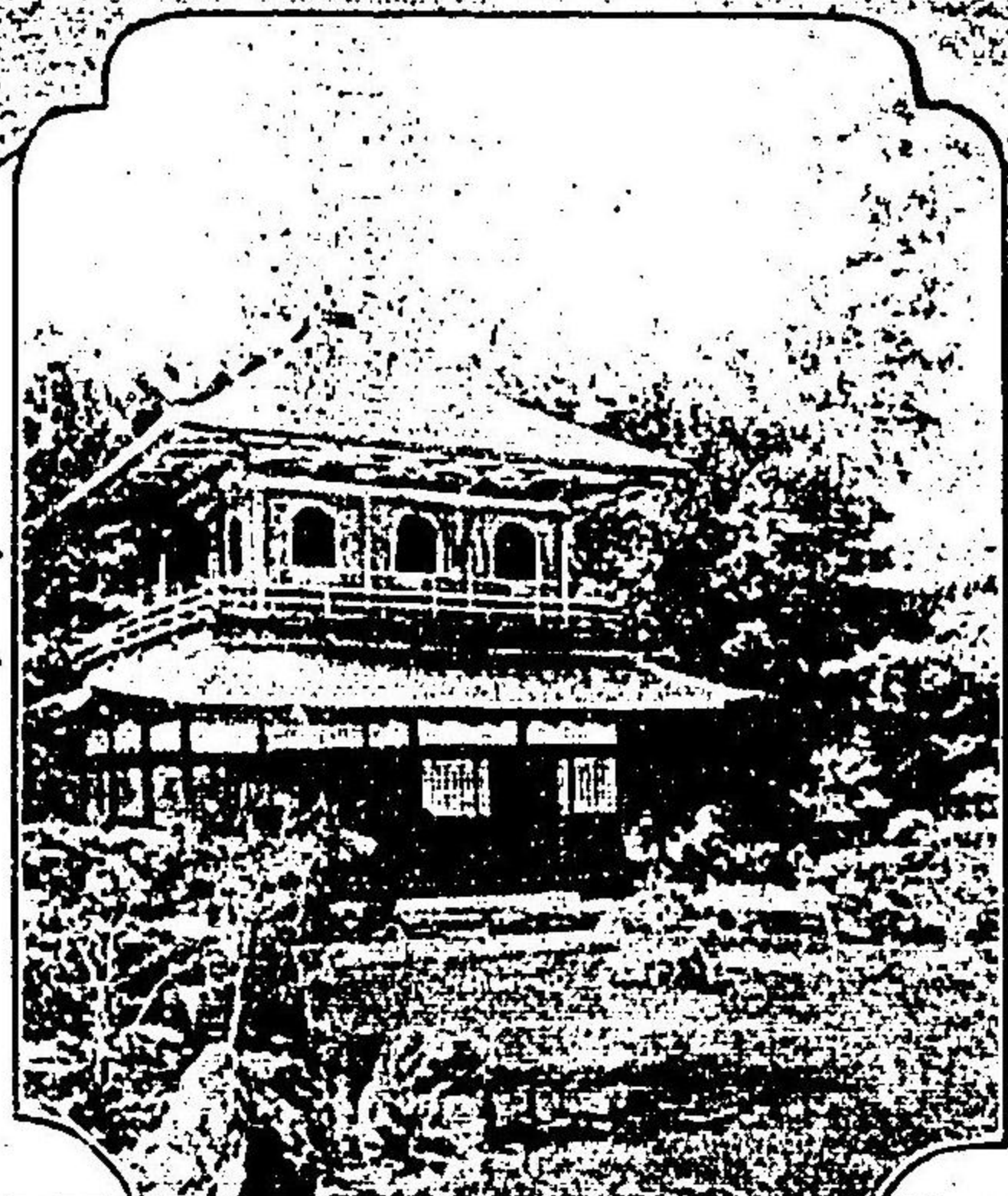
上京御所建禮門

御所の藩は三尺足らずぢやに、二條城の藩の大きさを見い、のう苦野、腹が立つわい、

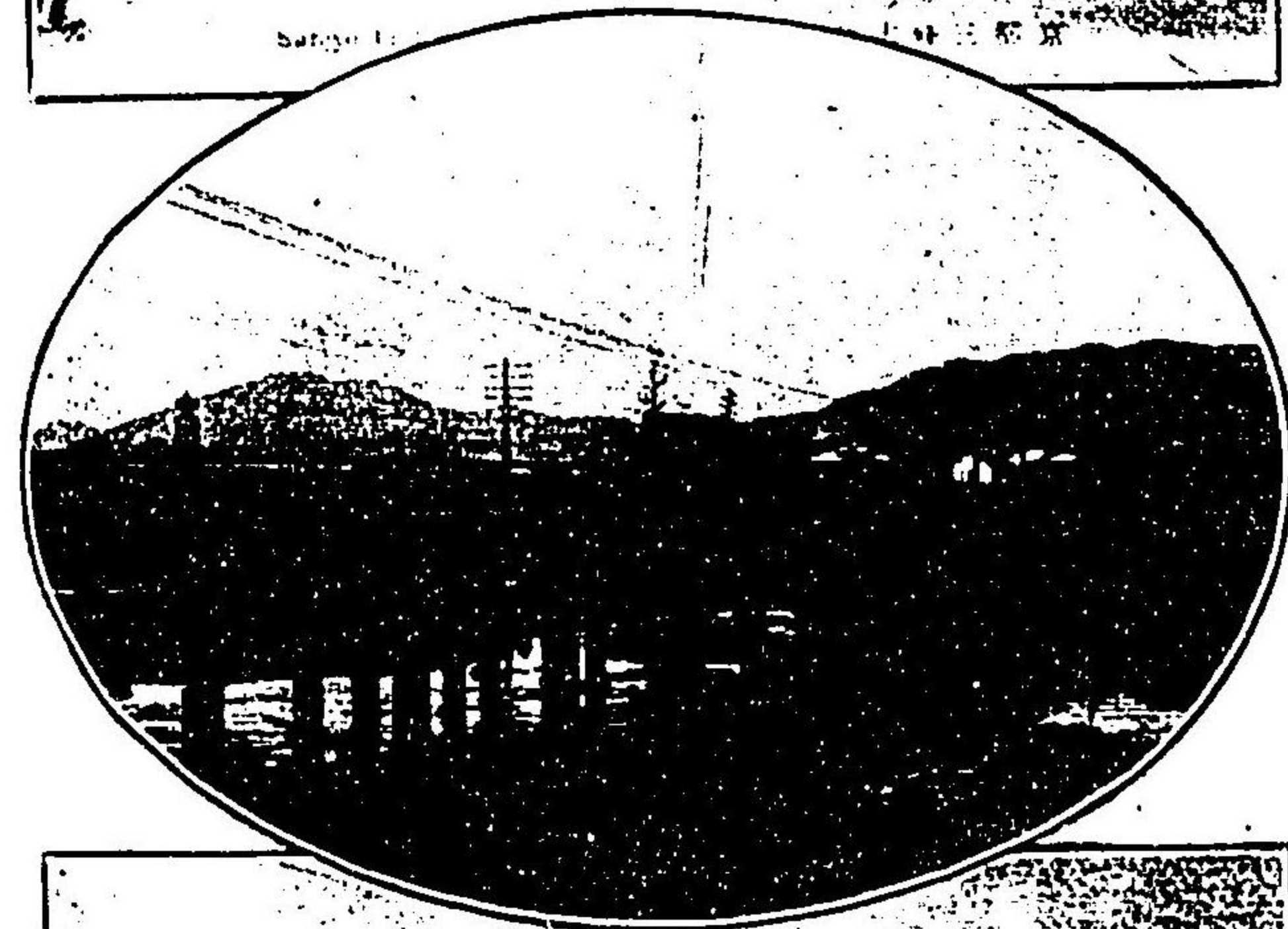
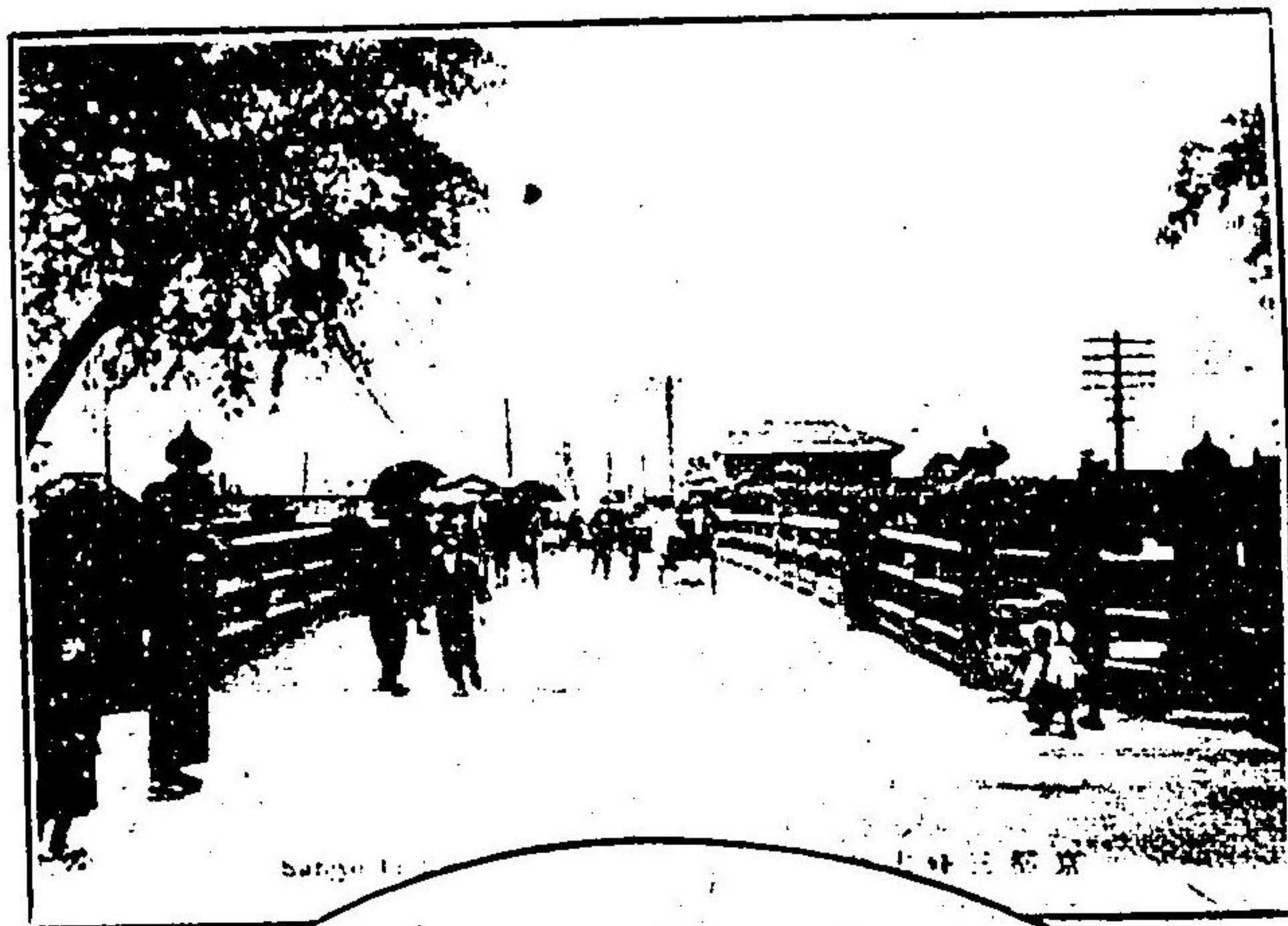


上京御所建禮門

大極殿の柱は赤い、銀閣寺の砂は白い、知恩院の門は黒い、わしの歯が黄で、菅野の唇が紫



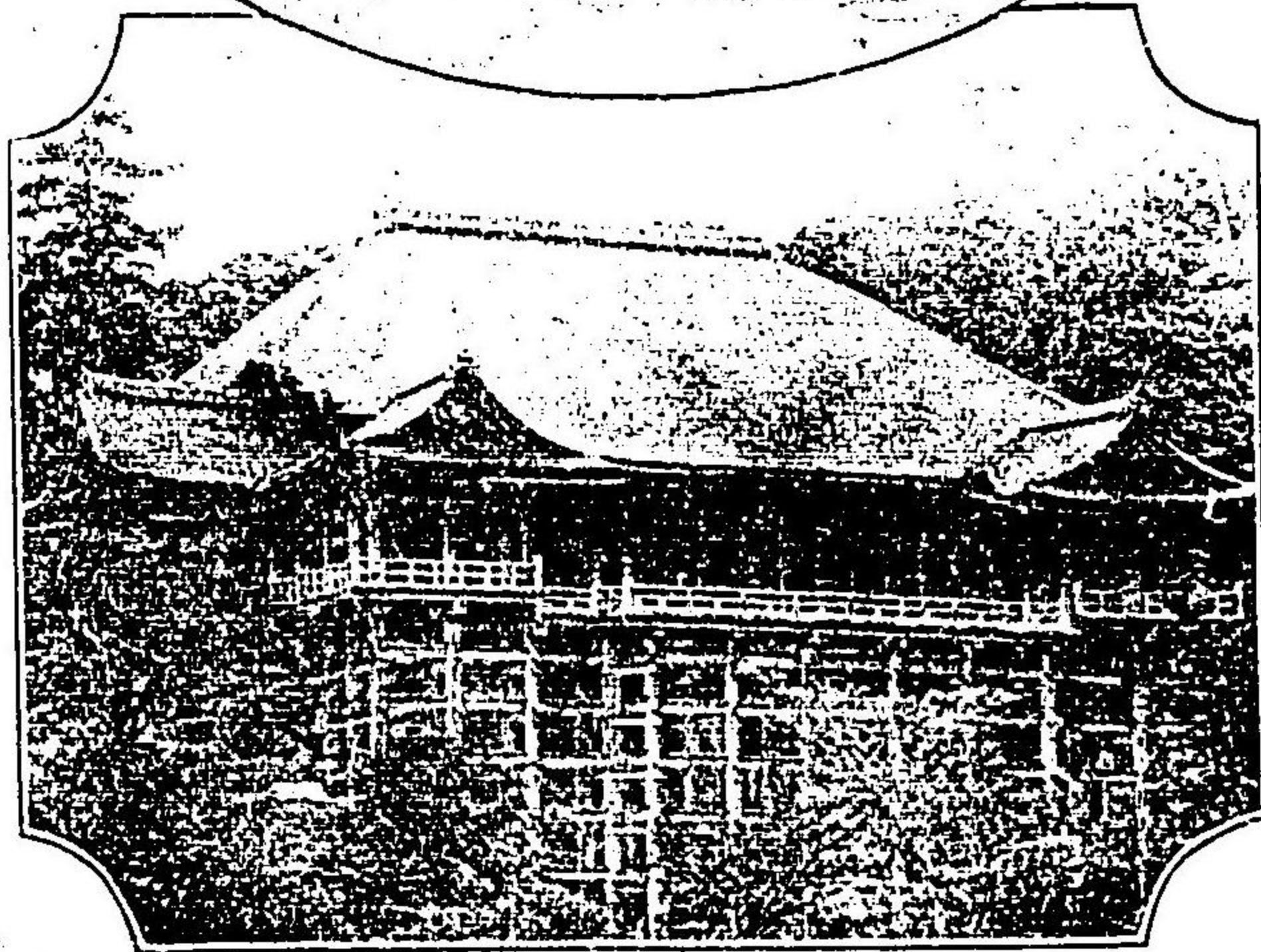
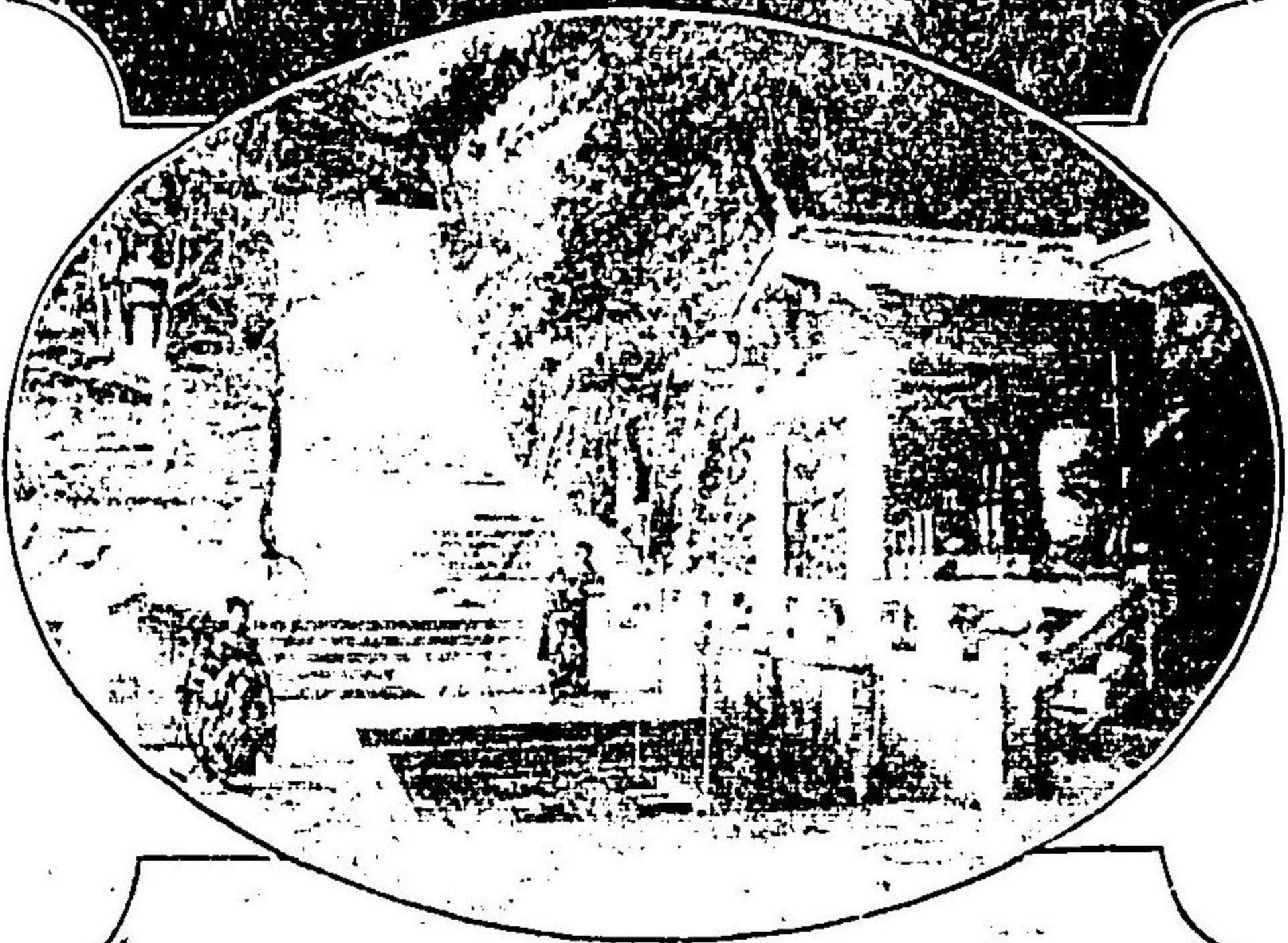
門山院恩知 下 寺臨銀中 殿極大都京上



ソイラクソイ下 原川

三條の橋の風は寒いの、夏はとてよかる、菅野風引くなよ、

音羽の瀧は馬の小便の様ぢやが、清水の舞臺は猫でなうては昇られた、



上 京都清水寺全景 中 音羽瀧 下 清水舞臺



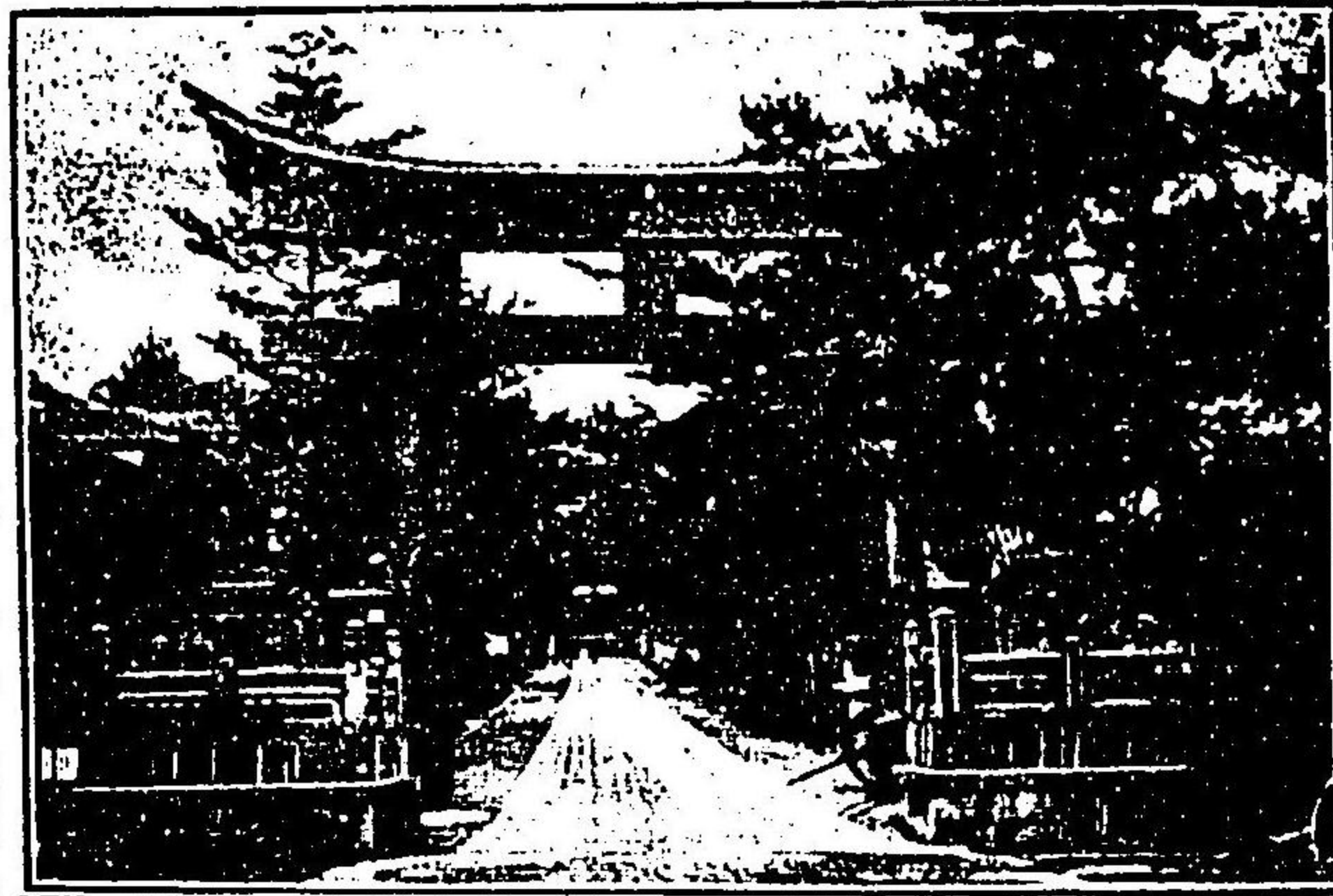
上 京都八坂神社 中 祇園夜櫻 下 京舞子

稻田姫はいくらも居るが、大蛇が居らいて大平の御代の有難いことのウ

永き日のながき綱引く高瀬舟



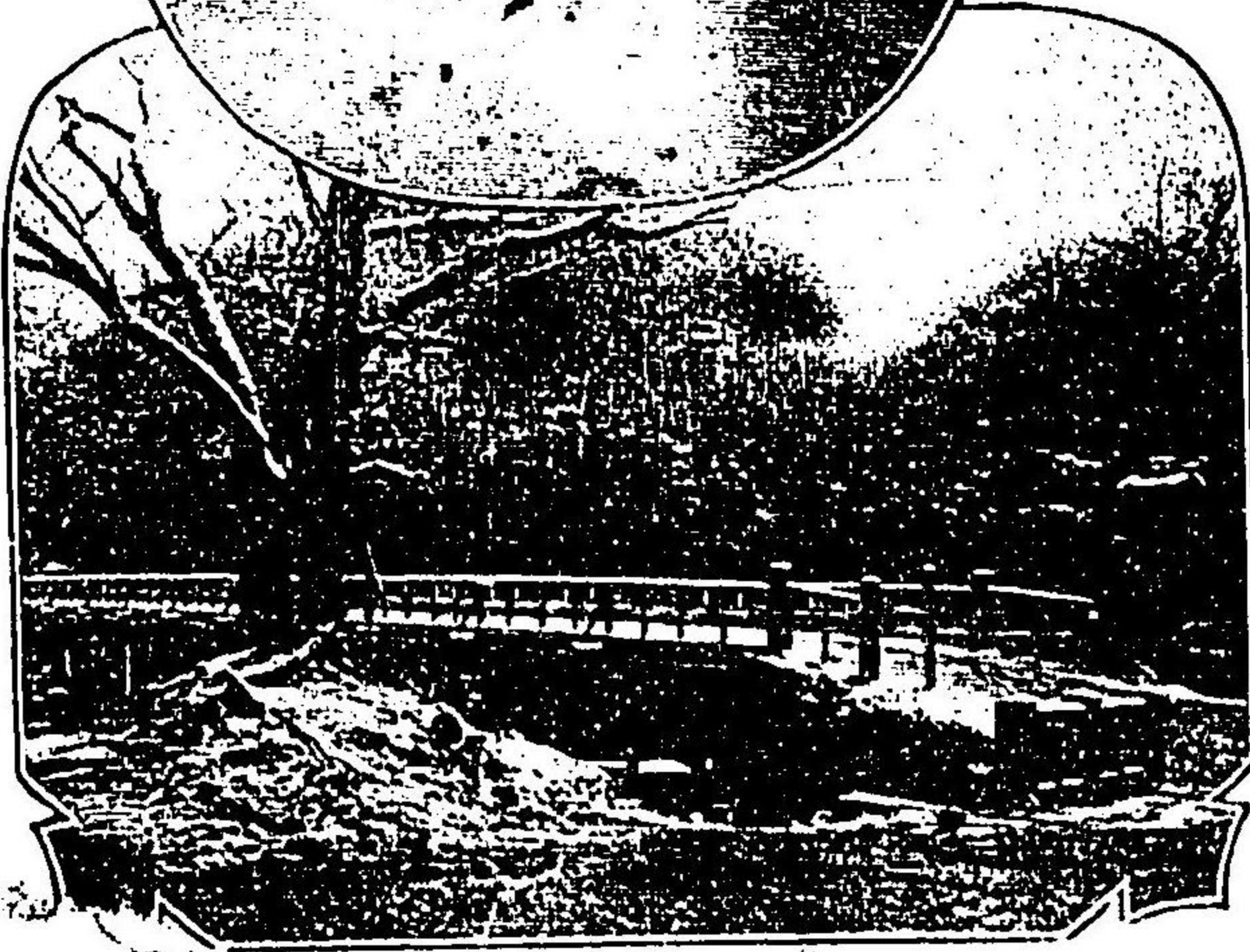
橋大條五下 川瀬高中 通條四都京上



寺願本西下 寺願本東中 社神荷稻見伏上

伏見に狐が居て、お東に女の髪綱があつて、お西に水吐き銀杏があるのはお化の三幅對ちや、

渡月橋はグサ／＼として運動に好い。



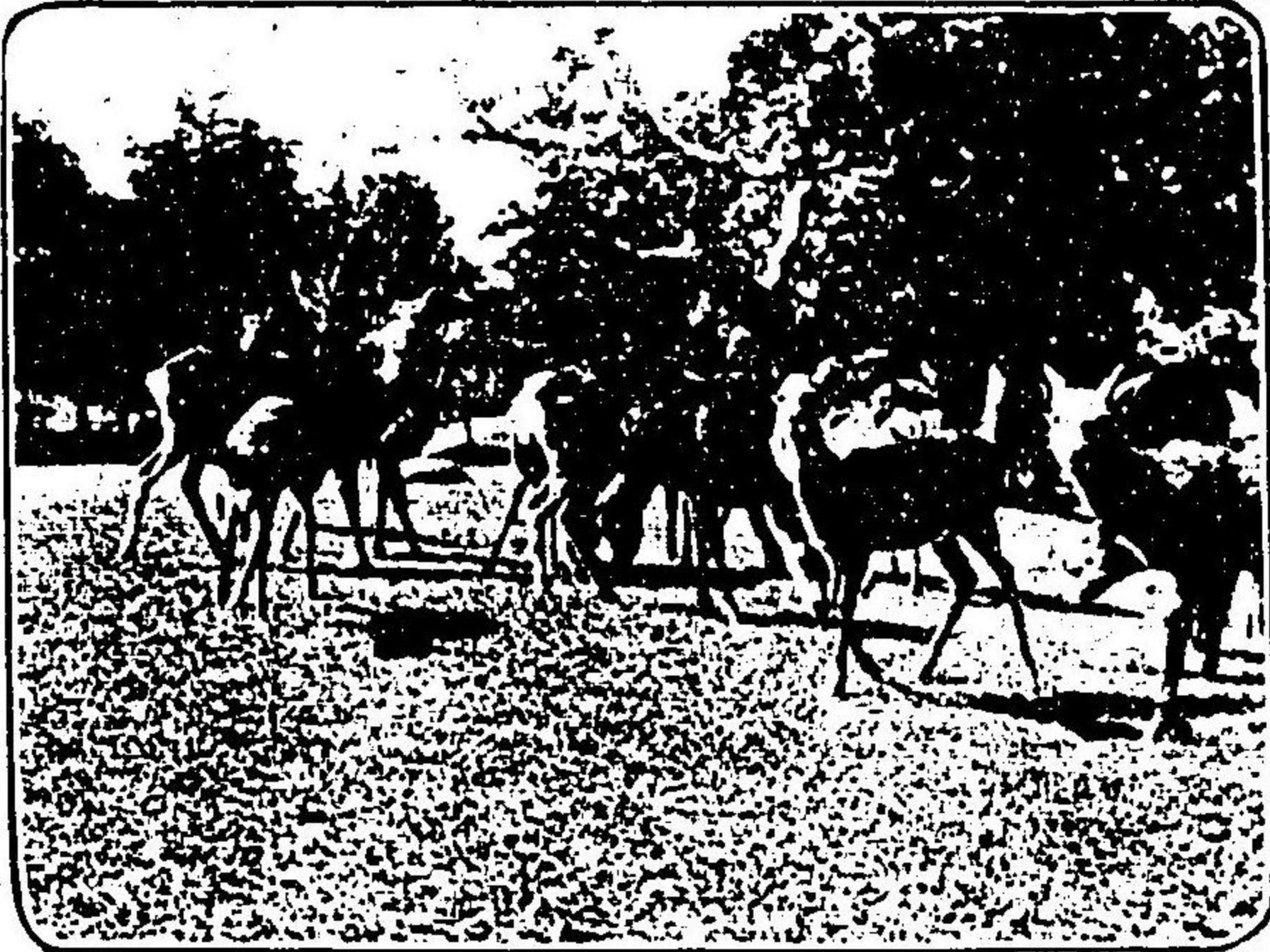
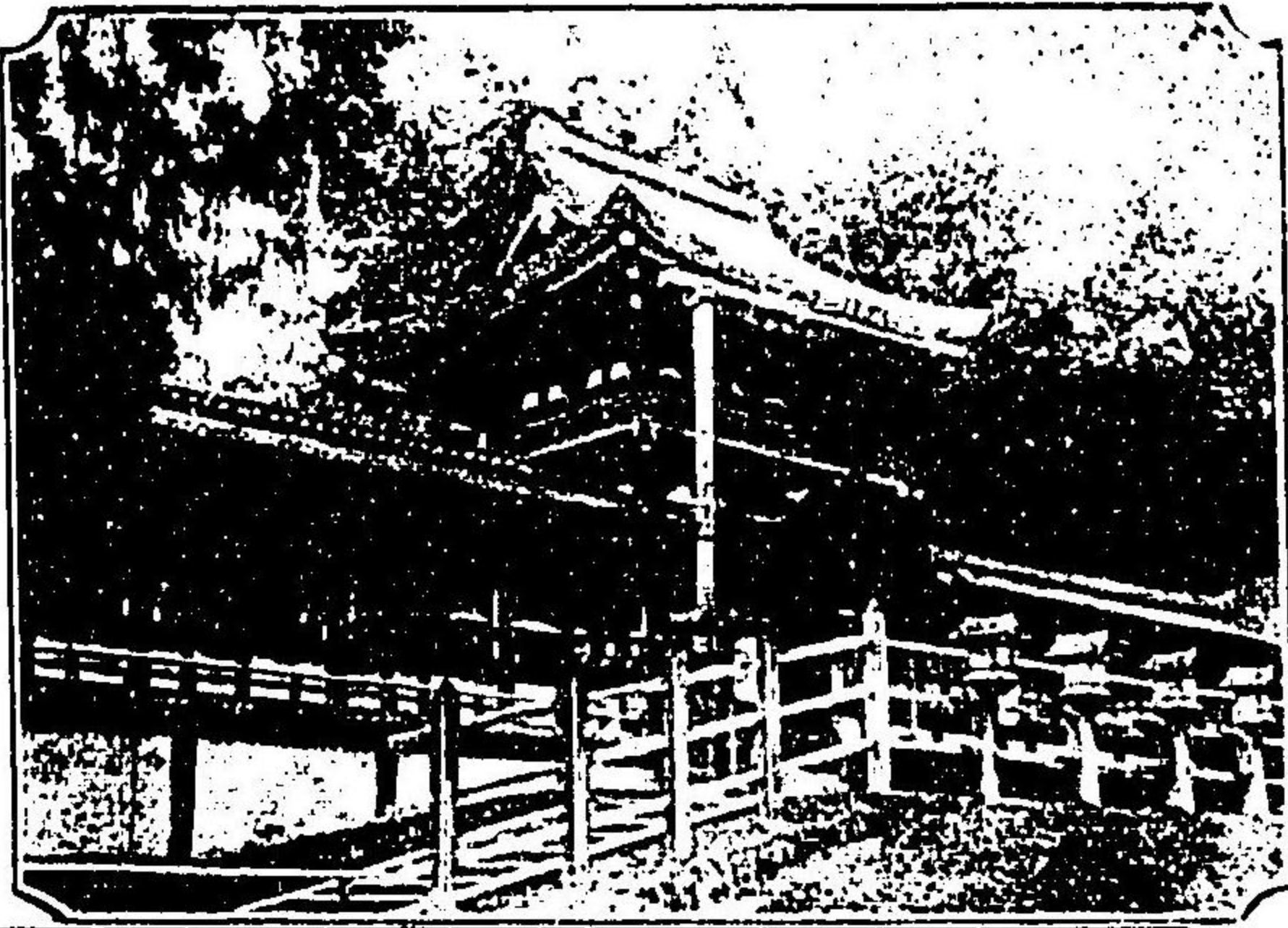
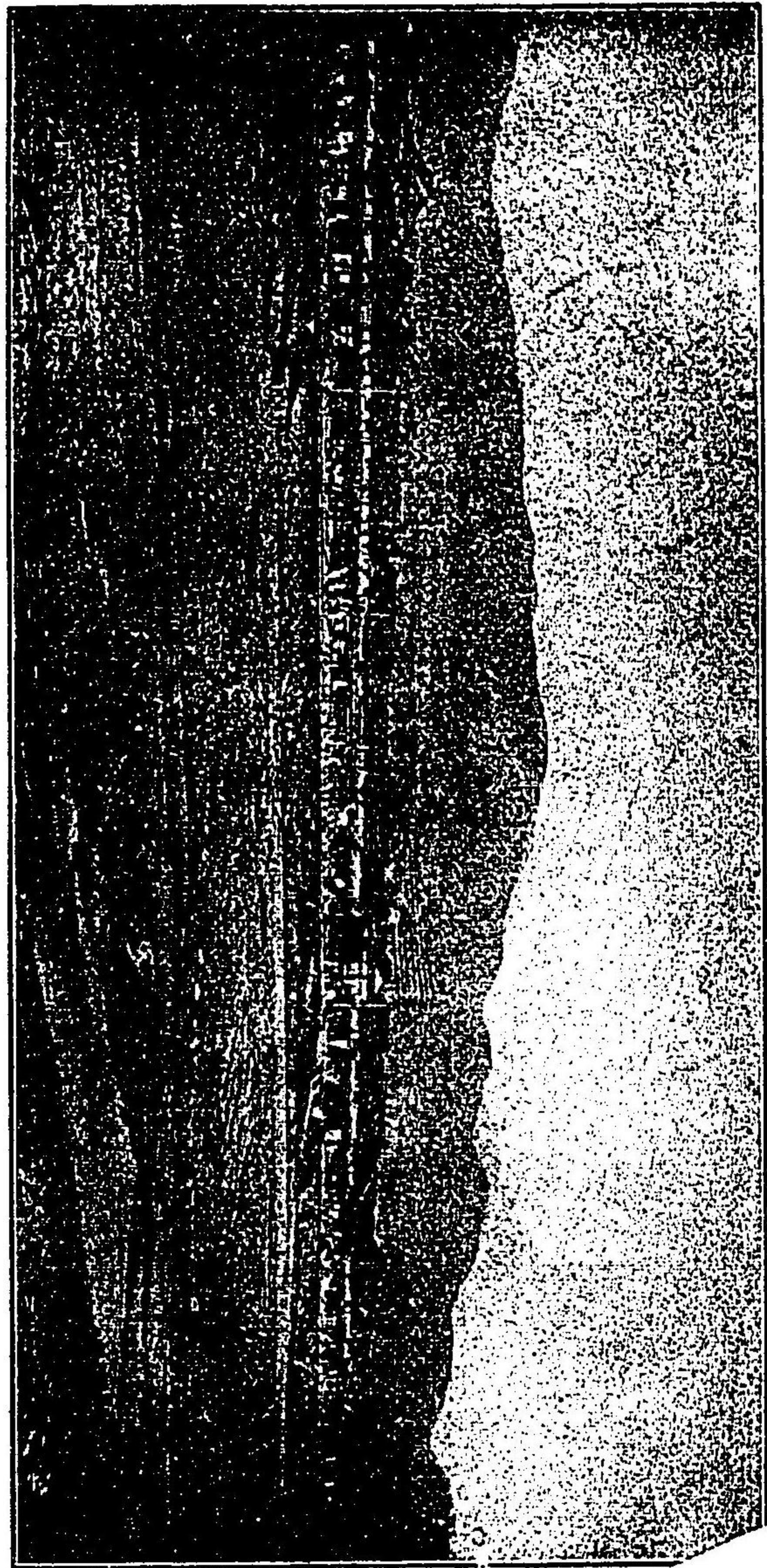
上嵐山 中保津 下渡月



行き／＼と眺が北山時雨哉



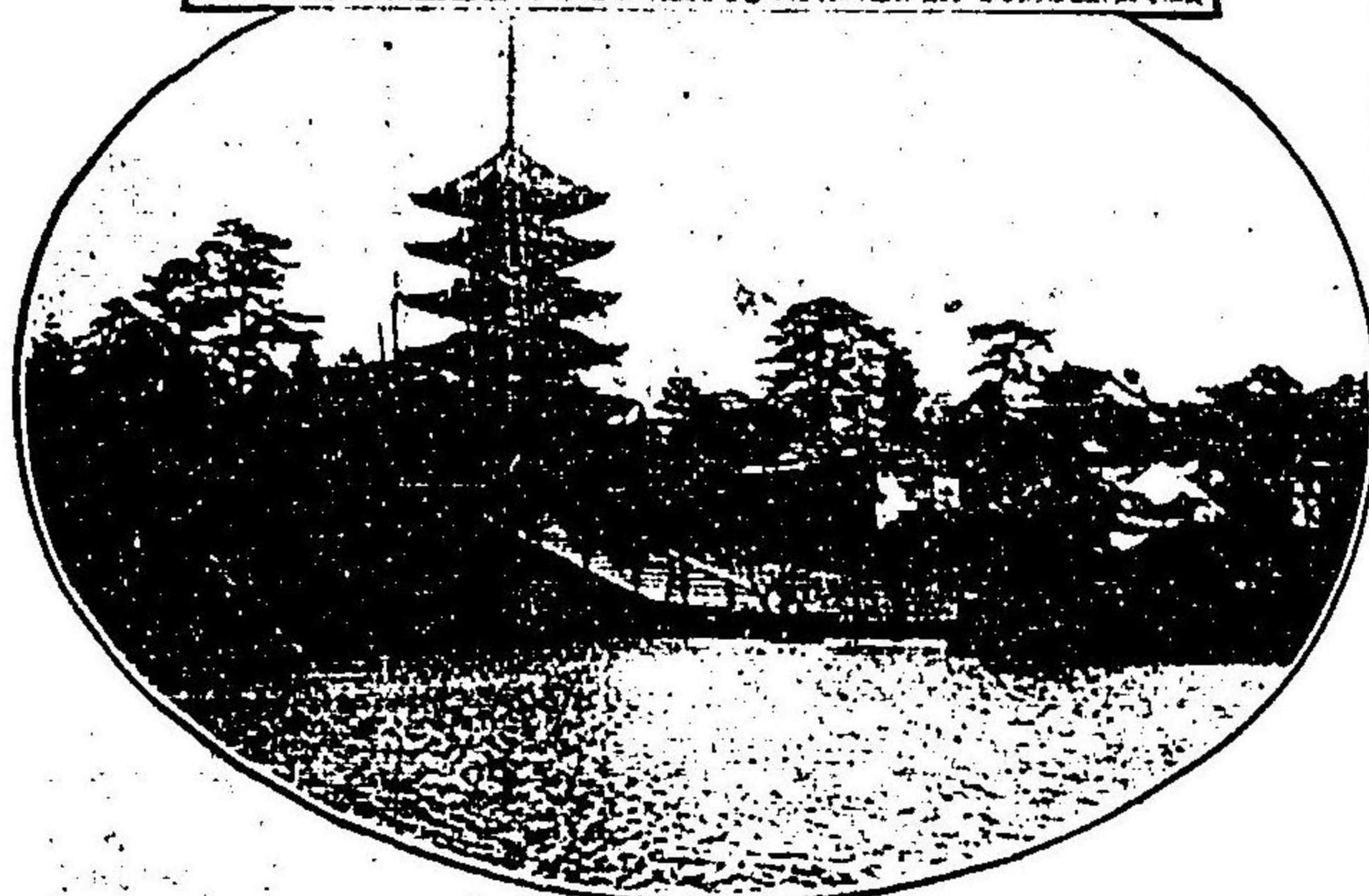
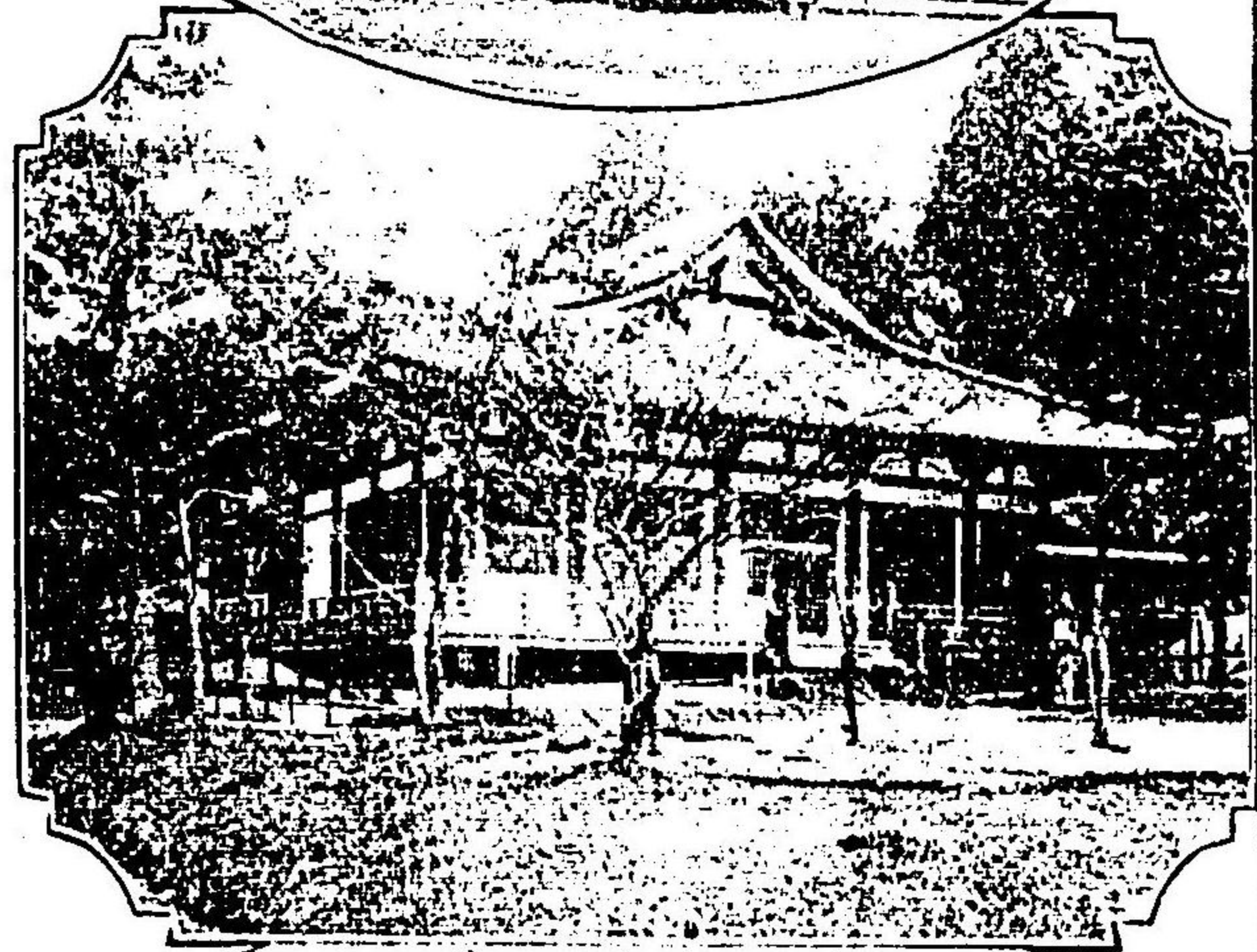
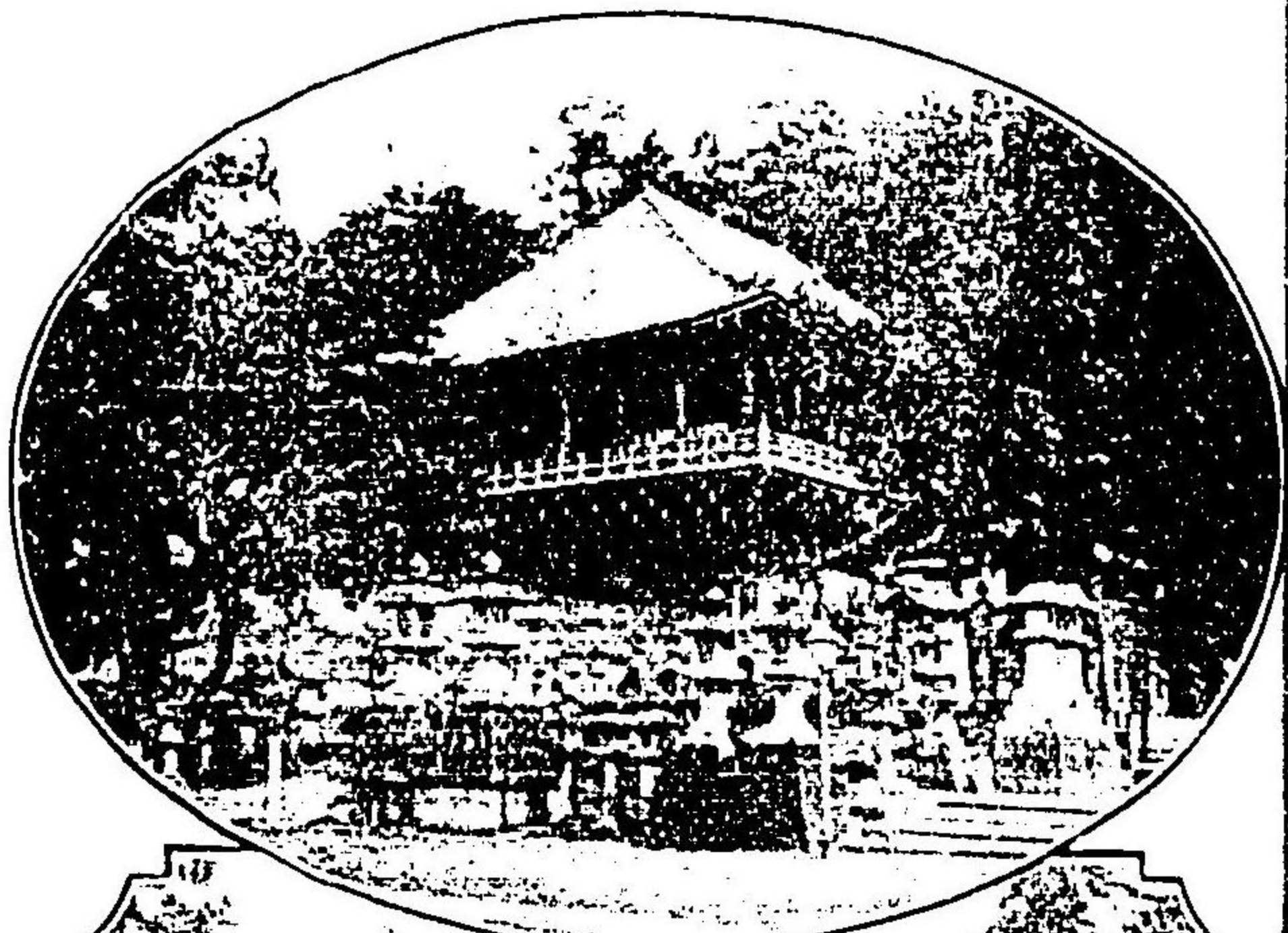
上京都北野神社 中平野神社 下金閣寺



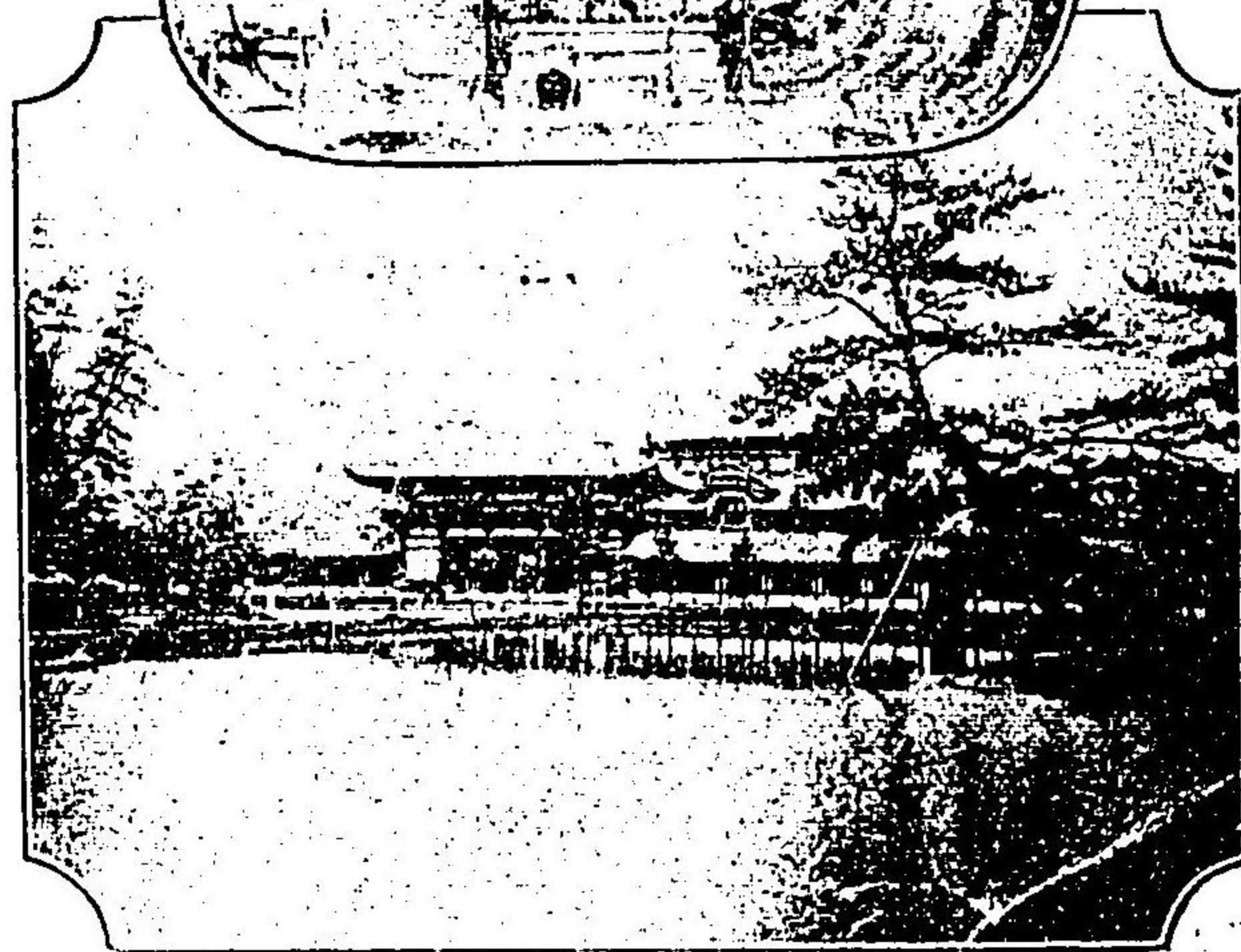
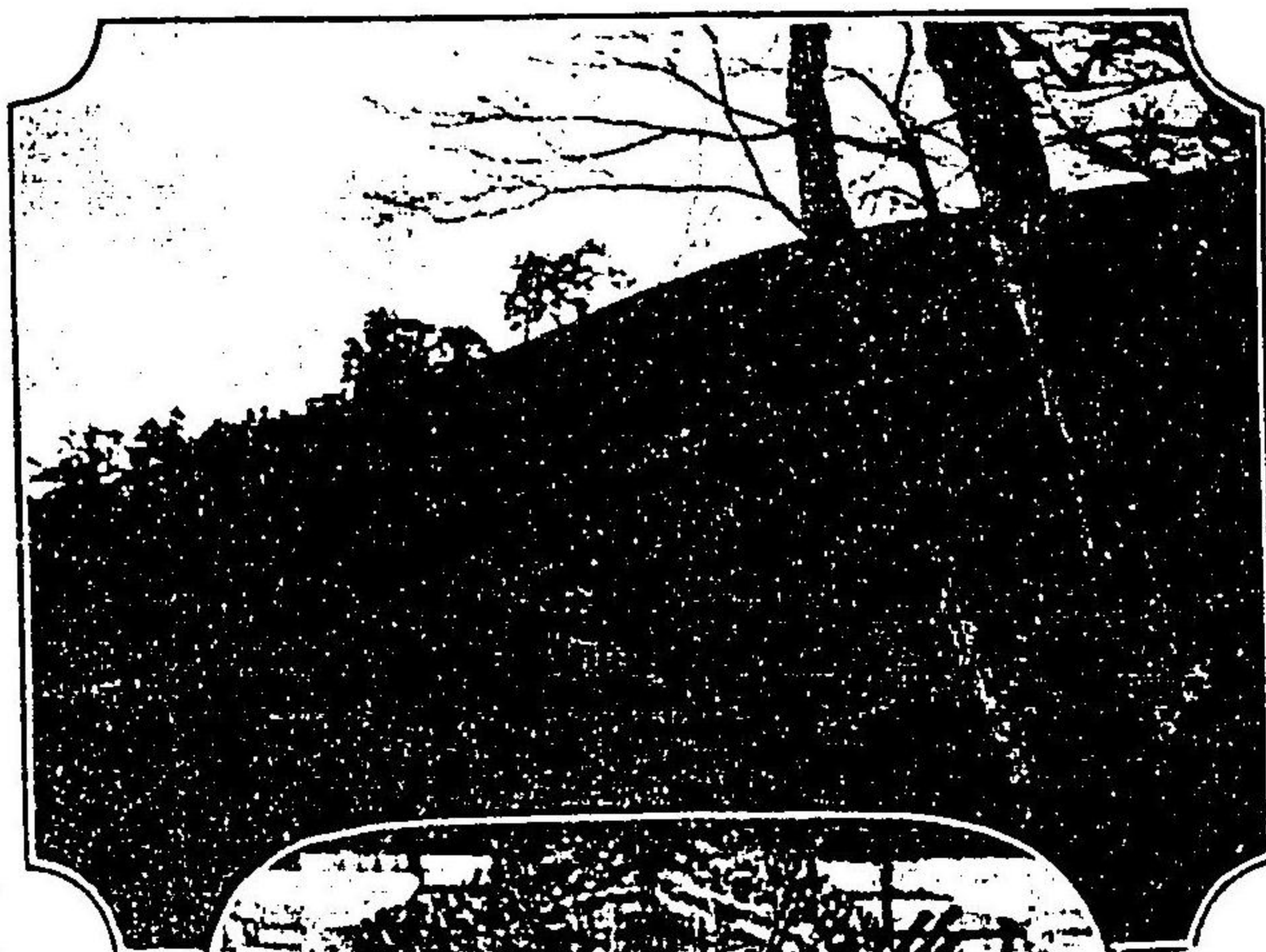
式切角鹿神下 鹿神中 社神日春良奈上

超高傳で鹿の事だけ覚えて居るわしは、奈良の土産話も鹿で持切りぢや。

昔野曰く、猿澤池畔の衣掛柳に、リボン飾っておひねのは、明治子の恥だ、



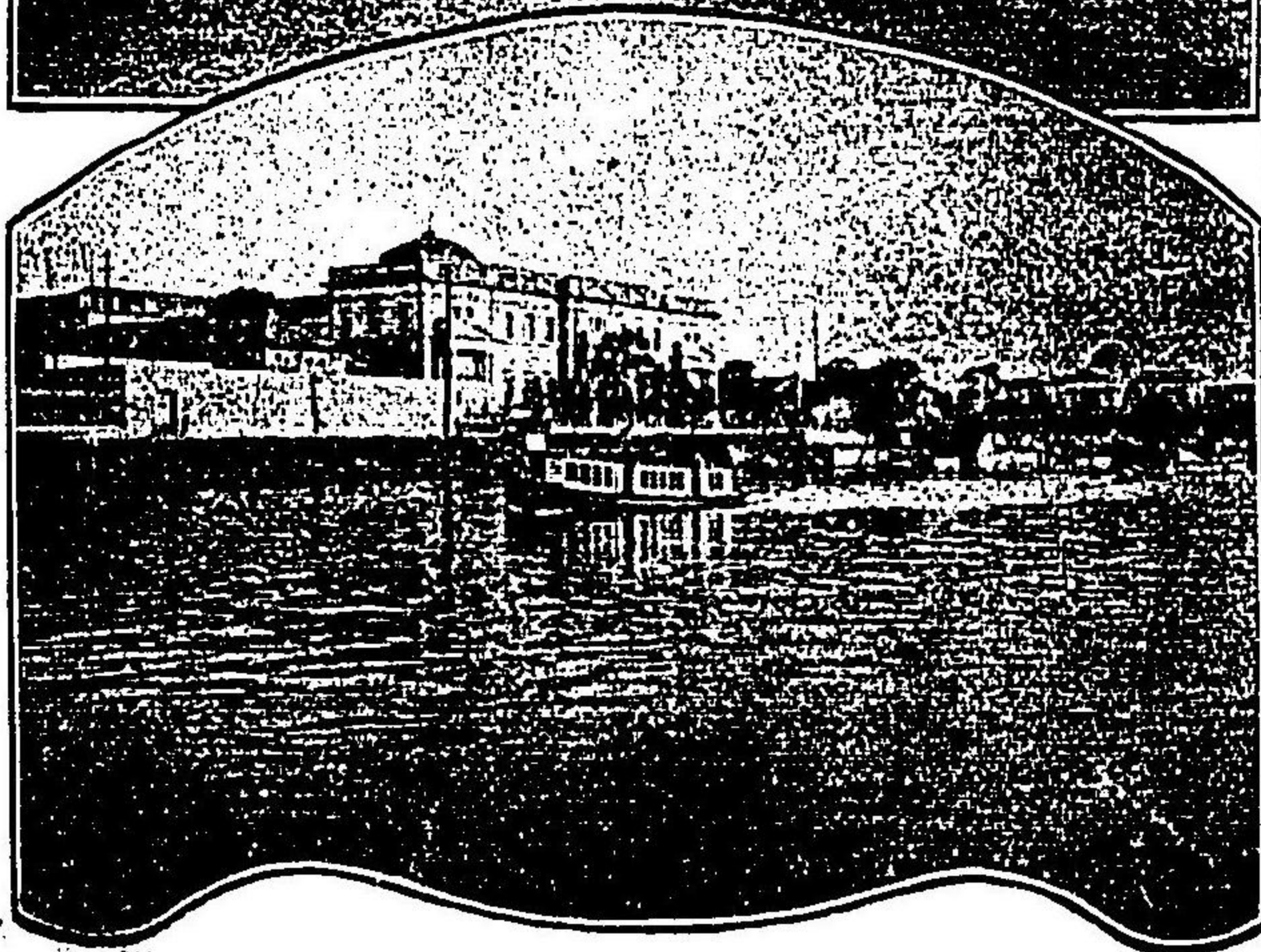
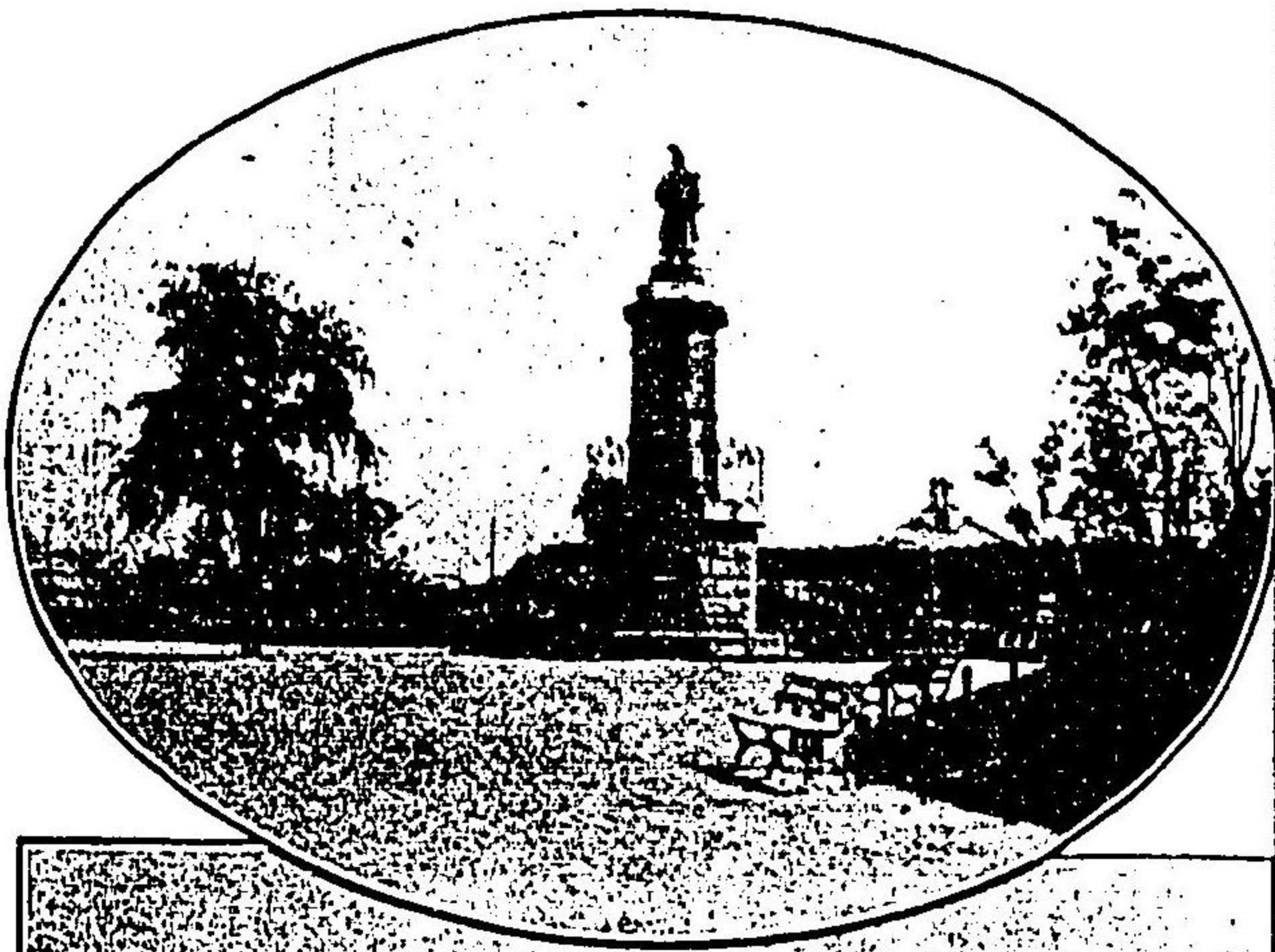
池澤猿下 堂月三中 堂月二長奈上



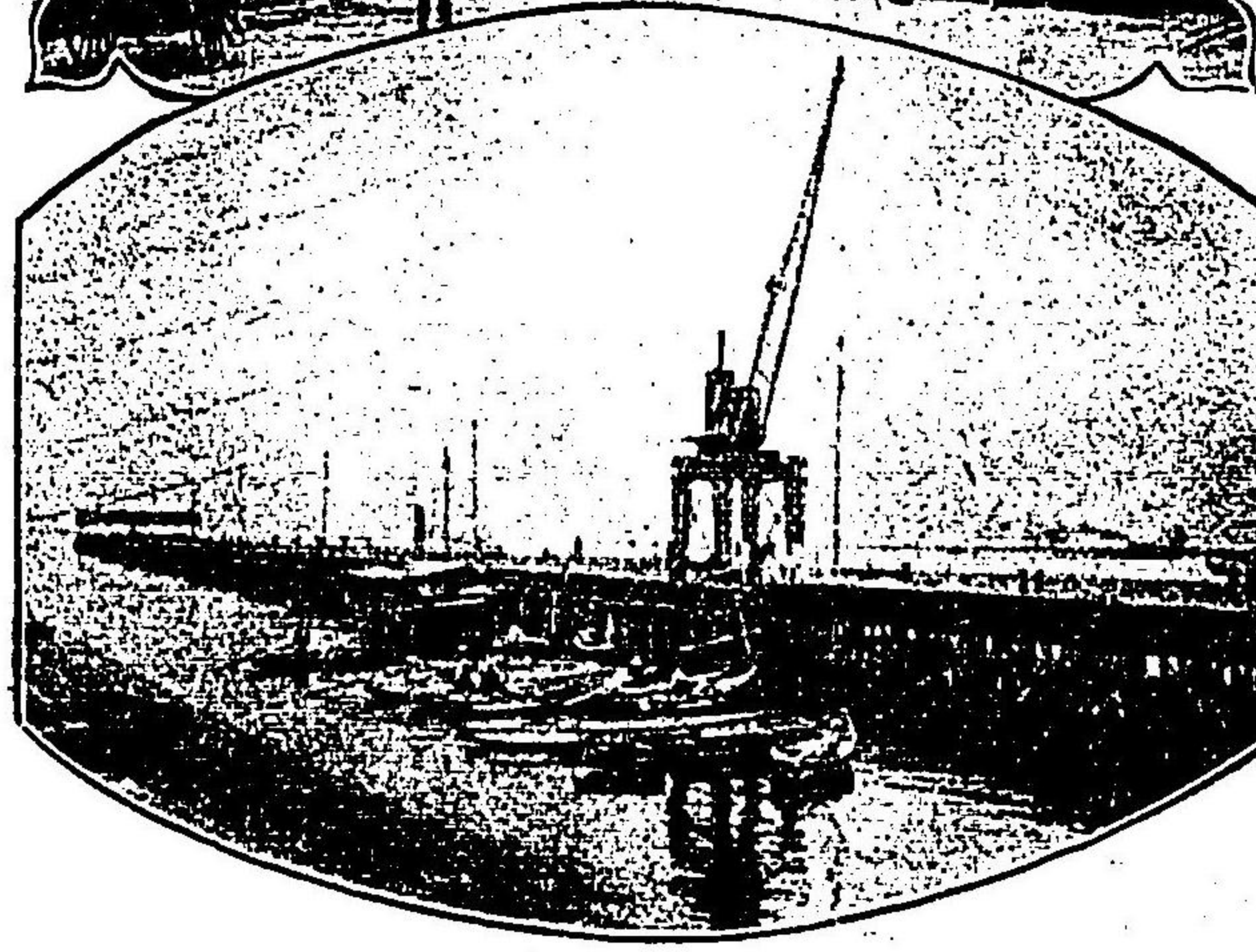
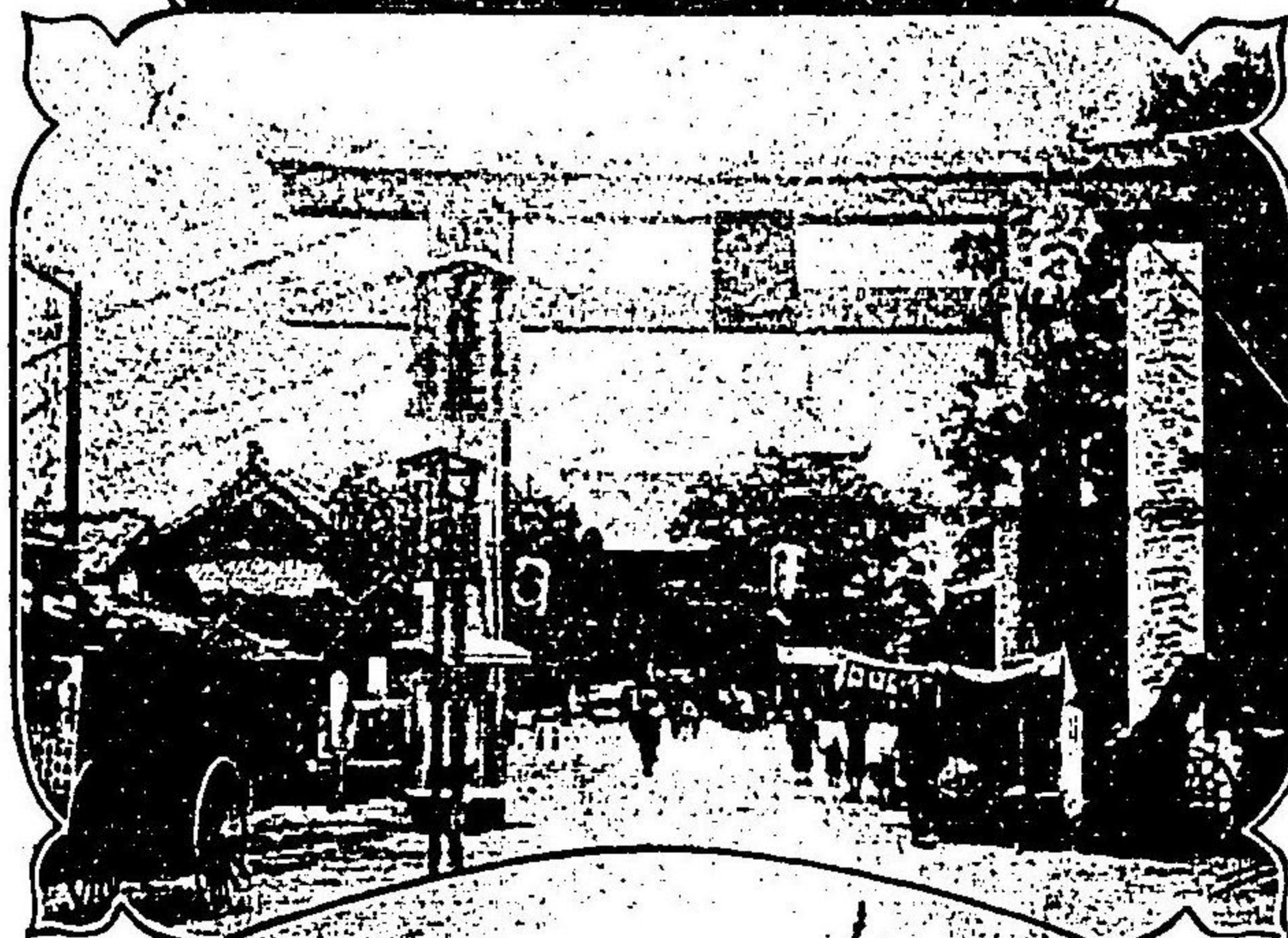
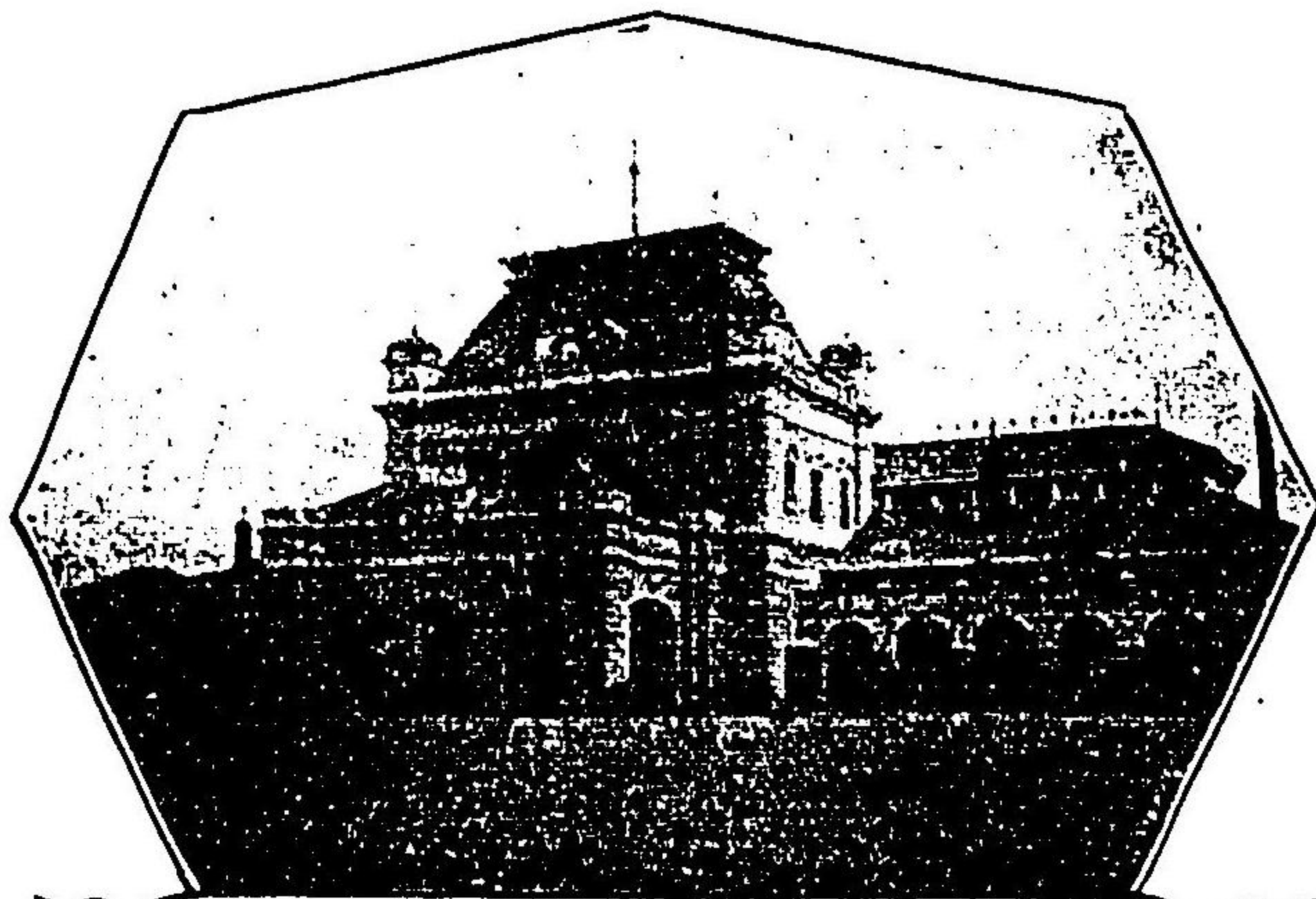
寺大東下 佛大中 山草嶺長奈上

大佛の脛の穴に垢が何斤たまって居るかと思へて見たが分らん。

中の島の公園を狭いと昔野はケナスけれどし、此處に此丈の地所を有つて居たら大威張だぞ、



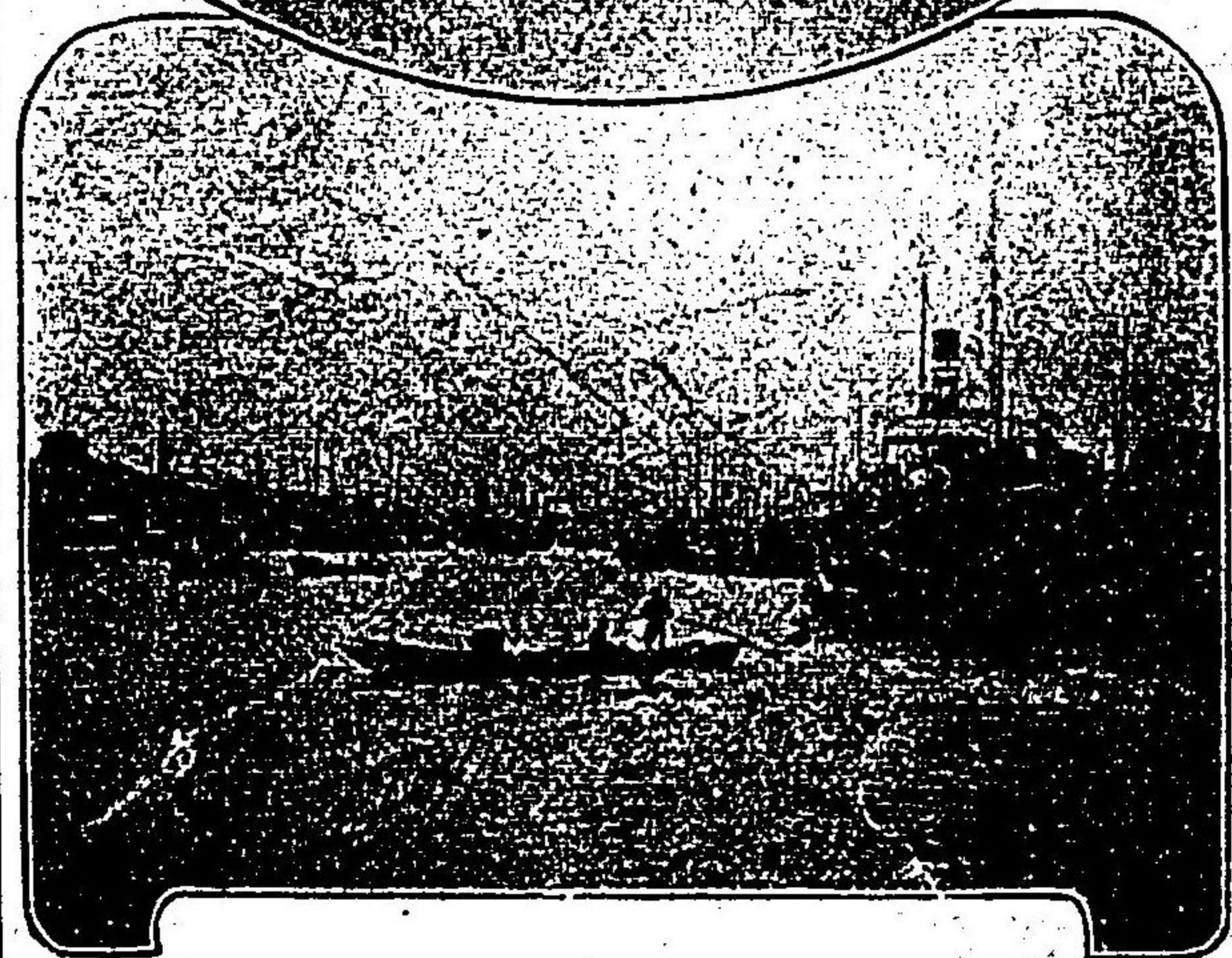
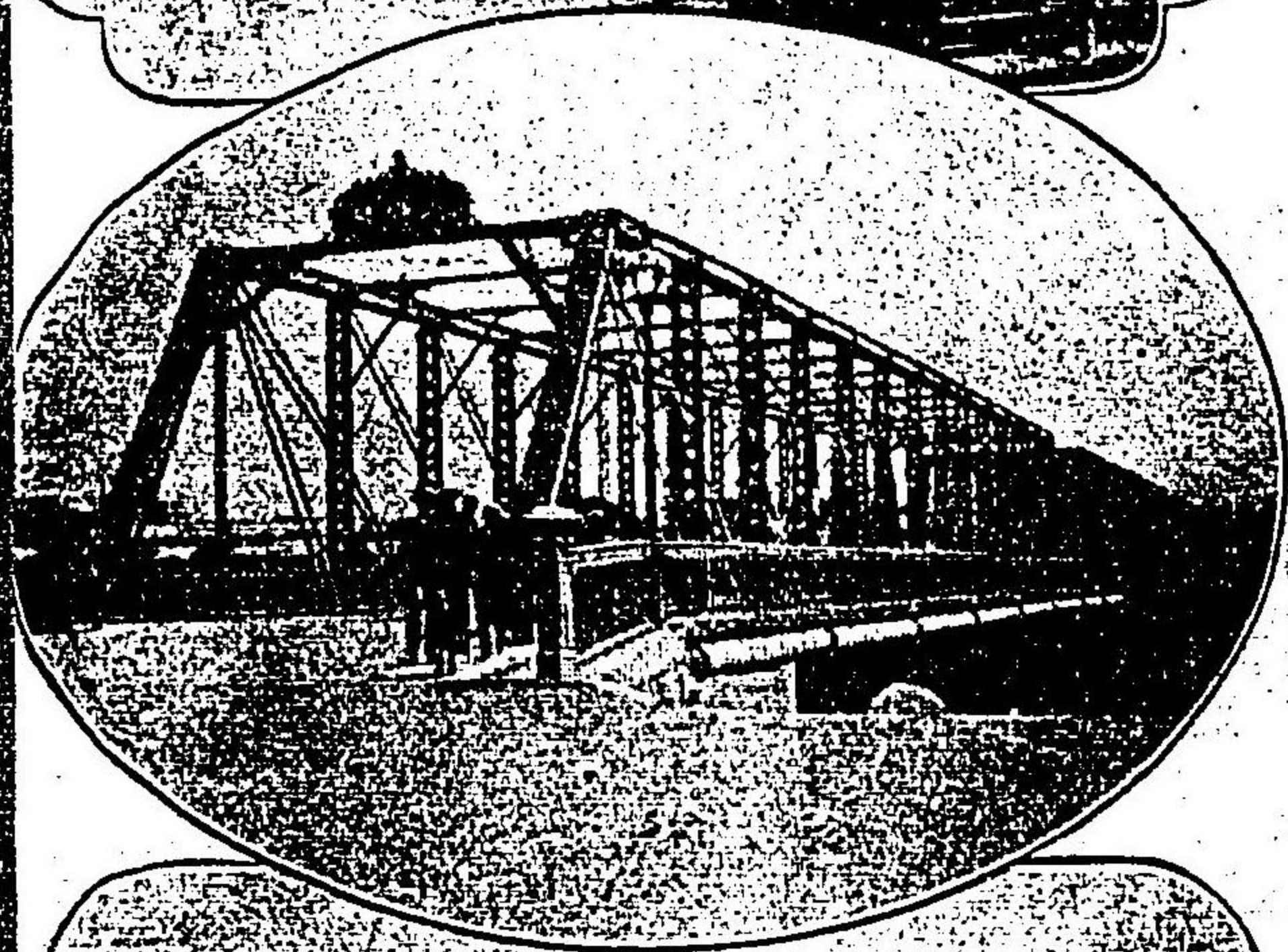
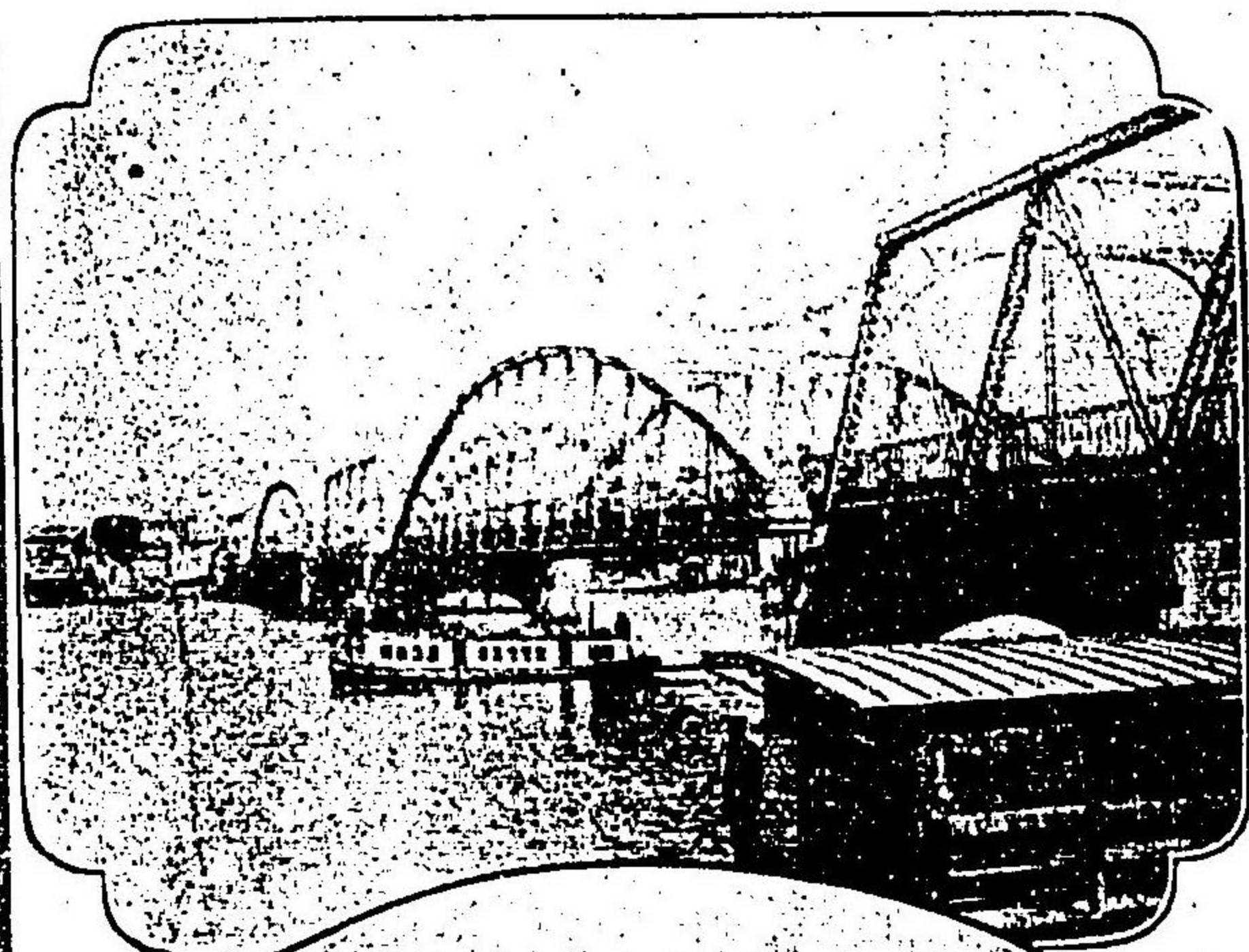
船航巡下 望遠島の中 中 園公島の中阪大上



港築下 寺王天四中 樓車停田街阪大上

四天王寺の鐘は鳴らぬので世界の名物、築港は魚釣場所で名高い

涼しきや橋の上より小便す



口川下 橋満天 中 橋神天阪大 上

上方見物

千

鳥

(1)

(二) 千鳥

三重の戸九重の都

時鳥と鮎鱒千鳥と豚

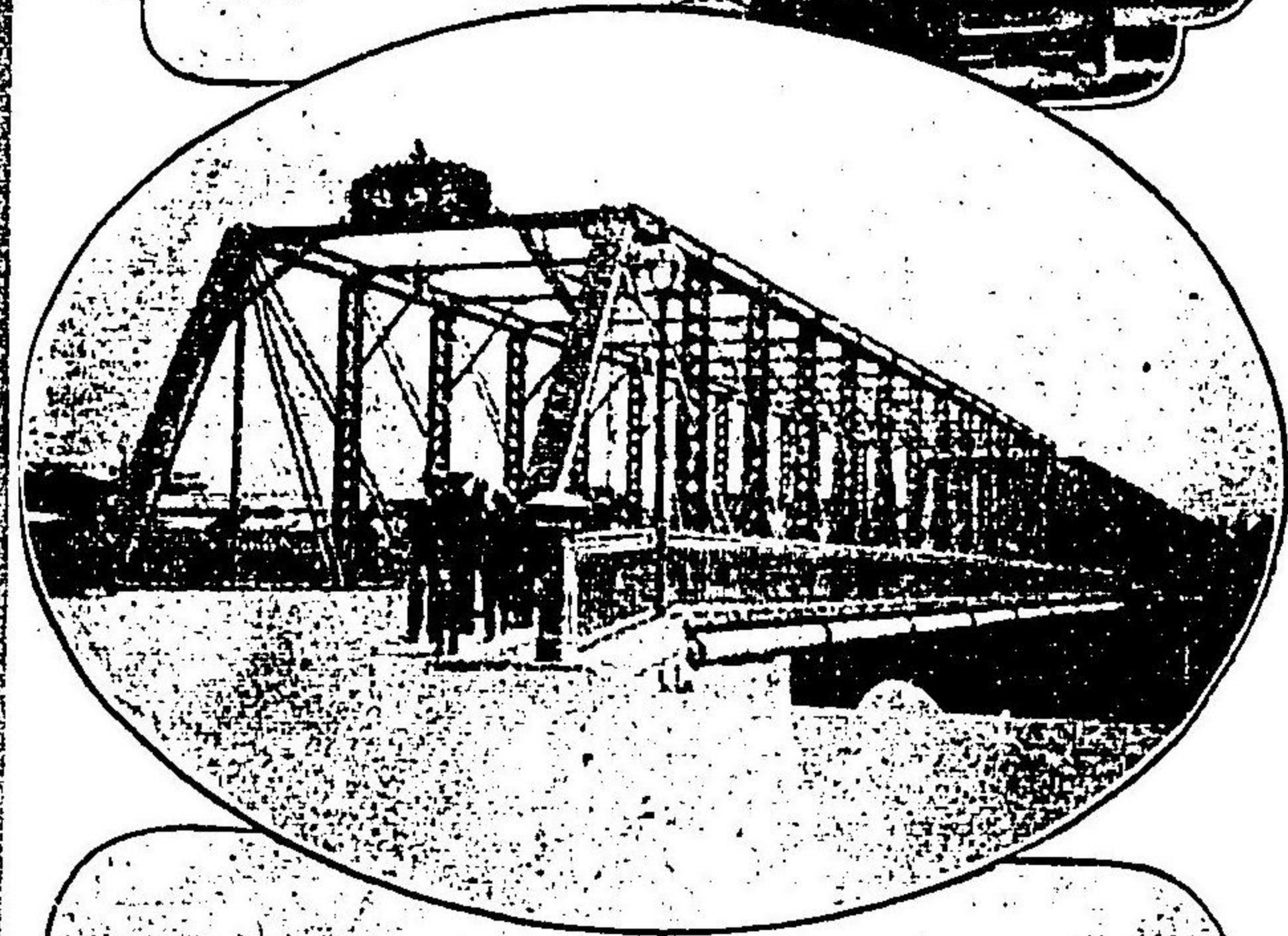
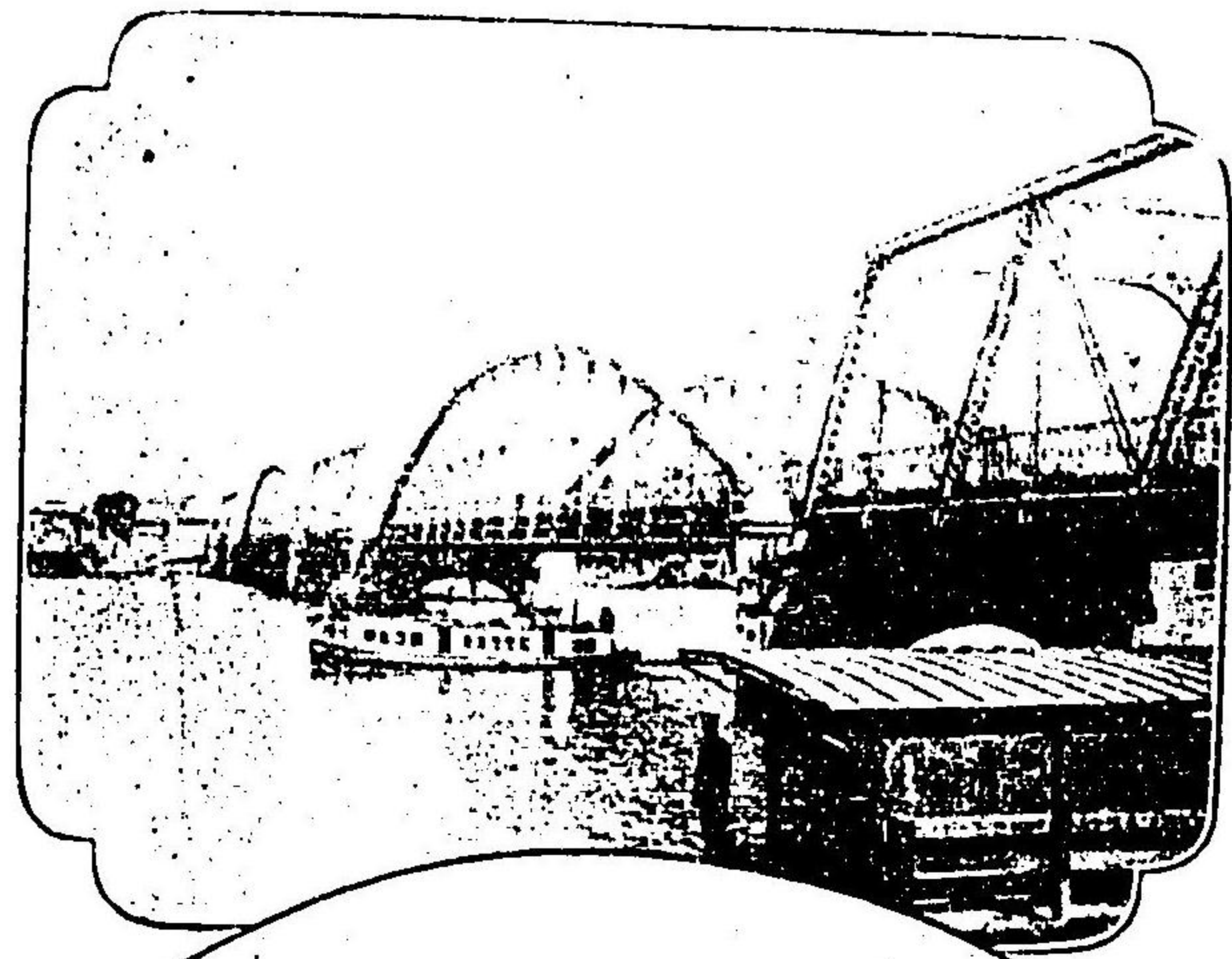
農閑で御座るに因つて上方見物を致す、甥の——關東大學文科三年生菅野骨

腸——花太郎が同行で御座る。

此處は京の三條ぢや、橋の東の旅亭の二階ぢや、障子の外に雨戸、其の外に玻

藪野 椋 十

涼しさや橋の上より小便す



口川下 橋満天中 橋神天阪大 上

上方見物

(一) 千鳥

藪野 椋 十

三重の戸九重の都
時鳥と鮎鱒千鳥と豚

農閑で御膳るに因つて上方見物を致す、甥の——關東大學文科三年生苔野骨
勝——花太郎が同行で御座る。

此處は京の三條ぢや、橋の東の旅亭の二階ぢや、障子の外に雨戸、其の外に玻

(1) 鳥 千

瑠障子が建つて、其の又外には欄干があつて最一つおまけに釘澤山の忍び返し
まである、四重五重にさてもく、嚴重なことぢや。京都は餘程物騒な處と見え
る、近江泥棒を隣に控へては、斯う幾重の防ぎも要らう、九重の都と言つたの
も此の理でがな。

た、今午前十七時ぢや、宿の者はまだ起きぬ、起きたかも知れんが此室にはまた
誰も顔を見せぬ。眼が覺めると臥床に居られぬ俺が性分、撥ね起きて前に所謂
障子と雨戸と玻璃と、幾重の鎖を順々に開け放した處ぢや。
地圖に照合せると、對ふが西山、右が北山背後は即ち東山、ぐるりぐつと山に
圍まれた、成る程山城ぢや。眼下の流れが正しく鴨川、ウ、寒、寒い風ぢや、
「川風寒く千鳥啼く」ち、と今啼くのが千鳥ぢやの。バンと鳴くのが鶺鴒、カ

アと鳴くのが鶺鴒、ヒーヒーと鳴くのが鶺鴒で、ホウ〜と鳴くのが時鳥——否
われは鶺鴒ぢや、ハテ其様な筈は無いが……

あれ復た啼く、ち、ゝ、怎麼でも千鳥、見たことは無いが千鳥に違ひない、一體
どんな奴か知らん、何處に居るか知らん、お、復啼くわい、「聲はするぢやが形
は見えぬホンにお主は時鳥」と盆踊に好う唄ふが、巧いことを言うたもの——
ホイ再差うた、時鳥ぢや無かつた。

那の聲の鹽梅では格別大きくは無さうな、眞にはや佳い聲ぢや、が、併し食
つてみたら美味は有るまいな、醜婦に往々聲の佳いのがある。話上手に實が無
く、滑舌の薯は粘りの足らぬものと定つて居る。

鶺鴒は家鴨より不味、繡眼兒は鮫鯨より不味、千鳥は屹度豚よりも不味からう

と思はれる。

『昔野、起きさしやれぬかのう。』

まだ睡て居るわい、太陽より後く起きて相濟まうか、人間僅か五十年、二十五年は睡て暮すといふに、甥の奴めは其の上二三割も増し睡を爲やう、總じて横文字は眼が疲れるかして此の頃の書生といふものは貪眠ない。

『ヤイ昔野、花太郎、起きんかヤイ。』

困つた奴ぢや、軒で返事をして居るわい、おのれ叩き起こして呉れうと、蒲團を引剥けば、流石に驚き覺めて、

『おッ叔父様もう起きたんですか、お、寒い。』

『もうも有るか昼を見い、七時過ぎだぞ。』

『春眠曉を覺えず……おや、處々啼鳥の聲がするぢや有りませんか、ね、』

ほら可愛い聲、何でせう、聞えませんか。』

『馬鹿、乃公の方が先に聞いてるわ。』

『何でせう。』

『千鳥と謂ふもんぢや……らうと考へてる處ぢや、食つたら不味さうぢやの。』

『うまい聲でさ、可愛い聲だ、超俗の韻だ、叔父様どんな鳥です、えッ判らないんですか、波に千鳥の模様で熟知の形、一目して識れさうなもんですね、まだ見えないんですか。』

とあせり立て、甥も起き上つた。河原には五六人の男が小桶を兩足に穿いて大

根を洗つて居るばかり、昔野が眼にも千鳥は見つからない。詮議最中に家婢が来た、早速之に質問に及べば。
『それは千鳥に違ひおへん。格好どすか、背は茶色腹は白うおす、足は紅うて千鳥みたいに斯やつて歩くんどすエ。』
身振をしての講説分明、さてこそな、千鳥みたいに歩くから鳥の名を千鳥と命けたものぢや？

(二) 種 痘

大久保湘南—吳越同舟
白う若う、美しう京妓

『叔父様大變です。』
新聞を讀んで居た昔野が叫んだ。

『乃公が、何が大變ぢや。』

『貴方の事ぢやありません、天然痘です。』

『天然痘が何で大變ぢや。』

『湘南が大變です、大久保が死んだんです、享年四十六、嗚呼哀しい哉。』

『四十六で痘瘡に罹つたのか、それぢや乃公も油断が爲らんど。』

『四十六は珍らしくは有りませぬ、此の間七十三の婆さんが種痘善感と云ふ

のもあり、天然痘患者に五十七の爺さんさへ有つたんですから。』

『愈以て心許ない、乃公も種痘をして置かずばなるまい。』

『私も爲ませう、湘南は漢詩人、私も憚りながら菅野骨腸、新詩人です、同じく詩人で有つて見れば、甚だ危険です、さあ直に種痘をやりませう。』

吳越同舟の厄難ぢや、俺と甥と此れ位意見が一致した事は無い。早速宿の者を呼んで近所に種痘をして呉れる醫師の有無を訊ねた、宿の娘が電話に掛つて交渉を開いたが成るべく大勢で来て呉れとの注文で、旅宿の者も三人同行するといふことに爲つた、今から一時間後にと。

俺も小兒の時には種痘をしたことが有つたが、西南戦争此の方一向に無い、幾何か痛かつた様に記えて居る、何にしる生身に及物を入れるとぢやから、一通りの覺悟が要る 見苦しい最後——まさか其れ程の事でもないが見苦しい痛さうな顔を見せては末代までの恥辱、田舎漢の名折なり、事小なりと雖も輕ずる

勿れとは此處のことぢや。

『菅野、確かり腹を拵へておけ、それから禪を好う緊めてのウ……其れから

唱へ言が有るて。』

『叔父様其や何の事です。』

『まあ好いから飯を食へ、善う嚼んでのウ唾液を十分嚥み込んで置くのが秘法ぢや。』

打連れて門を出れば、宿からの三人は十九に爲るお月さんといふ姉娘と、其の妹の十六のお沙さんと、今一人は忠坊とて五歳の男の兒、一町ばかり横町に這入つて、全科醫何某と陶札の格子を潜る。

控處の大火鉢を圍んで先着の人々が聾々と詰め合つて居る、和尚さんが二人、

小娘の恐ろしく白いのが一人、少し更けて蒼白なのが二人、俺より年長らしい婆さんが二人ぢや、それに我等が五人一緒に爲つたから、六疊の間は一杯。苦野は旅宿の姉妹と何か耳語いて居たが此度は私の耳に近く、「藝妓ですとさ、いゝえ小さいのは舞妓です」と教へて呉れた。成る程美しい者だと思ふ中にカラリコロリと下駄の音が戸口に止まつて、また来た、此れも白い、若い、美しい、舞妓に違ひないと今度は苦野が教を俵たすとも判つた。此妓にも梅干婆が跟いて居る、先着の婆共も同類に違ひない。皆な番人に附いてるのぢやらう、番人ならもつと倔强なのを選ぶ筈だが、或は引立役に態々此んな汚い婆を伴れるのかも知れん、計略の一つぢやな。

(三) 種痘下

俺はまた若い、疱疹盛り

笑中の劍、塚原卜傳の氣合

お先にお出の方から御順にと、看護婦が呼び込むと、和尚さんが一人、襟卷の白縮緬を外づしながら奥に這入る。

種痘の方はどうぞ御一緒にとの聲に、俺等が立つ、残りの婆さんも娘も小娘も一度に立つ、みんな種痘のお客ぢやつたのぢや。診察間の窓の下に先生が椅子

に靠けて御座る、二十二三の肥満た黒鬚の、上手さうな仁ぢや。まづ以て帳面に氏名年齢を記入されるので、一々に訊ねられる、藝妓は明治二十三年と二十

四年、舞妓は三人共二十八年生れと答へて居る、流石に此處では本當の齡を言ふぢやらう。婆さんの一人が弘化三年は一寸驚いた。今二人は嘉永ぢやといふ。此に比ぶれば俺はまだ若いものぢや、疱瘡盛りぢやと聊か頼しくもなる。

『ひくじふと？ 怎麼字を書きますか』とは又此先生も無學なものぢや、木扁に京都の京の字で御座ると言つてやつたら『あゝ左様か』と點頭かれた。

帳合が丁つて直に種痘が始まる、先生は小刀の尖に玻璃皿の疱瘡の種を着けて待構へる、第一番は舞妓ぢや、八ッ口から手を出して長い袂を後に撥ねて肩を捲り上げると上膊が現れる、ふツくりと温か相な白い腕ぢや、なれども顔面の割には白う無い。看護婦が水薬を布切に浸けて上膊を洗つてやる、舞妓は心配さうな顔を強ひて平氣に装うて局部を凝視めて居る、何となう哀れに氣の毒な

ものぢや。先生は心地快げに其の腕を引提へて、

『痛い事してやるぞ、はゝはゝゝ』

『いやどすえ。』

早速に答へて舞妓も笑つた。

『えらい處で敵打ちや。』

と婆さんの一人が高笑ひ、環視の十餘人も皆微笑む、其の拍子にチヨイ〜と種痘られて了つた、所謂之が笑中の劍ぢや。笑つた拍子にチヨイ〜萬事此の氣合ぢや、此さへ呑み込んだら醫道は開うても門は賑ふ、先生お若いの中々御心得が有る、塚原卜傳から荒木又右衛門に傳へた劍道の秘訣も此れぢや。

痛さうでない例が目前に示されたので残る面々も安堵した、平氣に進んで腕を

まくり出すと、先生さつさと片端から種ゑてのける。藝妓も濟んだ、婆さんも濟んだ、宿の姉妹も濟んだ、俺も昔野も無事に濟んだ、忠坊一人が最後に残つた。

控處に歸れば又もや白い女、蒼い女、梅干婆、坊主頭の一群が火鉢に簇集つて居る。門を出ればヒイ〜と診察間の方に忠坊の啼聲が聞える。はて卜傳流の氣合も子供には利かぬものと見える。

(四) 一 力

京都名物—天下の至廉
チラ〜雪—章魚の足

親切中毒—炬燵半

叔父様愉快でしたネ、京都名物を一時に觀たのは、實に奇でしたネ。

昔野お前は何をお見やつたのぢや、名物ちふのは。

僧と美人、是れが京都の誇でさ、其れを端なく今日一堂の中に併せ觀ることを得たのは偶然の好機ぢや無かつたですか、亞米利加では一回の種痘料が二三弗といふのに、三十錢で此の名物の縦覽を兼ねさせる京都の種痘料は、天下の至廉なるものでは有りませぬか。京都は物が廉いといふのは全くです。

「お、物の廉いは結構ぢやが、坊さんと妓が何も京都の名物とは限るまい。」

「さうで無いです。西京から僧侶—寺院を取つて仕舞つたら残る名所が幾

何ありませう、更に美人―妓女を除いたら、舊都の名物は此頃の底冷と豆腐ぐらゐなものませう、つまりませんや。』

『さう言へば其んなものかのウ、兎に角京都は偉らいッ、各宗の御本山は皆此處に在るのぢやから、年に幾十萬の信者が各地方から御本山参りをするで太した錢が落ちるぢやらうテ。其れはさうと此の町は何ぢや、同じ様な家ばかり列んだことぢやが。』

狭い路を挟んで、左も右も一樣の家作り、二階立の三四間間口、軒別に角行燈が有つて妙な處ぢや、御規則で、此の様に揃ひの家作をさせたものかも知れぬトある家より女が出て来る、若い、美しい、眞白な顔の、けばくしい五色取り雑せの着物を穿て居る。

苦野、何ぢやらう、一體此町は。

『さうですネ、私も京都は始めて、勝手が判りませんが……お待ちなさい地圖を出して見ませう、え、此れが三條の大橋だ、橋の東から南にすウつと下つて斯う轉つて此んな風に行つたんだから、お、判つた、叔父様、此處が、その、花街でさ、祇園の何とか……大石内藏助會遊の地も大方此の邊なんですせ。』

『大石殿の、それは有り難い土地ぢや。櫻井驛か養老の瀧、靈鷲山にも陳蔡の野にも比すべき處ぢや、一方の御舊蹟は何處であらうか、其處等の行燈を讀んで見なされ。』

折からチラノ、雪が降り出して来た、吉良屋敷打ち入りの時も思ひ合はされる

義士面々の御艱難に較ぶれば、一力を採しあるく位は何んでも無い事と、勇を鼓して經巡る中に、魚屋の前を通る。章魚の足がぶらりと吊り下つてある。

「此ぢや、大石殿に無念涙を絞らせた此の章魚奴も敵の片割ぢや。」
と感慨坐るに歩を停むれば。

「叔父様、私は水洩が出て、何んだか風を引いたやうです、歸りませう

おゝ寒い。」

弱い奴ぢや、今の若い者は頓と意氣地が無い、雪でも霜でも白いものを見れば幽霊の袖にでも撫でられたやうに縮み上つて了ふ哩。

風邪を引くといふに無理に伴れ歩くわけにも行かぬ。旅宿に歸れば今朝の痘瘡連の娘達が飛んで出て無寒かつたらうと口々に親切な言ぢや。座敷に炬燵が設

けてある、お年寄りはお寒からう、早くお暖りなされと、其の親切が氣に喰はぬ、いや親切は辱ないが年寄扱ひが其の意を得ぬ、勿論此家の娘達より年長に紛れは無いが、親爺様は俺よりもまた年長ぢや、百には間が有るといふて湯で盥嗽はお使ひなされぬに、其の子供たる俺が、今日位のチロ〜雪に炬燵に這入つて申譯が有らうか、寒がるのは若い者、風引いたのは昔野ぢや、炬燵なら花太郎ぢや、俺には要らぬ御親切ぢや、旅のお客に此の通りなら自家の子供は日かな一日炬燵牢に入れておくぢやらう、炭の香に酔うて可惜元氣は鈍つて了はう道理ぢや、千百年來、いつも〜田舎武士に蹂躪られて、揚句の果には朝廷様にも愛憎を盡かされて『舊き都』と零落れたのぢや。

(五) 方 角

磁石のいらぬ京都は經濟
無隣庵の塔は何處に在る

東山巡りを致さう。

此地圖が有れば案内者も車夫も要らぬ、圖の裏に名所舊蹟の謂はれ因縁まで記してある。總じて京都といふ處は眞に歩き好い處ぢや。東京には二月も居たけれど頗と方角が解らなんだ、天氣が好ければお日様のお出ましなさる方が東ぢやといふ見當で、西も南北も其から割出されるけれども、曇つた日には其れがならぬ、天氣が好うても十時頃から二三時までには又方角に迷ふ、夕日になつて

纜と西の見當がつく位なものぢや、時計に磁石は附いて居るものゝ、怎麼かすると此磁針が引つ傾いて動き居らぬ。振り蓋かいて漸々水平に爲つた處で、磁針に南北が書いて無いから、孰が孰か、全然南北を取り違へたことも有つた。眞直で京都の道路は好い、東に向つて進めば何處迄も東、西に向へば必ず西に行かれるのぢや、其れは當然の事ぢやがと故郷の者共は嗤ふか知らぬと、東京といふ處を見物せぬ者の狭い了見ぢや。東京の街衢は不都合千萬なもので、磁石を見定めて是れなら俺の鼻は南に向つて居るぞと確めて、さて、一筋に進んで行くうちに、何時の間に路が迂曲つたか、飛んでも無い方角に行つて了つてゐる事が有る。

京都にはまだ好い事がある、四方山に圍まれて居る、それが皆目標に爲る、ま

づ俺は東山に見當を附けたのぢや、あの鬱乎と茂つて居る黒い松山は、恰是故郷の官山の拂下に爲つた前の山姿ぢや。あれが東山即ち東の方角に當るといふことが京洛中何處を歩いて居ても、ヒヨイと頭を擧げさへすれば直に判る、東京には此んな重寶至極な目標が無い、俺はニコライの塔を目標にして振り廻り歩く中、不圖見失うてひどい方角違ひに廻ひ迷つて途方も無い高い車代を拂つて辛と歸宿したことが有つた。京都ではそんな事が無い、經濟ぢや。昔の天子様が京都のやうに方角の知れ易い處を御選びに爲つたのは深い因由の有る事ぢやらう、以前は甚う方位方角を八ヶ間敷言うたもので、小便の放どころが悪うても罰が當つて目が盲れたり、唾の吐き處が間違つても祟りを受けて長病に爲つたりしたものでぢや。家作、井戸掘、旅立、嫁入、聲取、其外祝儀何

事に因らず、方位の詮索が第一番ぢや、俺の家の隠居屋に老人に肝心の東と南が塞がつて居るのも、善應院の山伏殿が彼處を開けたら火難水難蟲の難百難續いて到るとかトなはれたからの不自由ぢや。此程大切の方角ぢやから、其れを間違へぬ様又は京上りの田舎者に道を迷はせまいといふ深いお慈悲で、目標の多い土地に方角の判り易い町割りを爲されたものでぢや、東京の町の滅茶に混雜して方角不可解に爲つて居るのは狸老爺の家康が敵を誑らかさうとの設計に相違御座るまい。

『路が大分登り坂になつた、苔野、地圖を出して見さい、何といふ處ぢやの。』
 『無隣庵、疏水、東濱町などゝありますよ、左が動物園……。』
 『無隣庵はお寺ぢや、塔は無いか目標には其れを探すがよかる、兎も角訊ね

て見う。

辻に子供が遊んで居る、十人許りが一筋の繩につかまつてぐるぐる廻つて居る。

『もしく子供衆、無隣庵といふお寺は那個で御座るかの。』

と問へば學校帽を冠つた年嵩の男の子が。

『無隣庵といふお寺やて、やあいくお上りさんや……。』

と囁し立て、外の子供等と何か聞取れぬ言を早口に饒舌つて笑ふ。お寺は何處

か教へて呉れぬが『お上りさん』と丁寧に言ふ所がさすがに都の子供、上品な

言葉を使ふものぢや。

(六) インクライン、知恩院

燒芋に現れたる東西兩京の趣味

火除けの傘は火放けの材料

「舟で山登り」とは出来ぬ相談の譬へ言で有つたのが、此は怎麼ぢや、あれあれ船が山に登つて行くわ「豚の木登り」一比丘尼の髮結ひも今に見られないものでも無い、さても不思議の事かな、歸つて話したら村の者が本當に爲まい、親爺様はパレレンの魔法ぢやと胸悪がらせられう。

『親父様、此れがインクラインですネ、東京にだつて有りませんよ。』

東京自慢の苔野さへ感心し居つた。坂の上に登つて見れば、大きな山の胴腹に穴が空いて居て、其の穴の中らばかり、柴舟が湧いて出る、さても面白い事かな。

大津街道を下つて来る女がある、變なものを穿いて居る、股引ぢや、袴ぢや、
 否上袴の下股引ぢや。後を見れば尙變ぢや、腰がだらりと下つて居る、袴なら
 腰板といふが此では尻懸ぢや、「牛の鞆外れさうで外れぬ」と昔から言うて
 あるが、女の鞆もなか〜外れぬものぢや。
 われは何んぢや、車を曳いて来る、招牌がある、「砂焼元祖丸焼ほやこり〜」
 とある。芋は砂地の白のが旨いものぢやから、焼くにも成るほど砂が好からう。
 流石京都は舊い都ぢや、茶道生花諸藝の家元、諸宗の御本山が在る所、焼芋の
 元祖も矢張此處に在つたのぢや。東京では丸焼が少うて多くは胴切に切つて有
 る、關東は萬事が殺伐ぢやから、焼芋も自づと土地の氣風に化せられたのぢや
 らう。

次に知恩院に参詣。黒門を潜つて石燈を登る、崖の霜柱が午も崩れずにある、
 處々石路の廣葉が日に光つて居る、逕に一點の塵も無い、清淨な限りぢや、
 参詣人も少い、閑寂な至りぢや、本堂の大きき驚くばかりぢや、閉て切つた障
 子を開けて堂に入れば、佛燈ほの暗く、風なきにチラつく、あゝ陰氣ぢや、極
 樂も這麼様地方ぢやつたら慮外ながら俺は御免を蒙る。
 知恩院の傘といふ名物が本堂東の屋根裏に挟んである、火事の呪ぢやさう
 なが、ちと合點が承知せぬ、傘なれば水防けにこそなれ、火防けに爲らう譯
 はない、況いて骨ばかりぢやもの今は水防けにもなりはせぬ、ひよつとしたら
 放火の着火に爲らう危ない道具ぢや、取捨てさせられたがよからう。
 『叔父様此處の鐘は露京の鐘と共に世間の巨鐘と稱せられるのださうです、大

きなものですネ。」

「成程大きいものぢや、厚いものぢや、斯う指で尺取つて見るとぎつと一尺あるぞ、併し俺はまだ知らんかの、一體鐘は何の形ぢやろ。」

「さあ何に象どつたものですかネ、まさか法螺の形でもないでせう、聲は龍のうなるんだとか、獅子の吼えるんだとか言ひますせ。」

「いや獅子の聲は上野の動物園で聞いたが、鐘とはまるで違ふ。龍頭といふ處もあるから龍の鳴き聲かも知れんが、俺はついぞ龍の聲は聞いたことが無いウオン〜といふ鐘のうなりは或は鬼の聲かも知れぬて。」

「叔父様鬼の鳴聲を知つてますか。」

「知つてるとも狂言に有る哩、「鬼の養子」に鬼が赤子を見て「能う見れば見る

程旨さうな、これは食はねば地忍が爲らぬ、一口食うてやらう、あゝ、わん」とある、鐘の聲もウオン、ウワン〜〜と鳴るわい。まだ淨瑠璃にも鬼の聲が有る……。」

「叔父様お罷しなさい、見つともない狂言の假聲なんか、向うで人が見て笑つて居ます。」

「ホイ此れはしまつた話に實が入りすぎた。去らば是れより圓山公園に行かう。」

(七) 祇園清水

花の王と野邊の眞葛——意氣地ない地主構現

景清の身長一丈四尺——西郷と三面記事

『花の色香に満都の士女を誘致せて、一樹の蔭に入天の快樂を現せしめるといふ不可思議の名木祇園の櫻も、斯う寒風に吹きさらされて居る所はみじめなものぢやありませんか。殊に叔父様、此の櫻は不埒ですね、櫻の本領を没却して柳の枝垂を摸倣するなどは。其れを無上の名木の様に賞玩する京都人は櫻の趣味を解せんのです。』

『うん、俺は不埒より可愛さうぢや、何十本といふ丸太に縛りつけられて思ふまゝに枝も伸されぬ、さて〜名木といふものは窮屈なものぢやぞ、人間でも名高い人は矢張り窮屈ぢやらうが、其處に爲ると俺等は野邊の眞葛のノサバリ放題香氣なものぢや、歓迎の人目もなければ家來お供の氣兼ね要らずの

ウ。』

八坂の塔は日本最初の寶塔と聞いたが、今は修理中で足場に隠れて何も見えぬ。公園内で別に目に留まるものも御座らぬ。

御寺と料理屋、料理屋とお寺との間を幾町か登り下つて清水寺に行き着いた。好い眺望ぢや。愛宕の山は眞白い、雪を吹いた風が一直に此處に吹いて来る、梅の蕾はまだ堅い、身振ひをしながら舞臺に上る。

下を覗けば目が舞はる舞臺といふのは目が舞はるからの名でも有るまい。音羽の瀧とはあの事か、馬鹿にするにも程がある、馬の小便でも三四匹分集めたら彼の位の勢ひはある、早に涸れぬが自慢なさうぢやが、瀧や井川は涸れぬが當然、其んな事を誇るなら水が冷たいのも低きに就くのも皆自慢をせずば爲る

ます。

謠曲に名高い地主権現は殊の外小ぼけな洞ぢや、庇を租して母屋奪られるとか、租借人の観音どの十一面に千手千眼といふ豪者だから二面二手兩足の権現様が敵はせられぬも無理は無い。地主の勢ひ衰へたれば櫻も瘦せてひよろ〜と此の春ばかりの花も覺束ないと見受けた。

『此か、悪七兵衛景清の足跡といふ事ぢやが、盤石に足跡が印くとは恐ろしい力ぢやの、苦野。』

『まさか然でも無いでせう、併し假にさうとして長さが二尺から有りますせ、私の躰が長さ七寸五分で身長五尺二寸五分、お待ちなさいよ。此の比例で景清の身長を算出しますから、

75:525 = 200:X

驚きましたね、景清の身の長は一丈四尺に爲りますよ。』

歌の中山清閑寺、何も見る物はないが其れも却て面白いと思つてると苦野は曰ふ。

『モルガンお雪の四萬圓に比しては帝の寵妃小督の卵塔は餘りに質素ですね。郭公亭は西郷隆盛と僧月照が國事を密議した所てんですが、あの二人が海に投じたのも今の新聞だつたら「男心中、一人は助かる」と二號見出しで冷評されるでせう。』

(八) 豊國廟、大佛

太閤と俺——胡瓜と南瓜
大佛は黒奴の獄門
貧乏臭い鐘——寒い耳塚

豊國廟の麓より阿彌陀峰を望めば五百何十級の石燈は昇天の龍。
好い處ぢや、日本一の大膽者が骨を瘞めるには屈竟の地勢ぢや。京都一面大阪
まで一目に見とはす山の絶頂に、いかつげな五輪の大石塔が、巍乎として据つ
た所は太閤様の性根に適うて居る、三百年此のかた此處に鎮まり御座しまして
後の世の小膽者を嘲笑つて御座ることであらう。
度しんで御拜を遂げて、さて想ふ 貴公も素は尾張の國の御百姓、此の椽十
とは系圖も相似、顔も善う肖た猿面冠者、ぢやが、膽玉が俺とは胡瓜と南瓜は

と違うた許りで、貴公は關白太政大臣、人臣の榮を極めさせられたに、拙者は
やうくお上りさんと敬はれるが精々の身の上、餘りといへば甚い差ひぢや。
併しつまらぬは俺ばかりでも無い、折角伸びる手足を縮めて亞米利加人の御氣
嫌を取つて居る大臣様も御座るのぢやもの。爲たい事を爲盡した貴公には叶は
ぬが、せめて言ひたい事を言つてのける此の椽十も、今の世の中にはせめても
の愛い奴ぢやと褒めて下され。
峰を下つて方廣寺に詣るに、どれが方廣寺か判らぬほどの惘れさ。豊國神社の
唐門は桃山城の城門を移したのぢやといふ、全盛の威勢を其の儘に金びか
の彫り物は淵達な太閤の 倅が惚ばれる。
馬鹿げたものは大佛ぢや、負けぬ氣の太閤様が奈良の大佛より一丈も高くせら

れたのは面白いが、其れは無くなつて今は僅に半體の木像而も醜惡しい其の面容は黒奴の獄門に懸つた様、這麼ものなら寧ろ無いがましぢや、大佛が奈良に在る、江戸にある、鎌倉にもあるから、形ばかりでも無くしてはならぬと作られた此の醜佛は、内は豆腐の糟をつめても割籠の外観を飾りたがる京都人の持前の根性ぢや。

此處の鐘は知恩院に劣らぬ大きさはぢや。一銭出せば三つ撞かせるといふから、苦野と二人で一銭はすんだ、俺は銀主だから二つ撞いた、間の抜けた濁つた音ぢや、國家安康の銘が無くとも豊臣の天下を滅しさうな貧乏臭い吼え方ぢや、現に俺さへ一銭損した。

北山風ヒュー〜と吹き募つて霞は鬚太を撲つ、左に耳塚を見て過ぎる。

(九) 五條橋

辨慶にも山縣大將にも肖た棕十

愚な京都、山は偕ばん川は新路

東京では死ぬ、京都は痘痕で濟じ

五條の橋の橋板をといろ〜と踏み鳴らし、東より西へ加茂川を渡る。

上流の川原は、我等先祖棕右衛門尉殿が首を断られさせられた處と思へば恨めしい、川原は恨めしいが此の橋はなつかしい、辨慶と牛若が切り合をした處ぢや。大入道と若衆の配合せは日露戦争の様なもの。若衆の日本が大入道の露西亞に勝つに昔から極つて居たのぢや。

『昔野、地圖々々。』

『何處を探すんです。』

『いや、なに、其の時、辨慶はな「五條の天神へ参らうするにて有るぞ」と言うて居る、其の天神様は何處ぢや、何區の何町何番地ぢや、それを見ても見れ。』

『さうですな……五條の通りに、東山から鐵線路迄天神様は有りません。あゝ有る、少く北に偏つて松原通の其の北の第二高等小學校の筋向ひに菅天神社と有ります、此でせう。』

『見せ、此れぢや此れにして置か。是れに由つて見ると辨慶が恰是俺の様に東から西へ鴨川を渡つたのぢやが、其れに出會はした牛若丸は那方から來

た譯になるかの、いづれ辨慶と反對の方角から來た譯ぢやが……。』

『そんなら何でさ、西から——木屋町か、七條新地か、五條通を真直に來たか、孰にせよ、郵便局の前を通つて橋に掛つたんでさアね。』

昔の地圖と對照しなければ判らんが、其れはまづ其れとしておかう。清水に景清の足跡が盤石に遺つて居る位なら、牛若が高足駄で飛び上られた擬寶珠にも足駄の齒の痕が印いて居さうなものと、一々検査したが那の擬寶珠にも下駄の痕が無い、京都の人は正直ぢや、此れが餘所であつたら金槌の一挺で「牛若丸下駄の痕」を作るのは何でもない事ぢやに。

先刻俺は太閤様と大きに肯た所があると考へたが、如是丹田に氣を充めて兩足踏みしめた處は「吾身ながらも物頼もしう」と辨慶が竝立つた處にも善う似て

居る。一體俺は昔の偉い人には誰にでも、皆少しづつ、背て居る様に覺える。自分免許ばかりでない他もさう言ふ。現に子供の時僻齋先生の處では孔子様と渾名を命けられた、額の格好で那麽稱はれたのぢやつた。人中の長い處が信長公に似て、近眼な處は李太白其まゝ、小鼻の黒子は山鹿甚五左衛門、反齒と額骨は現在の山縣大將にわやかつて居るといふことぢや。頼もしい次第で有るが別に又内々心細い事も御座る、悪人の一代記を讀めば更に亦善う似た所があるの、心密かに當惑致す、酒が好きで、我が儘で横着で、負け惜みで、執念深うて……嗚呼、此の川原でお果てなされた御先祖も、天皇御謀叛に與みせられたのぢやから血筋といふものは争はれぬもの、俺が科では無い哩。

『叔父様御覽なさい、愚ですぬ、山紫水明だなんて京都の誇張も馬鹿々々しい、

山は餓パンの重なつた様、川は此の通り石ころが一杯の新築道路、川といふより砂利場です。』

『さう没義道に言ふな、山高さが故に尊からず松の木が有れば結構ぢや。川ぢやとて多少水もある化粧水には十分ぢや、砂利場が潤いのも重寶、あの通り反物が乾されて紺屋は大助かりぢや。全體お前は東京最負ぢやから隅田川に隅川を較べるのぢやらう。川に水の多いのも一利一害ぢやて、東京者の様に氣早に、錢を遣したちふては投身、小言をいはれたちふてはドンブリ、年々幾十人といふ非業の最期を遂げる隅田川は不祥なもの、あれは水が多いからぢや其れに較ぶれば此處のは水が少うて仕合せ、よしんば關東ベイの様な狼狽者が有つて、此橋から飛び込んだにせよ、礫に面を打つて痘痕が出来る位

なものの命に別條は有るまい、萬事おとなしいが京都の長所ぢやテ。』

(十)三十三間堂

負傷の觀世音と新聞の懸賞投票

大臣は次官次官は局長より馬鹿

弓術の達人よりお柳が名高い

夫主將之法務摩三英雄之心と六韜三略の巻頭に在る、佛法繁昌の御代に後白河法皇様が衆と好を同うなされて御建立の此の御寺。

三十三間堂は京都に珍らしいものぢや。長いからでは無い、此位の長さの家は今の兵隊屋敷に幾らもある、珍らしいのは外の點——何事にも懸直が多く田舎

漢を馬鹿にする京都にも似合はで、三十三間堂が其の正味の倍六十六間もあるのは不思議ぢや、懸直ぢやなうて大割引の有難いお寺ぢや。這入つて見ると仍是懸け直があつた、千手千眼觀世音菩薩といふに拘らず、其の實は蟹の様な手が十本許りと、額の眼は團爐裏に炭團を埋けた様に七八ツ光つて居る。此鹽梅では、學校の體操か兵隊の訓練の様に列んで御座るけれども一千一體の数が眞御座らしやるか、どうか、當には爲らぬ。堂の裏側が面白い、觀音様の怪我したのが幾箇も御座る、頭顱が無いのは致命傷手足が挽げたのは、重傷、指が折れたのや鼻の缺けた輕傷、患者は數知れず右往左往に頭がつて御座る。汚ない坊さんが看護をして居るは奇特、奇特な坊さんは參詣人に治療代の寄進を勸めて居る。これでは路傍は不具の乞食が、ど

うぞ因果な盲者に一文御慈悲をと哀求ひやうな者ぢや、旦那様や奥様方と言はぬ丈がまだしもの面目ぢや。

『此れ若野、本堂の裏は大矢敷を行つた處ぢやさうなよ、一萬三千本とかの中八千本以上も通り矢——六十六間を射通した者も有るといふ、其外自慢さうに通る矢敷を記した額が幾何も有る、併し此の弓術の達人の中にまさかの時に弓取の名を擧げたのは滅多に無い様ぢやの。』

『さうです——今なら新聞の懸賞投票に高點を取る輩です。』

『さうぢや——誠の弓取は何も遠矢を射るに及ばぬ、遠矢は臆病者の藝ぢや、鍬が敵の胸板にカツチリカンと當るまで近寄つてから、弦を切つて放さうなら、どんな下手でも百發百中空矢の有らう筈は無。磨さへ据つたら術も手

練も要るものかのう。昔から學者の取つた天下は無い、利口者の出世した例は聞かぬ。』

『左様です——、大臣は次官より馬鹿、次官は局長より馬鹿、局長は課長より馬鹿、課長は屬官より……。』

『其の通り——師範役が戦場の高名は絶えて聞えぬものぢやて。大矢敷の達人よりお柳の方が餘程世に響いて居るわ。』

(十一) 東 山

御馳走と案内との區別
腹を空かして行くが客の禮儀

蒲團を引被つた姿の東山

『和田村が今直に來て呉れッてんです、夕飯を獻し上げたいから叔父様も御一緒にといふ案内ですが……。』

『和田村といふのは誰ぢや。』

『ほら彼の、私と中學に同級だつた——よく暑中休暇に叔父様とこに泊つたところが有つたでせう、其の後辯護士に爲つて今此地で流行つて居るのでア。』
『うん彼れか、お前と一緒に家の西瓜畠を荒した男か、彼れは恐ろしい智恵の有りさうな男ぢやつたが、盜賊に爲らいで辯護士に爲つて居るかの。』

『さあ、どう爲さるんです、木屋町の何とかいふ料理屋だつたんですが、行きませうか行きませうか、返事を爲なければなりません電話で待つて居るんですか

ら。』

『對手が辯護士では大事を取らねばならぬ、招ぶのは御馳走ぢやらうの、先方が飲食の代物を拂ふのぢやらうの。案内をされると言はれて浮か／＼出掛けて御馳走の積りで澤山に食された末に、案内と言うたのは、其の場所に嚮導する丈ぢや、手引するだけの事ぢや、飲食の代物を支拂ふ約束は致さぬ、いや却て案内料を申受けたいなど、言はれた口には、甚だ以て面倒ぢや、お前も俺も法律には聞いからの。善う其の案内の意味を取極めて約定をせんければなるまい、第一電話では水掛論に爲つて證據といふ物が残らぬテ。』
『詰らない事を……大丈夫です、まあ西瓜の損害賠償をする積なんでせう、今夜のは先方が代金を支拂ふ、即ち御馳走なんですから行きませう、え、叔父

様。』

『其れさへ確なれば行かう。』

『おい、姉さん行くと返事しておくれ其れから大急ぎで車を二臺。』

『待てやい、あわて者、大急ぎで車を召ぶことが有るか、得と處番地を聞いて遠いか近かを、詮議してから事の事ぢや、京都の様に方角の解り易い處は無、まわ地圖を出せ、十町や二十町なら運動がてら歩く方が可い、抑も御馳走を受けるには腹を空かして行くのが禮儀ぢや。』

『妙な禮儀ですネ、衛生的禮儀なんぞせう、いや經濟的禮儀ですかネ。さあ其んなら大いに敬意を表すべく徒歩主義を採りませう。』

二人は出掛けた。雪と期した雲は霽れて好き月夜に爲つた。程なく木屋町の其

家に尋ね當つて、二階の一室に通る、和田村は羽織袴で律儀な姿をして席に請じた。奇麗な器に奇麗な料理、惜しいことには鹽氣が足らぬ。京都は山國で鹽が乏しいと見える。

玻璃戸越しに東山が見える、壁を隔て、隣室の三味線が聞える、踊は見えぬが壘の埃が起たんで結句宜しい。玻璃に額をおつ附けて眺むれば呼吸が凝つて曇つて了ふ、時々拭いてまた眺める。

『叔父様何を眺めるんです。』

『うん東山ぢや、蒲團着て寐たる姿や東山』といふが、それが今解からんので考へて居る處ぢや、那方が頭で何處が尻やらとな。』

『其んな研究は愚ですよ。』

『でもわれは十哲の句ぢやぞ。』

『十哲の句だから下らないんでさ、十哲に一人だつて満足な奴が有りますか、え、其角は替間でせう、許六は癩病でせう、支考は山師に越人の猫の戀、其外魚屋の亭主か犬殺しミルクホールのボーイ見たいな奴ばかりです。シエリングもシエキスビーアもタカデヤスターゼもキニトールも高山林次郎も正岡子規も名前からして知りますまい、美學哲學の一斑も心得ず文學論の講義も聞いたことが無い様な十哲の月並發句に何の考へることが要るもんですか、「寝たる姿」の噺言でさ、研究の價なんが有りやしません、其よりかお酒でも御飲んなさい、今日は自然主義の世の中です、俳諧三昧より爲たい三昧が流行だ、なア和田村君、此から何處か往つてちと人生に觸れやうぢやない

か、げーッぶ。』

小癩な奴ぢや、昔野奴は酔うて居る。上方の酒は頭に來ぬから程が判らぬ、まだ好いと思つてる中に酔つて了ふから油斷がならぬ。和田村は微笑したがりて昔野にも答へぬ俺にも加擔せぬ、徐ろに瓶子を執つて雙方に酒を侷める、儼とした態度——是でなうては辯護士で、人の喧嘩で飯はくへませう。

(十二) 御 所

譬をくはせる聖賢の障子
清凉殿の雀、紫宸殿の鴉

見渡す限り砂清く松青し、松の木の間に葦が見える、御所ぢや。車に乗つて通る奴がある、通つて好いことに爲つて居るかは知らんが、勿いでは無いか、足の無い不具者なら怒しても可いが、苟も満足に二本の足が生えて股と膝とに關節が着いて居る者が、何と、御苑内を乗打が出来やうぞ、皇居の南門は建禮門、此は鎖がつてある、西に廻つて御門のくぐりを這入る、執達吏見た様な役人が出て、何ぢやと尤める、宮内省の御許しの書き附を差出すと、丁寧に挨拶をして、彼方にお待下さいといふ。

待たされた廣い室に卓がある。綺麗な織物がかけてある。少年が茶を汲む。椅子に腰かけて待つて居ると、羽織袴の老爺さんが出て来て、どうぞ御姓名を認めて下さいといふ、羽織の紋は宮の字、おもしろい紋もあるものぢや、姓名帳

を見ると子爵松平何とか有る、何處かの殿様ぢやらう、其れに駢べて書きつける飯野椋十の名も晴がましいものぢや、若野も一所懸命に眞面目な字を書く。あれでも流石に内裏といへば恐れ多いものと見える。

やがて宮の字の紋所の爺さん、御案内を致しますと先に立つ。お車寄といふ所で履物を脱いで御殿に上る、長い御廊下を通つて、清涼殿に着いた、誠に以て勿體ない儀ぢや。四十年前ぢやつたら、此の土百姓の——たとひ清和源氏の流にもせよ此の椋十が夢にも昇られる所が無い。

ガタン！お、吃驚した。何で御座る、は、左様で御座るか、鳴り板と申すもので、へ、え、誰か御殿に上る者が有ると、是の鳴り板を踏むので分るといふ仕掛で御座るか。あの無線電信といふ様なもので御座るな、といへば案内の爺さ

ん 左様々々と點頭く。

「叔父様、あれが楯形の窓といふんですとさ、變な窓ねい」楯形の窓から寒い風が吹く」と怎麼でせう。

「ひやみな事をいふな、不敬に當つては相成らぬぞ。」

と、たしなめて愈殿上に昇る。案内の老爺に跟つて正面から御殿の中を窺く。階下を見れば吳竹漢竹が左右に一むら茂つて居る、其竹に四五羽の雀が拜觀して居る、「此より紫宸殿」と案内が聲は今迄より嚴かに聞えた。北側より御殿の内に這入る、九間四面の堂中ガランとして、正中に一丈四方ばかりの臺が有る、玉座ぢや、四面共帳が垂れて帳の間から御椅子が見える。玉座の背後は聖賢の障子とやら。皆唐人の繪姿少しは皇國の人も加はつて居たらばと一寸

残念にも思うたが、善く考へて見れば、これは列座の將相が背を向ける處ぢやから、わざと異國の者共ばかりを描しめられたのぢや。

殿は南に面して正面の階段が十八級、之を下ると即ち南庭、左近の櫻は冬枯れのまま寂しいが、左近の橘は時知らぬ緑の葉色、黄いろい實がピッシリと生つて居る、小さい蜜柑の様味は苦いさうぢや、苦うなうても誰も採る者は無い、生つたまゝ、熟したまゝ、落ちるに任せて朽るに任せて年々歳々又生り又熟して時じくの香果。

庭はひろくと一面の白砂、折から鴉が下りて遊んで居る、嘴で掘ちくつて居る、掘ちくつても掘ちくつても白い砂が撥ちけるばかり、馬鹿な鴉ぢや、何んの此のお庭に權兵衛でも平八郎でも將相の種を蒔いて置くものか。

(十二) 二條城

自づと下る首壓附られて下る首

兼野伯爵—菅野總理—勸業債券

饒舌の菅野も御所の内では殆ど口を噤んで了つたが、二條城に入るや直ぐ。

「叔父様々々、此處は人間臭いですネ。」

「何の事ぢや、此處も離宮ぢやないか、滅多な事を云ふな。」

「いゝえ、御所は唯もう清淨でしたネ、紫宸殿に昇つた時などは、建築のそればかりで無く、全く神殿に在るの想で、玉座に對して我知らず首が下つて了ひましたが、此處は駄目です、神殿から妓樓に來た様な感ですネ、徳川

全盛の力を以て經營せられたる此の建築、華麗は華麗に違ひありませんが、一事一物盡く驕りと誇りの表現では有りませんか、此處でも首は下りませ、併し自づと下る敬虔では有りません、壓しつけられて下る畏伏です。」

「何でも好いから頭斷下げて居ろ。もしもし此處は何と申しますで御座る。」

と訊ねれば、案内の宮の字の紋の——此處のも白髮頭の爺さんが、言葉徐に説き示される。

「此處は遠侍の間と申して疊数が九十と四枚、襖の竹に虎の繪は狩野探幽の筆、次は若松の間で二十四疊、長押の繪が若松と櫻是れがなかく、名畫と稱へられて矢張探幽齋、此方は暗いで、暗がりの間と申す、次に移つて、式臺の間に、老中の間……。」

段々と足が早くなつて口上が粗略に爲つて来る。俺等は上を見下を見、左右前後を見廻して行くのぢやから、ともすれば後れて仕舞ふ。案内者はそれに管はずさつさとい行く、長い廊下の幾曲り、同じ様な處を行つた方角も分らなくなる殿中で諸大名がお茶坊主や何かに馬鹿にされたも無理はない。

『此の大廣間——上段の間は徳川將軍が着座せらるゝ處で、諸大名は次の間から下にお目見を致したるもの、北の出口から黒書院に行く、お急ぎなさい、まだ澤山に拜觀する所がある、さあ此處です、當離宮中の一番裝飾を凝らしてある處——天井、壁、襖其の外、金ばかりでも容易でない、皆本金を使つてある、又此れだけの材木は常節如何程の金を投けても求め獲られぬといふ事で、柱は皆此の通り四方柱、四方柱と申すと一本の木を四ツ割にするのだから

ら非常な大木で無ければなかく、此の様な柱は取れない……西洋人などが拜見に參つても皆恐入つて感服を致します、外國に於ても斯様の善美を盡した處は無いと見えます。』

と、案内者が大自慢、成程左様で有らう、先づ盡にしても探幽とか定信とかばかりで此の大きな室を飾らせた處は幾何金持の西洋にも有るまい。まあ何處もかしこも光り輝いて宛然是れア佛壇の中に入つたやうぢや。流石に徳川の威勢は偉いものぢやが、私は昨日御所を拜見して今日此の御殿の餘ンまり綺麗なのを見ると、口惜しい様な氣が起る。

『のウ昔野、御所の溝は三尺たらずの流れで有つたのに此の城は仰山な深い濠が廻らしてある。御所の御質朴なに比べて此の御殿の結構さは、餘りとい

へば徳川の奴め憎いで無いか、高が徳川の又家來の所司代が屋敷では無いか、善う罰が當らなんだものぢやて。』

『感心—叔父様、其の御志が勤王家の叫びです、貴方をして今十年早く生れて維新の前に在らしめば、我が藩は薩長の下に立つことは無かつたでせう、私も又徳野伯爵の令姪として校長の尊敬を拂はるゝこと、少くとも同級の二三子に劣らなかつたでせう。私だつて今三十年早く生れて居て今日の時勢を洞見するの明があつたら、内閣總理として樞機を握るの外時々文士招待會や女優奨励説を以て藝術界の後援と爲りましたね、若しや運悪く檻車夢を載せて兩關を過ぎ小塚原頭の露と消えても、一卷の新體詩は永く天地の間に留めて慷慨家列傳中に一異彩を放つたことでせう、惜しい事をしましたネ。』

苦野が長嘆は俺に取つても同感であるが今更致方が無い、生れ時の後れて徳野の家門を興すことの出来なんだのは、勸業債券の外れた様なものぢや、運が善くなかつたのには違ひないが、それとて運が悪かつたとも言はれぬ。

宮の字の紋に追附いて廊下を通つて歸り途、徳川の諸大名が長袴を引ずつて往來した時分のことを想ひながら、善く見れば、廊下の板に夥しい釘の痕が有る、是では袴の裾が堪るまいと不審のまま、案内者に尋ねると、徳川没落後一時爰に政府が有つて其の次に京都府廳が置かれた、其頃ドシ〜靴ばきで昇り降をしたものぢやから、靴の痕が板に着いた、其の頃はまた靴も下等な釘だらけの踵で此の様に疵が出来たのぢやといふ。『靴のまゝ昇降を禁ず』といふ札が今尙處々のお役所の玄關に見受けるが、あれは靴の開けぬ時の遺制ぢやと見える。

(十四) 南禪寺、銀閣寺

石川五右衛門—俊寛僧都

銀貼けぬ銀閣寺—棕枝嬢の私通

茶の湯で嚇かす—がぶく飲む

彼岸近く爲つた、追々農事も忙しいに、ノンベンだらりと見物もして居られま
い。今日から急いで巡つてしまはう。

五山之上と繪旨を賜はつたと聞く南禪寺は如何にも宏大なお寺ぢや。山門五鳳
樓上の穴は石川五右衛門が潜れ場所に切開けたのぢやげな。山門の奥に今新築
中の本堂にも、山門と同じ様な高い處に同じ様な穴が有る。なんば世に盗人の

種つきじとは申せぬざく何代目五右衛門の爲に潜れ穴を作つておく馬鹿もあ
るまし。

石逕を傳うて境内周く経めぐる、カタンコトンと木履の音が袈に響いて我なが
ら吾が耳に塞い。

俊寛僧都鹿が谷の密議云々と日本外史で讀んだ以來、如何にも木深い物凄
い豆
腐屋に三里の山奥の様に想うて居たが、来て見れば都はツイ其處俵代十錢にも
足らぬ、瓶子が倒れて壊れうとも代りを買ふに雑作もない近間ぢや。

銀閣寺—貧乏臭いお寺なれど、参詣は南禪寺より多い。八歳許りの小僧さん
が奥へ案内される、寶物が勸工場の様に駢べである。小僧はシヨンポリ立つた
ま、口上を始める。

『此の冬夏山水の雙幅は吳筠の筆。向うの普明國師自贊の像は月舟の筆。正面の觀世音の尊像は然可のフデー……………』
と息を吐ききく、尻がすれの力なく、半ば減える慄ひ膝の寒さ、勿論聞き取れぬ、併し俺等が聞取れやうが取れまいが、解らうが解るまいが、小僧は没交渉幾干饒舌つたとして一文の得が附くのぢやない、唯饒舌りさへすればお小僧の役目は済む。一刻も急いで次へへと饒舌つて行く。

『若野、此が名高い銀閣かい、甚う黝ずんだものぢやの、銀が錆けたのぢやるか。硫黄氣の強い處かの。』

『なわにネ、將軍義政が金閣に對抗して銀を貼ける積だつたのが、實は貼け果せぬ中に死んで了つたんですとさ。銀閣未遂でさ其れを銀閣と稱するのは』

銀名詐稱です、銀を貼ける積だけで銀閣ならば、私は將來博士に爲るつもりなんですから、爲らずに死んだつて博士でさ。叔父様は彼の隣屋敷を買ふ積だつたんでせう、あれアもう貴方に所有權が移つてまさ、登記も要らず便利なもんですネ。爰に哀を止めしは貴方ン處の棕枝嬢ですネ。』

『何ぢや棕枝が。』

『棕枝嬢は私通してますせ、それも五人や十人ぢやありません、驚いちやいけません、貴方の娘にも似合……………はしい美人でせう、だから嫁にもと幾人思ふ連中が有ませせう、銀閣の筆法を以て論ずれば……………。』

『馬鹿な事を論せんでも好い。』

『もしく拜觀は此で丁ひ、お茶を獻げますから此方へ。』と小僧さんは役目を

了つた安心か、慄へが止んで、聞取れる聲を出して一室の方へ先だつ。

『叔父様茶の湯でせう。』

『何ぢやか知らん。』

『何でも怪しい、日外聞きました、銀閣寺に行くと茶の湯で嚇かすんだつて知つてますか叔父様茶道を。』

『ウンにや心得が無い。』

『ぢや可けません、茶の湯は恐ろしい艱かしい方式が有るんで、濃茶か淡茶か知らんが、其或種類のものは數人に對して一椀の茶を供せられたる數人は一椀中の茶を平均に分割して飲むんださうです。』

『むゝ如是言へば中々艱かしいのう。』

『艱かしいのは研究もして見ませうが、若も果して數人共用の種類で有つたと假定すれば甚だ不衛生です、相容に奈何なる傳染性の疾患が無いとも限らぬ、其れを消毒もせずに一椀共用を爲さしむるは非常の危険と謂はざるを得ません、健康診断を経なければ相容たることを得ずとか何とか、内務省は宜しく茶の湯取締法を制定すべきものです、私は危険を冒してまで茶を飲むの義務は有りません。』

『無理に飲ませる譯ぢやあるまいが、俺は今咽喉が渴くて、お前は其の濃茶も淡茶も飲み方は知らんか。』

『紅茶なら知つてますが、彼奴ア樂です。』

『困つたな。うん、よし、覺悟を極めたぞ、なわに、濃でも淡でも茶は茶ぢや

らう、茶の湯といふから湯も入つとるぢやらう、やつぱり渴きを醫めるの
ぢやらう、それなら俺は今飲みたいから飲むわ。眼に注せの、鼻から瘳れ
とあつては難儀致すが、渴きを止める茶を飲むに作法が違ふたからたまさか
罰金も取るまい』

『だつて怎麼やつて飲むんです。』

『なアにがぶく飲むぢや。』

銀閣を下つて、茶室の方へ行く、廊下傳ひ、庭に鶯の聲が聞える、老梅の一
枝に兩三花白す。

(十五) 詩仙堂、大學

勝ち戦には誰でも大家傑
京都はボン引の養成所
ヒヨコつくのは東京の特長

『此から詩仙堂ぢや。』

『石川丈山のですか、此の地圖では大分有りますせ——罷ませう。』

『でも徳川三百年に唯一人の高士ぢやもの申うてやらうぢやないか。』

『彼んな奴だめだ、詩仙堂だつて其の三十六人の像は皆支那の奴ばかりでせ
う、而も皆古臭い唐宋の遺物ばかりでせう、國民文學の尊きを知らず、時代
思潮の何たるを辨へぬ頑冥な泥古詩人、大詩人です、文學の利權回収でも唱
へて漢詩なんか排斥したんなら申ふにも足りませんが。』

『何ぢや生意氣をいふな、俺に解らん様なことさへ言へば閉口すると思ふとるか、アーン、丈山の偉い處は詩や歌ぢや無いぞ、戦は退き口が大事な艱かしものぢやぞ、勝ち戦には貴様でも大家傑ぢや。丈山が世捨て方、名利の退口が無類なのぢや、流石に戰場往來の古のはものぢや、貴様などに解るものか。孫子に曰く……。』

『ハイ、解りましたもう澤山、私が解らないんで悪う御座いました、丈山は正に豪傑ですよ、ぢやア詩仙堂に参りませう、併し大變遠いんですよ、南禪寺から銀閣寺まで四寸許りで、銀閣寺からまた詩仙堂まで四寸五分も有りませよ、そして其處には序に見る所も有りませんよ、不經濟ぢやありませんかえ。』

『地圖を見せ、成程不經濟ぢやの、其んなら此處で失禮して、近い處の京都帝國大學ちふのを見るかの。』

『それ、其れに限りませ、此の地圖でたつた二三寸歩けば眞如堂、吉田神社、大學、百萬遍、聖護院皆見られて、都合に依ると下加茂神社にも詣られませ。』

後二條天皇の陵を右に見て、一二町行くと直ぐに大學校が見える、四角な帽子を冠つた書生がチラホラ来る、様子の好い若い衆ぢや、東京より京都は書生まで行儀が好い。

『見い若野、京都の大学生はお前の様にピョココして居らんわ、おとなしきうに見えるぞ。』

『何ですって、京都の大学生がおとなしいんですって、此は叔父様の御言葉とも覚えませんが、京都なんざ學問をする處ぢや有りやしません。』

『何する處ぢや。』

『極つてまさ、外から來て道樂する所です。金を使ふ所です。だから此處に育つものは、道樂をさせる法、金を使はせる術を工夫するんです、御覽なさい。京都は到る處に路標が有り、到る處に高札が有つて、此處は何の名所だ、彼の舊蹟だと、入らはいくの人寄せ工夫、石一つ竹一本にも拜觀料だなんて巾着錢を搾る、京都は大なる觀世物小屋です、木戸番を稽古し拘摸を稽古しボン引を稽古するには絶好の地ですが學者を養成する所ではない、抑も京都は所謂舊き都でせう、換言すれば死んだ土地でせう、墓所です——墓所から

人が生れますか、京都に大學を置いて新しい人を作らうなんて愚の極です。此處は隱居所です、功成り名遂げてまだ死に切れない人間が、若い妾と恩給金を費ふ所なんです、私がピヨコつくと仰つたが、ピヨコつと結構萬歳です、ピヨコつくのは活きてる證據でせう、生動です、潑刺です、ピンと躍ねる鯉です、東京の本領はピヨコつくに任りまさアネ、え、叔父様、さうぢや無いこと！』

『何ぢや、ベラ〜と、お前も尙も將來の博士の積ぢや無いか、さうぢや無いことなど、尙にも稗子見た様な女の假聲を使ふ奴が有るか、ヤイ。』

『是れは失禮、千慮の一失。』

『何が千慮ぢや、貴様のセンリヨは浅いといふ淺慮ぢや。ちと言葉を慎んで少

しは學者らしう言へ。」

「ハイ、其んなら英語で言ひせう。」

「英語は俺には解らん。」

「そんなら亞米利加語、加奈陀語、シカゴ、ビルミングハム、ランカツシャ―
それも御解りがなければ直譯で行ませう、私其の人は棕十の甥である所の
私は……ネー、アングル、ヂョーヂ。」

「何ぢや其は。」

「アングル、ヂョーヂと言ふのは、棕十叔父様といふ事なんです。アングルが
叔父で、ヂョーヂが棕十。」

「馬鹿にするな、せめては漢語で申せ、それなら學者らしくもあるし、俺にも

解るわ』

「心得ました、イヤ、諾。借問す叔父様、此からネ、將に那の邊に向つて勝を
探らんとする――高野、加茂、兩水相會する所之を出町橋と爲す、橋北一
大祠あり下加茂神社是れなり――どうしても一瓢を腰にしなくちや褌りませ
んや。」

(十六) 驚知らず

相國寺――末世佛法の標本

大徳寺――物足らぬ中に満足

驚知らずは白粉の名ぢやろ

相國寺は有り難い處、末世佛法の衰微を實證するのは此處ぢや。まづ總門が閉
 されて、天界橋の側は野菜畑に爲つて居る、功德池が今に釣堀に爲りさうぢや
 本堂祖堂も扉堅く庇内には、人の近づくを許さぬ制札が有る。境内の松林は、
 今しも丁度枝おろしの最中で、白衣の坊さんが慾深い眼を瞪つて松枝の束を番
 して居る。松の幹に變な梯子を立て掛けて、梢に高く登つて居る男は園丁でな
 うて樵夫ぢやらう、今しもゴシ〜と高い枝を鋸ぎ始める、鋸屑がハラリ〜
 と落ちて、樹の根の凹みにたまる。お寺によう松林があると思ふたら焚附採の
 爲ぢやつた。松の木がよう眞直に伸びて居ると感心したら斯様に下枝を伐るか
 らぢやつたのぢや、此の零落した寺に坊主が割合に瘦せて居らぬのも、何か譯
 が有らうが其れまでは判らぬ。

耶蘇宗の同志社は醜いものぢや、村の和尚さんは、耶蘇宗は外道ぢや、人が死
 ぬ前には生血を搾るさうぢやと言はれたが、まさか其の様な事もあるまい、天
 子様からお許しを受けて擴める宗門ぢやから、其れ相應の功德は有るぢやらう
 功德が有ればこそ斯う繁昌もするのぢやらうて。
 大徳寺は禪寺らしい處ぢや、大根の出来を見てまはる間は無いと見えて、此處
 の和尚は山門の側に菜圃を作つて居らぬ、糞の臭もせぬが、去りてと佛の臭ひ
 もせぬ、禽が啼いて、松葉が落ちて、風蕭颯と寒いばかりぢや。若い坊さんが
 二三人、對から出て来る、首の骨を眞直に肩を聳やかし胸をつツ張つて、高下駄
 を踏み蹴ろかいて昂々然としてやつて来る勢ひには俺もツイ路を讓けて了つた
 一休和尚は何處に住はれたやら、聞いて見たいと思つたが、『わしや知らん』と

答へさうな坊さんらしいので尋ねるのを廢めた。

物足らぬながらに好い氣持ちや、此の氣持を害はぬ中今日はこれで歸宿致さうと、鴨川端に出て三條に向ふ。途中で妙な招牌を見た。

『おい昔野見い、何ぢやあれア「驚知らず」ちふのは』

『何處に、あゝ那個ですか「鴨川名産驚知らず」とありますね。』

『何ぢやろの、驚知らずく、驚は白い鳥ぢやが……。』

『解つた、解りました。白粉でさ。』

『白粉？其れア又何故ぢや。』

『懷爐の灰に「冬知らず」といふのが有ります、彼の亞流でさ。仰つしやる通り驚は白い、其の驚が知らぬといへば驚よりも白いといふのでせう、鴨川

の水を使ふので京美人は白いといふから、兩方取り合せて白粉の名に命けたんでさ。』

『すれア謎ぢやの、商人といふものは賢い事を考へるものぢや。』

流石に昔野は才物ぢやと感心して歸つたが、其の晩膳の上に載つた小さい皿に小さい魚が盛つて有る、東京の下宿屋で毎日の様に食はされた佃煮の様な格好ぢや、長いのも一寸位短いののは三四分に足らぬ、形は鮓に似て鮓にも非ず、麥魚と見れば頭が違ふ、變なもんぢや、『何ぢや』と給仕の娘に尋ねれば。

『これ驚知らずいふもんどす』

と言つたので、昔野の顔を見れば、彼奴も先刻の事を思ひ合せたか、笑つて居る。俺も可笑しい。曇の感心は取消ぢや。物は試めしと箸に挟めば一箸に五六

尾、味は悪くない、娘は得意氣に語る。

『おいしいお魚どすやろ、彼流で（と窓の外を指し）捕れるのどす。あんまり小ッこウて驚も知りアへん、それで「驚知らず」といふのどすエ。』

(十七) 友禪染

穢いけれども此水に妙がある

辣菲の皮をむく徹底主義

菓物の核は捨てる皮相観

昔野ばかり悪うもいへぬ、取るまいものは齡ぢや、疝癢で寝て雨の數日鬱陶しい想を致した。今日は少し快い様ぢやから押して出る、車をはすんで。

先日見残した北野天満宮に參詣をした、一夜松は「一夜の中に千本の松を生かしめる」といふ御神託に因つて生えたのぢやげな、斯ういふ御神託がちよいちよい願はるれば、村の學校林の卅町歩は百日たらずに出来る筈ぢやつたに、人間の力は情ないもの、家々から夫役を出させて三年越してまた成就せぬ。

松の間の梅が丁度よい見頃。一寸の間にいかう時候が進んだものぢや、平野神社にも序に參詣を遂げる、大分櫻が有る、若木が多い、今が名所の製造最中ぢや。元の道に少し返つて、南へ小川の岸を沿うて俵を走らす、本願寺に向ふのぢや。

『ウ、穢い川、眞黒な水ぢやのウ。』

『叔父様是れでも京都は山紫水明ですか子。』

『おい俵夫此流は何ぢやのウ。』

「堀川いふのどす。」

「何ぢや堀川ぢやと。」

「叔父様、とぶ川でさ、鐵漿川でさ。京都は女が多いんですから、は、は、」
何か判らぬど不思議の川、俵を停めて視る、川の中に人が居て、長い布片を握つて居る、穢い川に穢い布片、禪でも流れて来たのか、それを又此の寒い水に這入つて拾ひ上げるとは、京都の人はしみつたれな者ぢや。まだ其の下流にも拾ひ上げて居る奴が有る。

「俵夫、何で京都には此様に禪の川流れが多いのぢや、拾つて何にするのぢや。」

「旦那はん、彼れア友禪どすがナ、此處等皆友禪染める處で、此ないに水穢うや。」

「でも、此の水に妙があると言ひますがな。」

「驚いた子、あれが友禪染なンかい。嫌だ、玉の腕を寒む振りの袂は此の微生物培養器の様な川の中で製へるのか。叔父様呆れつちまひます子。」

「さうぢや。がの、蓮花が泥の中に咲く様な物ぢやる哩。」

「此洞に染めた友禪を着る祇園の美妓、考へて見れば相應して居ますか子、いづれ裏店の鶯の子でせうから。」

「一概に腐すな、見ぬもの清しぢや。」

「だつて、もう、京都の染物を着る氣には爲れません子。」

「さう言うた日には際限が無いぞ。米にも野菜にも肥料をかけるぢやる、白濁の土に比ぶれば此川の水も太して穢い事も無い。物事は餘り深う詮索をせぬも」

のぢや、誰の腹にも糞が入つとるわ。』

『いゝえ詮索は深くしなればなりません、あなたの様に皮相淺薄の觀に安ずることは出来ません、衣を脱いで赤裸々の體、否更に進んで皮を剥ぎ肉を殺ぎ骨に徹するまでにしなれば事物の研究は出来ません。』

『そんならお前の研究は猿が辣蕪を喫ふ様なものぢやのウ。』
『何ですツて。』

『一皮剥いては捨て二皮剥いては捨て、猿がのウ、辣蕪の實を食はうと思つて辣蕪の皮を剥くのぢや、剥いて了へば辣蕪も何も無いわ、はゝゝ。』
『其れたア例が違ひます。』

『いゝや、待て、總體核まで食へる菓物は無いものぢや、皮一重下の淺薄な所

に滋味は有るものぢや、鯉などは皮は勿論鱗にも味が有るて。』

『そんな不得要領な例で胡魔化さうたつて可けません。議論をするには論點を定めなければなりません、先づ私の主張では……。』

『まわ好いわ、議論はお前に勝たぬ、見物が俺の仕事ぢや、おい俵夫急いで本願寺に行け。』

(十八) 本願寺

身の長拔群一尺三寸の横綱
火事は宗門繁昌の縁
髪の毛の網と新潟の女髮結

佛法はまた繁昌ぢや。本願寺に詣れば末世ながらも頼もしい、末世とは申せ、今日人間の長は五六尺、壽量も五六十は有る、時には六尺五寸の相撲取も有り大隈さんは百二十五まで生きると力んで御座る世の中ぢや、滅劫もまだ中位の處に生れ合せた俺等は仕合せものぢや、屢々村の和尚が談義に聞いた——これからまだ一、人身も壽量も減るばかりで、遂には身長一尺、壽命十歳まで縮まるぢやさうな、其の頃には身の長抜群にして一尺三寸に餘るなどいふ日の下開山の横綱が有るぢやらう。昔し棕十は身の長五尺何寸有つたなど聞いても其の頃の人は逆も本當にしまいて。其の頃は世界の人が打ち合ひ摺み合うて且暮兵亂の如く義理も糸瓜も無くなつて了ふといふ。糸瓜の無いのは可いが義理が絶えては困る。今日はまた多少世間に義理も有り、法も有る、道端に地藏、

小便に罰金、佛法も王法も有る、難有い事ぢや。

西も東も本願寺はまわ同じ様に廣大なもの、新しいだけ東が立派ぢや。

『苦野、お西には水噴の銀杏といふ名木が有つて萬一火事があつたら彼の樹から水を噴飛ばして如何なる猛火も消し止めるといふ事ぢやつたが、此のお東にはあんな便利な樹が無いのう。』

「もつと便利なのが有ります、門前の池に噴水が有つたでせう、琵琶湖の水を引いたので彼の水が此の殿堂の隅々まで管で通じて居て、まさかの時に其の管を開けば四方八方水に浸る設備ださうです、併し火事なんか恐れるのは愚ですな。」

『何故ぢや。』

『だつて、いくら火に焼けぬ豫防をしたつて、時に勝つ力は有りません、焼けなきア腐りませう。腐らなくても人が腐り宗旨が腐つたら寺ばかり残つたつて何にも爲りませう、それよりちよい／＼焼けた方が好いです。さア本山が焼けた、是非再建しなければならぬといふ場合に陥つたら、法主始め末寺の小僧まで意氣組が違つて、説教に勉め寄附を募り全力を盡して働んでせう。門徒の氣も自から引立つて来て、宗門隆興の機と爲りませう。』

『む、昔から焼太りといふからのウ。』

東本願寺の本堂は南北二十六間東西二十一間此坪數五百四十六坪也、紫宸殿の八十一坪に比べて雑と七層倍、阿彌陀如來の本堂より親鸞上人の大師堂は更に

大きうて、千坪以上もある、東京の芝居が大きいと思つたが、どだい較べ物に爲らぬ、賑ふことも芝居以上ぢや。但し芝居に劣つたことが一つある、下足番が居らぬかして、参詣人は銘々履物を提げて堂に上る、坐つて禮拜をするにも片脇に其履物を引つけて居る。

口々に南無阿彌陀々々々と心の真底から出して居る聲は他宗の俺にも有り難く聞える、滅罪念佛といふのは一唱名で八十億劫の罪が滅えるといふ事ぢや、當流の唱名は其れよりもまだ利が好うて南無阿彌陀佛の唯だ一念で無始以來の罪業根切に爲るといふ事ぢや、北野天満宮の一夜松よりも遙に偉い佛力、這麼廉い物を買はぬ者は經濟を知らぬといふ者ぢや、俺は始めて十錢といふ賽錢を獻げて佛壇近く禮拜した。

佛壇が近過ぎたので、後の方からバラバラと賽銭が飛んで来るに困つた、背に當るのは痛くも無いが、生憎頭顱の禿に二錢銅貨は痛かつた。若しも支那歸りの信者が有つて馬蹄銀でも擲げ附けたら、當り處次第即座に往生したかも知れんと、坐ろに無常を感じつゝ、堂の椽に出る。大きな髪の毛の綱が有る、越後國新潟信徒獻納、長二十二丈八尺廻り一尺八寸、目方百貫目と札が附いて居る。『昔野、此ぢやの、材木や何かを牽いた髪の毛の綱は。』

『然でせう。』

『此丈の綱を作るには何千人、何萬人のを集めたのぢやろ、斷つた髪の再結へる様に爲る迄には一年やそこらは掛る筈、斯う澤山の女が髪を斷つたら其の當座新潟では女髪結の仕事が無うて嘸本願寺を怨んだことぢやらうて。』

『さうですね、婦人が髪を斷るのは容易ならぬ大事です、浮氣をして男の爲に斷られる他動的のは別として、婦人自らが甘じて斷るのはまア夫に死別れた時ぐらゐなんでせう。然るに佛殿建立の爲にせめてもの佛恩報謝に斷らうといふ決心は實に熱烈なる信仰でなければ出来ません、夫れに附けても是の如き動機を與へる火事は時々必要ですよ。』

(十九) 樂 書

大谷伯爵家玄關の白壁

樂書文學の最好實例

『大發見々々々、叔父様、樂書文學の好い例が有りますよ。』

苔野は手帳に何やら書きながら頼興な聲を出して俺が袂を引く。指さす壁には矢鱈に鉛筆の痕が有る。俺等は今大谷伯爵の玄關に立つて居るのぢや、御門跡といへば尊いが大谷伯爵といへば恐い様に聞える、其の恐い處に來たのは殿様に用が有るのでは無、寺役人の夢田といふ者を訪ねに來て、取次の返事を待つ一分か二分の退屈に苔野は壁の樂書を讀んで居るのぢや。

『叔父様、先づ御覽なさい、此の縦横無盡亂麻の如き鉛筆の痕を、此の一線一點たりとも偶然に出來たものでは有りませんよ。他人の家でせう、玄關でせう。白壁でせう、習字をすべき處では有りますまい、此處に樂書をするには何等かの敵意を含んでなければなりません、少くとも不快の念を發表したものです。まあ聞いて下さい、手取早く言ひますから。ほら此處に「寒くてた

まらぬ」と有りませう、此の簡單の一句に随分複雑なる事實を藏して居ます或一人、多分賤しい、男でせう、此の筆蹟から推測すれば若い男、多分丁年未満でせう、つまり使に來たんですネ、其使が頼まうとか何とか案内を乞うたでせう、取次の——先刻の様な爺さんが出たでせう、使の口上を聞いたでせう、暫らくお待ち下さいと言つて、彼の爺さんだから——若くは外の爺さんにして、急いで參らうといつた處で太郎冠者の歩き振でそりりと奥に引込んだでせう、奥に行つても粘んばくと口上を取次ぐんですから急に埒は開きません。其の中に三分五分と經つ、玄關の吹きさらしに立つて居る使は堪りません、先づ寒いと思つて居る、次に寒いと慄へる、次に寒いと地踏踏む、次に寒いと獨語く……』

『煩さいな、そんなに細かうに断らんで早く言うて了へ。』
 『だつて思想の順序ですもの、ちやア端折りませう。使の奴が寒さといふ天然に對する不快と、取次の遅いといふ人事に對する不快と、此の二つの不快の念が聯合して腦中の多數黨と爲り、樂書は悪事なりと主張する少數の正義派を壓倒して、遂に鉛筆を取出すまでの経過は微妙複雑を極めたもので、之を叙すれば確に私の博士論文に爲るんです。吹出先生の面龐新論よりも、袖下博士の議會賄賂史よりも有益にして興味ある論題なんですが、御聞きにならなさや廢しませう。そこで、いよ／＼鉛筆を取出します、門の方から人が見はしないかとキヨロつき、今まで待遠しかつた取次が今一寸來なければ好いと祈りつゝ、全速力を以て「寒くてたまらぬ」の此の一句を書き終る瞬間の

所作といふものは天下第一流の俳優で無ければ氣合が現れませんネ。

『誰が其んな芝居を観るもんか。』

『其から第二の樂書がまた面白いです、其の句に曰く「火を貸しませ」此の一句は前の使の男と同一の時に於ける同一の人の作か否かは多少疑はしい點も無いでは有りませんが、其の書風と鉛筆の色とよりして私は斷然同一の人とし、第一句の樂書より少しく後の作と認めます。前の「寒くてたまらぬ」を書いたので多少鬱憤を慰め得たんですね、併し取次はまだ出で來ず、風は益益寒し歸る譯には行かず、弱り切つて弱音を吐いたのですね、弱つた證據に「火を貸しませ」と哀願的に出來て居ます。其次の第三の樂書に至つては益々面白いです、思想の波動を證明して居ませう、「火を出せ」ツとあります、

前の一伏に對する一起です、又其下に譯の分らぬ筆の蹟があつて、其の最後の第四句は極めて樂書の體を得たる入神の妙語です。』
『何ぢや。』

『此處に「蝟」といふ字が有りませう、蝟は坊主の意味でせう、つまり本願寺全體を罵つたのです、憤激の極を現して居ます、
「寒くてたまらぬ」火を貸しませ「火を出せ」蝟」と此の四句を順々に検査すると別に又發見する所が有ります、第一、文句の長さで感情の昂進と反比例を爲すこと、第一不快の波紋が如何擴がつて行くかといふこと、第三……。』
『此れ〜お取次が上れと仰しやるわ、夢田どんが會うとぢやが……。』

(二十一) 宇 治 上

宇治橋の張出、平等院の扇芝

菴浦の前と官妓、頼政と伊藤公

宇治は茶處、其れよりも軍記もので名高い、一度は行つて見ずば爲るまい。京都驛の七條驛から汽車に乗る。北越の汽車は時間表が有つても時間通りには出ぬから、今日の三時の汽車は何時に出ますかと聞合せるのぢやさうだが、七條驛は其れに比べては正確なもので、僅か十六分遅れたばかり。

伏見を経て桃山城の址を窓から眺める、巨椋の池といふのが見える、巨椋はおほくと讀むかと思つたのに大違ひ。地名といふものはなかく讀めぬものぢ

や、米原をまいばらと讀むから米子はまいこかと思つたら、よなごぢやげな、米浙瀬はこめかしのせで米山はよねやま、米國はべいこくで米利堅はめりけんぢやから、面倒でたまらぬ哩。流石に米は五穀の王でなかなか用ひ處が廣いものぢや。

宇治町に下車して先第一番に宇治川を見る、清淨な水ぢや、川幅も可なりに有る、これでは徒歩武者は涉れない筈ぢや。百人一首で覺えの「瀬々のわじろ木」といふのは、那個か分らぬ。

宇治橋に立つて上流を見渡した景は格別ぢや。中程に一間許り張出しが有つて變な橋の形ぢや、片假名のトの字形ぢや、此の張出は何をする所やら、涼み臺の様に有る、橋杭を見る所の様にもある、或は魚釣臺かも知れん、此の川の

模様では随分魚も居るぢやらう、一日釣れば大分の稼ぎになるけれども、宿錢大枚一間何十錢を拂つて滞留しては差引きわまり勘定でない。

川を見て居たつて別段面白いことも無い、枯蘆が流れて來るばかりぢや、平等院に行つて、扇の芝を見てつくづくと感ずる筋が御座る。

『のウ苔野。扇の芝は扇形ぢやの。』

『さうですよ、下らないもんでさ、何も扇の形なぞにしなくつたて可さうなものぢや有りませんか、今ならハート形です子。』

『いや源三位頼政といふと役目は何かの。』

『官は知りませんが、三位だと今ならまわ親任官か高等官一等で、師團長縣知事あたりの格ですネ。』

「さうぢや、其れにしても今の縣知事や師團長わたりに俺が知つとる名前は幾何も無いのう、それに七八百年前の頼政の名を記えて居るのは切腹のお庇ぢや、して見ると此の芝の上に坐つて短刀を右手に皺腹を撫で下した時は無念にも口惜しくも有つたらうが、併し天晴切り甲斐ある腹ぢや。」

「全くです、若し其の腹の皮が無事にしても、七十越した爺さんですから餘命は長くも無かつたでせう、老衰病、腦溢血、慢性腸加答兒いづれ其んな病氣で……菖蒲の前——もう婆ですぬ——菖蒲の婆の看護を受けて死んだんでせう。」

『そしたら名は残らんウ。』

『残りませんと……残つたら變な名が残つたんでせう、まづ四位から三位に

昇位運動をした陋劣な歌人としての名、其の外には菖蒲の前との艶聞ぐらゐが主なもんでせう。其れも後の平家に反抗した事蹟が有つたからこそ、序に残つた艶聞で、單獨に残り得可きほどの趣味ある戀愛談では有りませぬ、其れよりは先頃の伊藤統監と官妓との話が面白いです、日本艶福傳に特筆大書すべき佳話なんです、掻摘んでいへば——或日韓國皇帝便殿に在し侍座の統監に對して、傍に陣せる官妓中卿は就れを以て尤も美なりとするぞと勅問が有つた、統監恐こまつてデロリ——と見やつた末に或る一人に指すと、そんなら興るよと勅が有つたが統監固辭して曰く「いえどう仕りまして、小臣力微にして未だ周く弊國の女を御する能はず、何ぞ況や貴國の美人まで中々さうは手が廻りませぬ」と伏奏した、處が統監が一瞥の榮を得た官妓は

已に勅旨が下つた以上お前は殿御どうでもかうでも添はねばならぬと通譯官を以て口説いた相です、遂に後庭の柳に縊れて死んだかどうか分りませんが伊藤公の肘鐵砲は千古に傳ふべきものでせう。頼政は、何です、萬蒲の前に岡惚をして、其を見透されて「お前に與らう、ハイ頂戴」は意氣地が無さ過ぎるぢや有りませんか、駄目です彼んな野郎は。」

(廿一) 宇 治 下

鳳凰堂は猫の振袖
料理屋―廂髪―パイプ

柱の貼札―上方人悪事の條々

「鳳凰堂は日本建築の最も優秀なるものです」と矢鱈に苦野が難有がるけれど、俺は何處に妙が有るか分らぬ、格好は異つて居るけれども其れが何故にエライのやら頼と解せぬ。

昔は誰かの別業ぢやつた相なが、閑な時節に閑な人が閑つぶしに手の込んだ細工をさせたものだらう、住居にしては何の便利も無さ相な家作ぢや。閑が有り金が有る人は色々な事をするものぢや、狎に藝を仕込んだり猫に振袖を着せてやつたり……要りもせぬ廻廊を附けて御丁寧に折り曲がらせて、曲り角に高樓を架せるなどは全く猫の振袖ぢや。

宇治川の土手路を上つて行く、路側に妙な家が有る、小さな家が幾つも有

つて其の間に庭木が有り泉水が有る。門は一ツぢや、其の門に料理の招牌が有る。商賈屋であれば遠慮は無い、懐を探ればたしかぢや財布も落しては居らぬ、這入つても差支無い。

『昔野何か食はう。』

『何でも食ませう。』

『何でも食ふわけには行かぬが、まづ這入つて見やう、好きなもので、あまり高くないものを食はう。』

『無いんですか、錢が。』

『これ失禮なことを申すな、五圓札が一枚と小錢が四十何錢、郵便切手もわるぞ。』

『何も皆出して見せなくたつて好いぢやありませんか、さあ這入りませう。』
門を入つても誰も居らぬ、變な家ぢや、庭に這入つて行けども迎へる者も尤める者も無い、とある小座敷に三人の荒くれ男が酒を飲んで居る、覗いては悪からうと行き過ぎる、泉水の音がちやらく響いて梅の花がぶんぶん香ふ。

『あら姉さんお客様よ。』

可愛い聲にはツと思つて立停まれば、傍らの灌叢から走り出る少女、桃葉珊瑚の實を絲に貫いたのを片手に提げたのが俺等に目禮して門の方へ飛ぶ様に去つて了ふ。あつけに取られて見送るとやがて『何ですネ』とたしなめる様な聲と共に稍年嵩の娘が一軒の家の前に現はれて見るく俺等に近づく。ハイカラとかいふ四阿作りの髪に彩布を装けて居る、東京で見た帝國高等女學院の山延種

子——新兵衛が娘と對ぢや。チヨコ走りに走つて来て愛嬌好く何とか言うたが其れは眞似も出来ん、つまり俺等を案内して眺望の好い座敷に行つた。

『何ぢやか變な處ぢやないか。』

『さうですね。』

『苦野、油断は爲らんぞ、酒が來ても漫然飲むまいぞ、俺は一水も飲まんぞ。』

『何だつて禁酒するんですね。』

『此處の光景が變ぢやぞ、麻痺藥を飲せる所かも知れんぞ、山城の出店ぢや無からうかの、お前入犬傳といふ本を讀んだことが有るか。』

『申談言つちや行けません、だけどもちよいと變ですね、女中が皆ハイカラなんですから、宇治の橋姫なんて多少神祕的な聯想も起りますね。』

『見い、あのあそこの樹の下に土を掘つてる男は髯が有るぞ、料理屋の亭主といふ風ぢやないぞ、柔和らしい中に威が有る、あゝいふのが恐ろしいのぢやぞ。』

『何だか變ですね。』

と苦野も多少不氣味かして、頻に其處等見まはして居たが、床の間からつと一冊の本を取つて來て。

『叔父様妙ですよ、此れやバイブルですよ。』

『何ぢや。』

『クリスチャン、耶穌教のお經ですよ。』

『それ見たことか魔法つかひの家ぢや。』

『大丈夫ですよ。だけれども料理屋にバイブルも妙な調和です子。』
先刻の娘、綺麗な娘が膳を運んで来た、若野は頻に話を始めた、面白さうに若い同志話しては無暗と酒を飲む、大分飲むけれども別に麻痺もせぬ、ミツシヨンスクールだのワンブライスシヨップだのと言つて居るパテレンの符徴では無いか、若野も内々其の方に這入つて居るので、毒が廻らぬのかも知れぬ、俺は滅多に油断はならぬ。

小便に立つ拍子に柱に懸つた貼札を見つけた、細かい字ぢやが、讀める。

「敬告—弊園儀は元來個人的別荘の目的を以て荆棘を開き……此都巽第一の絶勝名蹟を弊園獨り觀樂を縦にせんよりは寧ろ之を開放して以て……陸續御來園……尙左の條々を諒せられ……」

大分やかましい處ぢや、左の條々が十四箇條第一は

○御客様の御取扱方に付ては誠心誠意家内總掛りで勉強致し居りますが、萬一御意に叶ひませぬことは御遠慮なく御叱を願ひます、出來得る限り改良を致します

終ひの條は何ぢや、

○一時のお悪戯にて猪口徳利其の他の器具を御持歸りになること、園内御散歩の節道なき場所にて御立入、花、枝を折り取り又は他客の室を御隙見等なさること、賭博類似の御慰をなさること、召使の者に御悪戯を爲さること等は堅く御断り申上げます

宇治 浮舟園主人

は、わ、上方の客には此んな事が流行るものと見える哩、デも感心な家ぢや。

(廿二) 嵐 山

冬の嵐山、面籠の痕、雁瘡の脛

木橋の假橋のチャンクワラ橋

野狐禪にも行きつかぬ狸禪

今日此の寒い黄昏に渡月橋を渡る者は、天下廣しといへども外には無い、椋十と若野と二人ぢや、渡月橋と漢語でエラさうに言ふから那樣エライ橋かと思つたら、木橋の假橋の狭いチャンクワラ橋ぢや、論より證據俺が強く踏みばグラグラ橋のビク／＼橋、運動の爲には如是揺くのも好からう。

何處が嵐山ぢや、橋を渡つて岸の細道を傳いて行けば切り立つた山に松が有る藤藎がある、櫻の枯木も大分ある、あるには有るが魂消るほどの事も無い、七八町行けば其れもなくなつて唯の松山ぢや。大堰川と言つた處で何の谷川ぢや谷川の水を堰きとめて少し水溜りを作つて有る、深さうに碧んで居るが、樹の色が映つて碧いのぢや、格別深いことも有るまい、昔何とかいふ女が此の淵に身を投げて死んだなど、物凄がらしても駄目ぢや、徳利ならブク／＼と沈みも爲やうが此の椋十は手足を縛られて投り込まれても此んな處で死ぬ様な男では無い。

『好い氣味ぢやつたな、寒い時に來て此處を見れば、なんぼ京都の者ぢやて、自慢をする種が無い哩、此れでも花が咲いてたら少しは見られるのぢやらう』

が。』

『まわ、容色自慢の女の寝姿を見てやつた様な者ですネ。紅粉は剃げて面皷の痕が見え、羅綾の装わらはに雁脰の脛を投出して居るんです。歸りませう馬鹿々々しい。』

再び渡月橋を渡る、此度も二人限りで外に通行人もない、橋詰で團子を見て、ぶらり〜薄くらがりを歸る、天龍寺の前を通る。

『叔父様、此處は這入つて見たいんですが、罷ませうか。』

『格別の寺でも有るまいが。』

『峨山和尚が居たんで有名でさ、私もあの老僧なら參禪をして見たかつたんです。』

『參禪が何に爲るのか。』

『どうも禪はやらなくちや可けません、隆鼻術と自然主義と支那料理と浪花節と天然痘と禪とは目下の流行です、大石正巳、野田卯太郎、鳥尾得庵、三浦梧楼、渡邊前大藏大臣、山岡鐵舟、浮世亭の女將、替間の夢七、みんな行つて居ます、昔の人では武田信玄、上杉謙信……。』

『罷めに爲い、お前の言うた人は皆つまらん人ぢや、つまらん人かも知れぬが、つまらん爲つてから爲う事なしに、むしやくしやまざれに禪を行つたのぢやらう、順當に榮えて行く人に禪門の人は無いものぢや、今の總理大臣はどちぢや、東郷大將はどちぢや。』

『だつて信玄や謙信はエライでせう。』

『ウンにや、つまらん、信長公は禪宗ぢやない、太閤様も坐禪はせぬ、俺の友達に作之進と云ふ奴が居つて、同じ塾での才物ぢやつた、なか／＼氣の勝つた盛んな男で一時もじつとして居られぬ、火の燃える様な男ぢやつた、我意に任せて、嘩をする、恐喝をする、姦通をする、すんでの事半屋に打込まれる所ぢやつたが、先生が可哀相と言つて助けて下さつて、お前の様な男は禪でもやれと言つて坊主にして仕舞はれた、二三年坐禪をしたら大分おとなしくなつて今でも生きて居る、生きては居るが死んだも同様な穀潰ぶしぢや、他に養はれて大きな言をいつて居る許りが能ぢや、學校の若い先生が禪といふ者は什麼もので御座るかと言ねたら、臂を捲つてブイと放いて恁麼ものぢやと言つたげな、禪が屁の様なら糞にも劣つて居る、臭は似て居ても何の肥

しにも爲らぬぢやないか。お前は根が作之進ほどに悪くも無いから、今から禪を行つていぢけるにも及ばぬ哩、働さも疲れもせぬ先に禪で氣を鎮めるのは早い、取らぬ狸の皮算用とは此の事ぢや、野狐禪にも行届かぬ狸禪は罷めにしたが好かる、禪より錢ぢや早く月給でも取つて俺の脛咬らぬ様に爲れ、アーン。』

(廿三) 痴 癩

棕十天罰を被つて死せんとす
四條河原に苔野の銅像が建つ

『誠に京都には氣の毒ぢやつた、花も紅葉もない時に來て、毎日雪雲に包まれ

て鬱陶しい想ひをしたで平生滅多に悪口をいはず此椽十も疝癪腹のむしやくしや、ツイ褒め損じた廉も有つたらう、實以てお氣の毒ぢや——と斯うまあ思つて居る程に、どうぞ勘辨して下され。』

と今しも叔父は宿の婆さんに訛を言つた、病氣といふ者は面白いものだ、負け惜しみの強い叔父も數日來の疝癪にすつかり弱つて了つて、將に死せんとするやでも無いんだが、其の言や善した。併し早く治つて呉なきア困る、上方見物も京都だけで中止に爲つちやつてアつまらない。それよりか毎日宿に引込んで看病を命せられるのは尙つまらない。日誌の代筆を爲せられるに至つては最もつまらない。ぐづ／＼してると三月も経ツちまふ、卒業試験の準備に差支へる、まゝか落第も爲まいけれど、席順が下つては駄目だ。一體試験は一時の運だ、

僕如き勤勉篤學の士でも生理上の關係より勉強出来ないこともある、勉強はしても記憶の出来ないことが有るものだ、つまり試験成績といふものは、試験當時に於ける健康證明に過ぎないんだ、下ツだらしない者だ。

併し吾輩が若し成績が劣等でも萬々一落第しても、吾輩の實力は已に定評が有る、少くとも婦女大學の某々數人は認めて呉れて居る、吾輩の新體詩より外に同窓の作がバイオリンに上つて居るものが有るか子、フン。

時に、卒業論文は何に爲やうかな、京人形の顔面表情の研究といふものをやらうか、實に京人形は美だ、あの額の狭い微塵も間抜けた處が無い、愛くるしくて喫つて了ひたい様で——實用的だ、現代の要求に應じたるものである。そ

れともむしる西陣織を論じやうか、今日の京都の産業的生命は織物の外に無いから、川島に二三週間通つて参考室を見せて貰つて、ミイラの着物と西陣乃至友禪染とを対照して見やうか。併し京都を論ずるは怎麼しても平安朝を逸してはならぬ、平安朝の文學的産物は物語と和歌だ、織麗の趣味だ。さうだ妙々、「驚知らず」といふ題に據つて此の織細綺麗優游和樂を論じて見やう。第一、題が變だから屹と人目を引くに相違ない、試験は無論通過する。卒業論文完成祝宴を開いて新聞雑誌の記者を請待する、宴酬にして一枚の摺物を出してどうぞ宜しく御紹介をと頼む、それも藝者に配らせる、其の摺物に僕が三年の心血を流いだものだなんて書いておく、翌日は一齊に新聞に出る、近來稀に見る所の好著なり、宜しく一本を購うて机上に備ふ可しと煽動する、屹度賣れる儲かる。

先づ第一番に洋行する、學位を一グース許り持つて歸る、まだ金が残つて居る其れで京都に別荘をこさへる、一年の半を此に優游して京都の天然美と人間美の研究をやる、勿論叔父は來ない僕一人だ、其の研究の結果がまた一大著述となる、血あり肉ある人間が涎を垂らさずに居られない者が出來上る。それかつて吾輩を學ぶ丈の金力も氣力も體力も無い菜食黨——據無しの道學先生が乾からびた肘を張つて力み出す、世道人心の老眼鏡に擴大されたる吾輩を危険極まるバチルスと見做して大騒ぎを始める。茲にまた俗論の結晶たる法律といふ不消化物が有る、此の不消化物を常食として胃弱と神經衰弱に陥つて居る檢事といふ者が居る、眼ばかり光らせて天氣ばかり見て居る、競馬賭博は見て見ぬ振をするが文藝ものは見ずに見た振をする、相手が弱いと見るや猛然として

起ち牙を鳴して咬みかゝる、検事は犬の類だ、西洋では「法律の番人」といふ咬附くが役目の番犬だ。

吾野骨腸氏は秩序紊亂風俗破壊の罪を以て起訴せられたり——と吾輩の名は文藝界以外に一般に喧傳される、之を名譽の被告といふものだ、餘り傍聴者が多いので裁判所は帝國座の舞臺を假法廷に充てる、吾輩が悠揚として花道より出て来る……此の一場が吾輩一生の大光彩だ。幸か不幸か遂に獄に下る——となると滿天下の青年男女が承知しない、直に六百八十餘萬人の連署血判を以て特赦の請願が出る、一面に於ては吾輩の銅像が建設される、銅像は勿論京都に建てる、祇園の夜櫻の傍に立てるか、抑も亦四條河原にしたものか。除幕式の日に恰も吾輩が監獄を出て来る、其の時の京都の賑ひは空前で……。

「おい吾野、居るか、やい、あゝ又差込んで来た、鳩尾を壓へてくれ、居らんのか吾野は。」

『居ますよッ』(折角の面白い處を、チエツ忌々しい老爺だな。)(吾野生)

(廿四) 京 極

京都の按摩は應變流

見物は眼だ、口を開くに及ばぬ

何時按摩が歸つたか知らなんだ、ぐつすり寝込んで了つた、あの按摩、女の癖に恐しう力のある奴ぢや、指が細いので那麼に利くか知らん痛かつた、痛かつたけれども女按摩に閉口しては残念ぢやからウンと堪へた、念の爲按摩の流儀

を訊ねたら、流儀はオヘンとか言ふに、臨機應變のオーヘンぢやな、さうぢやろく、左すればいづれ柔術から出たものに相違ない。

あの按摩が言つた、何んでも按摩は夏が療治が爲よい、暑くはあるが存分の術が施される、冬は可かん、着物が厚うて蒲團が重うて不便ぢやと、兎角寒い時は可かんもんぢや、寒ければこそ此の俺も按摩に散財を爲ることに爲つた。散財の効能はあらたかなもので、何時の間にか眠つて、醒めて見たら氣分がスツカリぢや。

『奴父様御目ざめ、乍麼です御加減は、え、好いんですか、其んなら斷然散歩でもなさい、寢てばかり居らッしやると却て可けません、京極にでも行きませう、今夜は暖かう御座いますよ。』

『さうか、行かうか、遠くは無いか。』

『何んの、三條小橋のちよいと西です。』

『そんなら車喚んで呉れ、行かう。』

『叔父様意氣地が無い子、此處から直ですよ、四五町しか無いんですよ、不經濟でさお歩きなさい。』

『何だ此奴、俺の言ふ事を口眞似するな、何の貴様に負けるもんか、さア歩かう。』

三條大橋を渡る、これで十遍以上渡るのぢや、大分京都の逗留も長いものぢやな。通行の男が皆頸巻をして居る。

『昔野、京都は甚う頸巻が流行ぢやの、京都の人は品が佳うて頸が細いから餘

計冷えるのぢやな。』

『さうぢや有りませんよ、頸は昔から大切なもんでさ、京都ばかりぢや有りません東京だつて、襟巻は流行ますよ。』

『猫か貂か知らんが丸剃の皮を捲いて居る奴が有るのウ、穢らばしよ。』

『東京だつて同じです、今頃は頭も尻尾もそつくり其のまゝのが流行りますよ。』

『嫌な事ぢや。其れ位なら生のまま、活きたまゝの猫なり兎なり首に捲いたら可かる、其の方が餘計暖かいぞ。』

所謂京極といふ所に行き着いた、夥しい繁昌な町ぢや、どや〜がや〜眼が眩る様ぢや、左右に電燈が輝くので尙更目ばゆい、頭がぐらつく、足がぶら

つく。

『叔父様どうです、京都だつて馬鹿にや爲りませんネ、此の般盛は驚きませう東京では先づ淺草ですが、觀世物や玩具ばかりでなく、何でも買物が出来るのは銀座通を兼務です、此れは感心一舉兩得の繁華だ。』

『おッ！何ぢや。ペツ〜、お、蜜柑ぢや、蜜柑の降る空でもないが、何處からか投げ込んだ奴が有るな、不屈な奴、若野探し出して來い、勘辨罷りならん。』

『お罷しなさい、貴方が大口を開いて繪板を〜ておいでなさるから、誰か悪戯に擲込んだンでさ。見物に眼を開くのは必要ですが、叔父様、口を開けるには及びますまい。』

(廿五) 仁和寺、妙心寺、等持院

仁王様を作男——損得は分らぬ

尊氏、景清、辨慶、楠公、西郷、江藤、前原

チツクや香水は今日の大義名分

仁和寺と妙心寺とは近所同志でも趣が丸で違ふ。仁和寺は白髪はくはつの相者さうじや、妙心寺は社祓かみしの武家ぶけ、繪えならば墨繪すみえの山水さんすいと着色ちやくしやくの龍虎りゆうこ、野菜物やさいものなら野老やらと茄子なすびぢや。妙心寺の名高なだかい黄鐘調わうしゅうてうの古鐘ふるかねは撞つかんから妙味めうみが知れぬ、仁和寺の鼎かまへは見たかつたが見ぬ、評判ひやうばんな櫻さくらはいかにも見事みごとぢや、勿論もちろん花はなはまだ氣振きぶりも無いが、枝附えだつきに一風いふうある、白しろい苔こけが一杯いっぱいに附ついてるのは體たしかに成なり上ありや新參しんさんの名所めいじよで無い證據しやうこぢや。

山門さんもんは偉えらしいものぢや、兩側りやうがはの仁王様にわうさまが取り別わかけエライ、あの胸むねから肩かたの肉附にくつきは氣味きみが好いい。此こんな體からだなら米こめの三俵さんべうと五俵ごべうは片手かたてにも提ひげられう、吾家わがうちの作男さくをこに此この仁王様にわうさまの右みぎでも左ひだりでも一人ひとりで好よいから欲ほしいものぢや、併しかし力のある大男おほをこは其そのの割わりに仕事しごとは捌さげぬものぢや、智惠ちゑが足たりないで、懶惰なまりもので飯めしばかり餘計よけいに食くふから、得とくと算盤そろばんを取とらんと損得そんとくは分わからぬものぢやて。

『叔父様おじさま、等持院とうぢいんに行いきませんか、足利家累代あしかがひるよひの木像もくざうといふ奴やつを見みませう。』

『うん見みう。尊氏たかうぢのが有あるぢやろ。』

行き着ついて見みれば此處こゝもお寺てらの常例じやうれいに漏もれず度々たびたびの火事くわじに遭あうて、今は纒はりに形かたばかりが殘のこつて居ゐる、門内もんないの柱はしらに松葉搔まつはかく里さとの子こが二三人にんさん、坊さんぼくさんが一個ひっこり藪陰やぶかげ

の殘雪に小便をして居た。

低い中門を潜れば直に受付、極めて丁寧に應接をする老僧が、極めて小さい小僧に案内を命じた、奥に入ると例の古物陳列場。

『此の南蠻鐵の馬具は足利尊氏公の……で、兜の鉢は明珍の作……。』

『小僧さんもう宜うござる、札に書いて有るだけなら言うて下さらんでも、俺等にも讀めるぢやから。時に小僧さん御幾歳ぢや、ほ、う九歳か、俺の椋七郎と同一年ぢやに貴公はお賢い、ふん、お経も覚えさッしやつたとのウ、感心ぢや、名は何と、書いて下さるかそれなら此手帳に——お、藤田市五郎承文と能く讀める様な字を書きなざる哩。』

『おい藤田君、君は坊さんに爲るのが好か子。』

突如として苔野が間に小僧はガクリと首を擧げてヂロリと俺等二人の顔を見たが、返事は爲いで、右の食指に鼻糞を拵つて弾きながら微笑む、此の意什麼生。いよく佛殿に入る、足利歴代將軍の木像がズラリと列んで御座る、左側の奥が即ち初代將軍尊氏。

『苔野、見えるか。』

『見えますとも。』

『切り痕が見えるか、御一新前に浪人達に斬られさつしやつたといふからには、織ぎ目が無うてはならぬ、其れが見えるか。』

『さう、見えますん分りませんネ。』

『格別好物らしい面構へでも無いのう。』

『むしろ間抜け面ですネ、元來大した奸雄ぢや無かつたんでせう、唯お人好しの不得要領だつたんでせう、だから不平黨に擔ぎ上げられたんですネ、あの頃の歴史はまたく研究の餘地が有りませ、融通の利かぬ後世の儒者が、大義名分の杓子定規で彼を亂臣賊子にして丁つたのは酷でさ。』

『馬鹿ツ大義名分は融通が利かぬから好いのぢや、伸び縮みの出来る定規が標準に爲るか、ヤイ、貴様は尊氏が最負ぢやのウ、怪しからん、其んなら楠公や義貞を亂臣賊子と言ふか、さア言うて見る。』

『お待ちなさいよ、尊氏を忠臣とは言はなかつたです。よし言つたにせよ、尊氏を忠臣とすればとて必ずしも楠公が賊子と爲るにも定りません、悪七兵衛景清は平家の忠臣でせう。』

『勿論。』

『そんなら貴方のお好きな武藏坊辨慶君は亂臣賊子ですか。どうです、景清と辨慶、敵味方に同時代に於て忠臣たり得るでは有りませんか。大義名分の定規も伸び縮みが有りませすよツ。』

『不埒な、そんな護謨製の定規が何の役に立たうか、萬代不易の大義名分ぢや。』

『伺ひませう、西郷隆盛は叛逆人では有りませんか。』

『さうぢや。』

『前原一誠、江藤新平はどうです、西郷と同じくやはり叛逆罪でせう、西郷と同じく維新の功臣でせう、西郷と同じく當路の大臣に不平が有つたといふ迄

でせう、西郷と同じく郷里の子弟に誤られたのでせう、大義名分の尺度に於て三人共に同じく逆賊では有りませんか、然るに尺度は伸び縮みが有つたぢやありませんか。

『何故ぢや。』

『何故も無いもんです。逆賊西郷の子は今侯爵ですよ、前原や江藤の家は伯爵でも子爵でも男爵でも有りませんよ。併し之を憤慨するは叔父様貴方の役目です、私は別に深く之を怪しみません、此の位の融通は當り前と考へますから。』

『ふッ義理無一定在』と聞いたことも有るのウ、何か分らんごとと爲つて來たぢや。』

『分らないのです、株式見たやうなもんです、時に従つて變るのです、だから私が流行を趁ふんです、叔父様の御意に逆らつてチツクや香水を用ゐるのも今日の大義名分なんです。』

(廿六) 金閣寺

名前を有つた石、賽銭の見本
慈善の元祖、京都の神髓

参拜人出札口一名拾銭

此標札下で切符を求めて立關へ上れば、椅子テーブルが有つて参拜人待合室ぢや。段々に人が集つて八人に爲つた時、傍の扉が開いて、『案内します』といふ。五十四五の先生——袴を着けて居た様に記えて

居る、銀閣寺の様な小僧さんぢや無いの——が我等を招ぐ。戸口を入るとき切符を改めて、彼の先生がカチンカチンと鉄を入れる、丁度流車か電車の切符切りと同じ事。椽側に出るや直ぐ右側に繪葉書賣捌所がある、地圖もある。煙草と新聞の無いのが停車場にしては物足らぬ。

『昔野、廣い庭ぢやの、ホライセキ、チヨリウセキ、エンバセキとか何とか間断なう案内の先生が辯舌爽かに陳べ立てさッしやつた。瓢箪から豆出すといふ譬へも此の先生には叶はぬ、どんな豆でもあれ程滞りなう出るものでない、時とするも幾粒も一緒に込み合うて瓢箪の口を出兼ねることも有るものぢやに、此先生には其んな滞りが無い格別上出来の口加減ぢやぞ。また此れ程の石に一々名前を割り賦つてあるのは感心ぢや、俺は小前の者の子供に

名命けを頼まれる度に困るが、何十何百の庭石に一々異つた名を命けた人は誰か知らんが恐ろしい名命け力の強いものぢや無いか。感心ぢやないか。』

『え、併し銀閣寺の庭ほど寂が有りませぬネ、金閣は風流に於て遙に劣りますネ、併し天才は不具、風流はつまり貧乏趣味です。銀閣に優つて居るのは義政が義満に對して慚ぢなければ爲りますまい。』

『むう義政といふ人は繪を上手に書いたり何かして色々藝が出来たさうぢやのウ、是れ迄見た處々の寶物にも有つたぢやろ。人の上に立つ人の癖に其の様な細々しい藝當の出来る男はツマラン者ぢやて。』

『其様は限りませぬよ、今の總理大臣は詩も俳句もやりますよ、曾禰副統監は端唄都々逸を作ります、盆栽もいぢくれば花牌も引きます。』

『其んならやつぱり風流殿様でツマラン人ぢやる……いや此んな事をいうては官吏侮辱罪に爲りはせまいかの。』

『大丈夫ですよ、貴様が褒めたつて腐したつて誰も氣に掛けアしません、鴉が御所の棟に糞したつて不敬罪に問はれぬのと同じですよ。』

『何ぢや、乃公を鴉に比べるのかヤイ。』

『御免なさい。』時に叔父様御覽なさい、案内先生がほら例の通り一々口上を陳べて居ます、ほら彼の佛像の前に跪つて、此度は別製の難有聲を出して講釋を始めた、筒袖の男も半纏の男も皆坐りましたせ、あ、佛前に錢が撒いてある、皆が其の見本どほりに賽錢を献げるから面白い、彼の連中を美術展覽會に連れて行つて見たいな、佛畫の前には一々賽錢を投げるんだらう。』

『寶物拜觀は此で終り、お茶を上げますと先生がいうて居るぞ、また粉茶ぢやろ、若野怎麼するかお前は、俺も今日は咽喉が渴かぬが。』

『そんなら此處から見て居ませう、どんな事を爲るか知らん。』

六人の拜觀人は先生に伴はれて一室に入つた、正面に造花の花籠が有つて二流の幅を狭めて倒れさうに坐つて居る、股引の男が菓子ば幾錢するかと訊いた、先生が只ぢやと答へると、直にムシャ／＼と食つてガブ／＼と飲んだ。飲みかたは俺と同じぢやが、菓子の直段を訊いたのは感心ぢや、此の位念を入れねば世の中は渡られぬ。此の男は今に屹度身上を作る男ぢや、頼もしい俺の聲に欲し。

お庭巡覽の爲立關を下つて履物を穿いてお庭の門に集る。茶飲み連中の來揃ふのを暫く爰に待つて居る、俺等一人や二人の爲に門は開けては呉れぬのぢや。『門の柱に函が有るのは何ぢや。』

『見てみませうか。大日本慈善元祖愛知縣岡崎町慈善藥院慈善箱と書いてあります、慈善元祖とはラザケて居ますネ。』

『病院か其れは、慈善箱ちふと怎麼した謂れのものぢやの。』

『慈善の爲に此の箱に錢を投込せやうといふンでさ。慈善家の方から言へば慈善箱かも知れませんが、貰ふ方からは乞丐箱といふが當り前です、路側に坐つて通行人の慈善を乞ふ跛や盲を、誰も慈善跛慈善盲とは言ひまんからネ。』

やうく人が集つて、門が開く、どやくと這入り込んで數十歩、ピカリと金

閣が見える。樹の名や石の名前など誰ももう耳にとめるものは無い、案内者より先に立つて足を早める、大きな池を廻つて兎も角金閣に駆け上る。

あゝ佳い景色ぢや、三層の樓上は此の頃修繕されて金色燦爛、閣を繞つて四面は皆山、山の色は池に落ちて碧い静かな水の中をスウ〜と緋鯉が暢氣さうぢや、羨ましい、此處が京都の神髓ぢや。

『苦野、流石に結構なことのう。』

『十錢がものは有りますネ、廉いもんでさ。』

『十錢ツ、参拜料か、馬鹿言ふな、汽車賃、宿錢其外一切の雑用を積らんで爲らうか、其れを今迄見物した箇處に割り當てんければ、此處の見物料が幾何に當つてるかは分らんのおやぞ、貴い廉いは其れからの論ぢや。』

『わッ左様でした……何處か叔父様に勘定を忘れさせる所は無いもんかなア。』

(廿七) 大 和

京都より古くて京都より静か

八咫鳥の輕氣球と有毒瓦斯彈

神武東征と國際法及び新體詩

まだ山城、まだ山城と、茶の樹島を汽車の窓に眺めて行く中に、停まつた驛が
モウ奈良ぢや。

『京都よりか潤うて好い原ぢや、高いのぢやらうな、何となう氣が澄んで居る
様ぢや、静かで郷里に歸つた様ぢやの。』

『全く静かです、山静にして太古の如し……静かだと古い様な氣がしますね、
東京より京都は古いだけ静か、奈良は京都よりもまた古くてまた静かです。
奈良といふより大和と云ふとモツと餘計古く餘計静かな様な氣がしますね。』
『さうぢや人間も年取つて古くなると静になるぢや、お前などももう少し静か
に爲らんと可かな。』

『お待ちなさいよ、可かんか可くかは別問題ですよ、私やまだ古くなつた
り齒が脱けたり、口が開いたりするのは早過ぎますよ。其んな事はさて措い
て、斯うグル〜と眼を放つて御覽なさいよ、「青山四周」とは一句にして盡
して居ます、何處から入り込むにも幾重の山を越えなければなりません。
神武天皇の遠征軍が困難を極めたのも有理ですね。けれども面白い事が有り

「ますよ、あの八咫鳥といふのが有りませう、あれが妙ですよ。」
 『何故ぢやの。』

『あいつは輕氣球ですね、不案内の森林を潜つての行軍だから地形偵察も敵情偵察も尋常の手段では出来ないでせう、其れで以て發明されたのが輕氣球八咫鳥號でさ、之に對する土民軍の防禦にもなかく、文明の利器を用ひて居ますせ、それ、何とかいふ神が毒を吐いて天孫人種の侵入軍を昏醉せしめたと、いふ事が有りませう、是れ即ち有毒瓦斯彈を發射したんです、現今の國際法では禁せられておりますが、何にしる二千五百年以前の事で其の頃は海牙條約も無かつたでせう、戦時法規も幼稚だつたんですから有毒瓦斯も用ひたんでせう、今なら直に人道問題が起るんでさ、下瀬火薬でさへ露國では非難し

たんですからネ、兎に角當時の戦争も今と同じだから妙ぢやありませんか。』

『同じ人間ぢやからの自然同じ様な事になるのかのウ。』

『さうですとも、其の外まだ、同じ様な事が幾千も有りますよ、私などの新體詩なんてエものもやはり其の頃から有つたんですね。いゝえ眞個ですよ、ほら三十一字の歌は神代から始まつたんでせう。』

『うゝ其れは知つちよる「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに……」ぢやろ。』

『えゝ、其れから俳諧も昔から有るんでさあの何とか言ひましたネ。』

『其れなら俺が知つて居る、日本武尊様のぢやろが。』

『さうですく、「新治筑波を過て幾夜寝つる」かゝなべて夜には九の夜、日は十日を」といふのが、連歌の起りで、俳諧と爲り、發句と爲つたんでせう。

新體詩もやつぱり起源は古いのです、元祖は恐しくも神武天皇、もつと有難くいへば神日本盤余彦尊と申し奉つり御父は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊』

『罷せ何ぢや。併し感心に御名を記えて居ることぢや。』

『それは新體詩の御先祖ですもの。』

(廿八) 宇 陀

兄猪撃滅の祝捷會 卓上 演説

神武天皇の露骨なる自然主義

『叔父様全くですよ、新體詩の起源は神武東征、——大和占領の時に在るんでネ、委しく申せば、神武天皇が兄猪を撃破なさつて祝捷會が催されたんで

す、其の時の卓上演説——といふよりむしろ軍歌ですネ、一體新體詩と軍歌は因縁が深いですよ明治の新體詩は外山博士や矢田部博士方が作られたのが原です、輕騎隊歌の「一里半なり一里半、駢びて進む一里半……死地に乗入る六百騎……」とか、勝安房先生が舊友西郷を誒つて「それ達人は大觀す……大隅山の狩倉に……」此等が今日の有明、鐵幹、泣菫、藤村、泡鳴諸大家の輩出を來した種子なんでせう、其れと同じく大日本新體詩の大根本は神武天皇御製の軍歌に出でたんです。』

『何といふ御軍歌ぢや。』

『兄猪撃滅の祝捷會に神武天皇御製の軍歌は斯うなんです。』

宇陀の古城に鳴響張る、我が待つや、鳴は障らず、いすくはし鯨障る……』

『何ぢやそれア。』

『此はネ、兄猪が天皇を害し奉つらんと押機を造つて置いたが其の事顯れ却て其れに追入れられて自滅したでせう、其れを嘲弄なすつて「馬鹿だなア、鴨毘係けたに、大きなく鯨が係つて毘は滅茶々々あべこべにやられた、態ア見ろ」とお誂ひ爲すつたんです。』

『なか／＼意味深遠なものぢやな。』

『さうです、此の軍歌はまだ後が有るんですよ。』

コナミガナコハサバタチソバノミノナケクヲコキシヒエネ。

ウハナリガナコハサバイチサカキミノオホケクヲコキダヒエネ。

エ、シヤコシヤ。

ア、シヤコシヤ。

『何ぢや其れは日本言葉か。』

『え／＼、生粹の日本語でさ、ウキスキーだつて生粹正味は却て飲めません、多少水の混つてゐる方が口當りの好いもんです、言葉も生粹は可けません、翻譯しませうか。』

本妻が御馳走をと言つたらそれにもぼつちりやれ。

副妻が御馳走欲しがつたらウンとやれやれ。

やれこのこれわい

えんやらやア

と言つた様な意味なんです。』

『それで軍歌かい、變なもんぢやの。』

『變なことは有りません、木遣節といふのは威勢が好いでせう、軍歌も威勢が第一ですから、エンヤラヤア趣味を同うするんです。其れに不思議なのは、

此御製の軍歌に二千五百年後の文壇の傾向をチャンと包含して居るんです、恐ろしいもんですネ。』

『何が不思議に恐ろしいのぢや。』

『貴方は御存じありませんが、昨年以來我が小説界には厭妻主義といふのが流行つて居るんです、此の主義が神武天皇の今の御歌に洞窟されてゐるんです、何故かといふと、コナミ、前妻、本妻、即ち老妻には、義理一遍にぼつちり御馳走をやつて、ウハナリ、後妻、副妻、新妻にはデコ〜に御馳走をやれ

と大御言は穿つたものです、六年征戦の御苦勞を爲すつた天皇様だけ流石に通なものでさ。此露骨なる表白は即て是れ自然主義です。此の理を知らずに自然主義を漫罵する者は取りも直さず不敬罪でさ。』

(廿九) 鹿

奈良の杉と京都の松
鹿と馬と鼠と土龍子

春日神社の一の鳥居を潜る、路を挟んで杉の大木が生ひ茂つて奥行の知れぬ處が別して有り難い。京都の寺には何處も松が多かつた、其の松も焚附取りに下枝を無暗と伐してあつたので、瘦せ畑の翻れ蕎麥を見るやう、幹ばかり赤うて

ヒヨロ／＼とした厭氣無いものぢやつたが、此處の樹木は下枝から頂邊までこ
んもりと好う茂つて居ることぢや。茂り飽いて枯れた枝までそつくり其のまゝ
着けて居る。春日の神主殿は京都の和尚達の様に焚き附けに事缺かぬものと見
える。

『叔父様此處いらの杉はみなガラン洞に爲つてますネ。』

『さうぢや、老木は得手斯う爲るものぢやが、此處のは別して多い様ぢや、土
地のせいぢやらうかの。』

『胴腹のガラン洞に石灰を埋めてありますネ。』

『われは何ぢや、杉や檜はあの空洞に強い風が吹き當ると火が出ることであ
るで、あゝやつて風除け火除けに穴を塞いだものぢや。』

『だつて、此の千年の寂のついた樹の色と白い石灰とはわんまり不調和ぢやあ
りませんか、石灰に何か適當の着色をして樹の色にまぎれる様な工夫があ
りさうなもんぢやありませんか、何ぼ何だつて智慧が無過ぎます。』

『併しのウ、舊障子の破れ穴を繕ふのにワザ／＼新しい紙を茶染め澁染めにも
せぬものぢやから、石灰の白いのも無理はないわ。石灰にも今に寂がつかう。
其れより不思議な杉の形ぢや、杉は杉形と云うて、算盤にも有るぢや、米
俵を積んだ算法がそれぢや、上へ／＼と尖つて伸びるものぢやに、見い、何
の杉も尖りが無い、くしや／＼と爲つて磨切れた草箒の様ぢや、何處が心か
分らぬでは無いか。』

『それや年老つたからでせう、九天まで突き徹さうといふ杉の木の意氣も、老

いては挫けるンです、五十年、百年、二百年、何のくそ空の星も拂ひ落して呉れんと仰びては見たが、三百年経つても五百年経つても中々天に届かないもんだから嫌になつちやつたんでせう。或はネ斯うも言はれますさ、空が高くなるよと雲の往來が烈しいでせう、だから往來の邪魔だつてンで仲長禁止に遭つたんだとも。」

「何ぢやろ、餘り枝が多くなつて孰が心か分らずなつたのぢや、世話人が多過ぎて却て本當の肝入る者が無い様なものぢや。やわく鹿が來るく、お、可愛い格好ぢや。繪で見た通りまきれも無い鹿ぢや、眼が可愛い、耳が可愛い……。」

「さうです、」を鹿の耳ふり立て、と此の耳は中々詩的でせう。」

「耳ふり立てる丈は猫でもやる、それより尻尾が可愛い兎の様ぢや、脚が可愛い……おいコラ若野、鹿は馬にが一番好う肯て居るぢやのウ。」

「だから、鹿を指して馬と言つたんでさ、鼠か土龍子なら何ンぼ趙高だつて何だつて馬とはゴマカセせんや。叔父様始めて見たンですか、東京の動物園にだつて居ますよ。」

「さうぢやつたの、併し斯う自由に遊び廻つて、しかも澤山に居るのは格別ぢや、ほら此方へ走つて來る奴がある、樹の根に寝て居る、重り合つて居る。」

「お、彼處の子供等を取り廻いた七八匹。」

「叔父様餌を給りませう。」

「何か持つて來たのか。」

『いえ、彼處に賣つて居まさ、二三錢買つたら好いでせう。』
『罷めにせい、不經濟ぢや』

『だつて食べる所が面白いんですよ。』

『下らん、何が面白いものか、生物が餌を食ふのは當り前ぢや、見い、彼處の子供等が給つて居る、彼れを見ても理窟は判るぢや、別に試めすにも及ぶまい、やつぱり口で食ふのぢやわ。金かけてわざ／＼見物する程の妙も不思議も有りはせん。見い昔野、右の方の池の端に——糞をして居る鹿が有る哩、あれも別に異うた處はない糞振ぢやが……。ほウ來た子鹿が來た、こつち來いこつち來い。』

『貴方が食べさせるンかと思ツて來るんです、可愛いさうに買つてやりませ

う。』

『さう思うて來たのか、俺を見掛けて來たのなら憚り乍ら藪野棕十ぢや、村の學校の新築には三番札の寄附もした男ぢや、時宜に依つては金は吝まぬ、そら一回札ぢや、これだけ皆買うて御馳走してやれ。』

(三十) 三條小鍛冶宗近

昔野が議論は耳から耳へ素通り

素通りにならぬのは土産店の前

鐵は切れても竹は切れぬ宗近の名作

雪消の澤は鹽よりも大きく、白藤の流は水道の栓口よりも盛んなものぢや。神

垣の森は取り分け見事なもの。

何よりも魂消るのは燈籠の數ぢや、三千から有るといふ、何の爲に此の様に澤山の燈籠を作つたのやら譯が分らぬ、釣り燈籠ばかりで千以上もあるといふ事ぢや。

美しいものは巫子ぢや。古い木古い藤、土の香苔の香、千年の匂ひに裏まれた古い御堂の中に、若い美しい臙脂白粉の少女が緩やかに立ち舞ふ光景は今の世の人とは思へぬ。俺は東京で洋服の貴婦人も元祿姿の藝妓も見したが、なかく以て此の巫子ほどに尊いものでは御座らぬ。

春日の大宮といふ所こそ今まで見物した中で、一番上等のお社ぢや、丹塗りの社は一體下品なものぢやが、此の繁つた暗い深い林の中に在れば却て尊く見ゆ

るが不思議ぢや。若い坊さんの朱の衣紫の衣は麗さじみて見ゆるけれども瘦せかけた老僧が召さるれば却て有り難味を増すのと同じ理ぢやらう。

蟬の釣燈籠といふのが有る、回轉せば蟬の鳴き聲がする、是れは俺には不思議で無い、金と金と磨るれば當り前の音ぢや、俺の處の車井戸を汲み上げるときはキヨ／＼キヨ／＼ツキヨと音がするから、都の人が來たら時鳥の井戸ぢやと言つて村の名所にしてやらう哩。

寄生木は柞が臺で、藤、椿、南天、接骨木、櫻、紅葉などが空洞の中に同居してゐるのぢや、植木屋でなうても出来る細工ぢやもの魂消ることは無い。

「叔父様奈良と京都はどう異ふか分りましたか。」

「うん分つた。」

『どう異ふんです。』

『俺は分つて居る、お前をア言うて見い。』

『そんな狡猾い事、貴方まづ仰しやつて御覽なさい。』

『さうぢやな、種痘瘡で見た舞妓と先刻の巫子と違ふ様なものぢやるかいの。』

『旨い、感心、たしかに其れも一觀察ですが、まだ有りませう。も少し振つた物が。』

『振ふ物かの、揺れるものならば、京の宿屋の電燈と此處の釣り燈籠と比べてはどうか。』

『いゝえさ、もつと奇抜な對照ですよ。』

『したら何はどうぢや、あの、京人形と大佛煎餅とは。それで可かんなら、

あるはく、鴨川の石ころと鹿の糞ぢや。』

『まあかつく、及第點を獻げませう。』

『何ぢや長上に對つて失禮な事を申すなヤイ。』

『御免なさい。實は京都と奈良との代表的趣味を植物に比したらは何ですネ、

京都は柳と櫻ですね、柳櫻をこきませた春の錦の綺麗優婉は全く平安城に

適切です、古の奈良の都は、八重櫻といふ重厚な趣もあつたでせうが、

今日の奈良は杉と馬酔木に依て代表せられる崇高と雅樸ですね。』

面白くも無い菅野が議論は例の通り、左の耳から右の耳へ素通をさせて社を出

る。素通のならぬは土産店の前ぢや、鹿の玩具と角細工の簪、春日人形、奈良

墨と大分の散財をさせられて、懐寂しく石燈を降りかけると右手の金物屋か

ら番頭が飛んで出て。

『もし〜どうぞ、いえ決して御買求めを願ひませんでも宜しう御座ります。唯其の一寸見て戴きたいものが御座りますので、へい、御手間は取らせません、手前共は三條小鍛冶宗近の末孫に致しまして、手前先祖の宗近が鍛ちましたる刀、それを唯御一覽下されまして御歸りに爲りましての御話種になされて戴きますれば、此の上もない名譽で……。』

と達ての願である、家の名譽を重んずるは誰しも同じことぢや、見て遣はずだいで功德に爲ることなれば、急がぬ旅ぢや、見てやらうと分別して金物屋に入つた、番頭か主人か知らぬが、中々の大喜びで頭を安直に低げて禮をいふ、寶物拜見を致すのぢやから實は此方より禮を申すべき筈、誠に以て痛み入つた

次第ぢや。

棚の中より函を取り出し、函の中より錦の袋を取り出し、袋の中より白鞘の一刀を取り出し、大事に〜そろり〜と一寸二寸と抜き出して『さアどうぞ御覽下され』と差出したる一刀。成程名刀ほどわつて好うピカ〜と光つて居るまさか立つても居られぬ、腰をかけて、刀を受取つて、分らんながらに拜見をして居る内に、お茶を持つて来た、さて〜丁寧なことぢや。

『手前共は三條小鍛冶宗近の末孫に致しまして名刀鍛錬の奥儀は一子相傳を以て、連綿と今日に傳はつて居ります、へい、此れに列べましたる大和杖、庖刀、小刀、鋏、剃刀皆此の先祖名刀に劣らぬ切れ味、此の通り御覽に入れませる。』

と言ひつゝ、小刀を以て、先づズバリと杉枝を削つた、次ぎに火箸の様な鐵の棒を削つて見せる、いかにも切れる。大分店の邪魔もしたで、たゞも歸れられなくなつた八十五錢を出して今の鐵の切れる小刀を買つて戸口を出た。崖の下道を通ると竹の根の節の面白いのを見つけた、杖によかる、早速用に立つた小刀、抜き放いてズバリと殺いた、切れば切れたが、ザラリと音がするのは變ぢやと見れば、これアどうぢや小刀の刃はこぼれて鋸の様ぢや。

(卅二) 嫩草山

兀山に樹を仕立てる秘傳の事
ほれたはれたと深遠なるラブ

業平、お半長右衛門、情死禪

『櫻が淵、慈の瀧、嫩草山なんて奈良の地名は詩的ですよ。』

『嫩草山はどれぢや。』

『此の地圖御覽なさい、此の對ふがさうなんでせう、兩方松山の間が芝原に爲つてるのが、屹度左様でせう。』

『うん此れか、何の妙も無いぢやないか、此んな野原は地面の乏しい上方にこそ珍らしからうが、郷里あたりでは幾箇もあるぢや。』

『だつて此の潤い緩やかな斜面が齊一に嫩い緑に彩られて有るのは如何にも平和な感じでは有りせんか。』

『さうかのウ。』

「春日野の嫩草山と誦ンじた丈でもう奈良朝の太平が縹渺として浮んで來ますね。」

「然うわるか妙なものぢやのウ。併し無駄な事ぢや、此潤い地面を遊ばせて置くのは、兩側があの通り松が榮えるのぢやから、此處にも植ゑたら育たう、杉や檜や楠は植かぬ瘦地でも松は出来るものぢや、兀山に樹を仕立てるには秘傳が有るて、お前知るまいかのウ、まづ粟稈の様なものを敷き展げて置くぢや、其様すると採れ残りの實がなんぼか有るので小禽が集つて來て啄ばむわ、其中に禽が糞を爲る、糞の中には、他處で喫べた木の實が有る、其木の實が程に落ちる、程の下には濕りが有るでいつか自然と芽をふき根を下してとうとう林に成るものぢや、松の仕立は別に法が有る、此れで出来るのは雜

木林ぢや。」

「叔父様澤山です、此の嫩草山を雜木林なんかにされて堪りますか。」

「さうで無い、雜木林が却て割が好いものぢやぞ、總じて山林はなまなかの田畑よりも得ぢや。第一税が安いからの、其の上段別の丈量が嚴しうない、臺帳で一段の山林は實地一町も二町もあるものぢや。」

「其んなこたア怎麼でも好いです、此の春日野の嫩草山は永久に其んな造林なんか要らないんです、嫩草で結構です「嫩草の妻も籠れり我も籠れり」で嬉しいぢやありませんか。此間上州鹽原の山奥の尾花ヶ峠に森田文學士と平塚はる子とが隠れて居て、巡查に捕まつて尙「戀愛の神聖を發揮して居るのだ」と言つたのは在五中將の驅落よりも振つて居ます。クリストの山上の教

と共に、尾花峠の彼の宣言は悠久に記さるべき大史蹟でさ。半兵衛や長右衛門の如き無學の輩とは異つて此の新しき偉人男女は今日の日本に於ける最高等の教育を受けた才子佳人なんでせう、其の藝術的、感情的、詩的、美的、世間法無視的、沒道徳的、任性的、毒皿的の大勇猛心は近松以來の情死文學中の主人公等の如く、淺薄な惚れた腫れたとは其選を異にし、最高教育の感化、確乎たる哲學的見地よる獲來つたのです、是れ實に深遠幽妙なる情死なんです、情死の三昧に入つたもので流石に春子嬢は禪を研究した丈の事は有りませう。

『退屈した、おい、此の草原に寝て酒でも一杯呑みたいのウ、苔野。』

『其の酒が戀の甘酒なら尙結構ですネ』

『馬鹿ッ先刻から黙つて居れば好い事して、苟も叔父たる者の前をも憚らず、情死の戀のといふ事が有るか、ヤイ。』

『管ひません、昔は 至尊陛下の前に於て戀歌を闘はせたものです。』

『生じか書物を讀むと可かん哩、内所事の色戀にまで理窟をつけて人前も憚らぬ様になる、困つた世の中に爲つたものぢや。』

(卅二) 麥と菜花

石油と胃病と脚氣が流行

馬の食ひ物を人間が食ふ世

悪口の言はれぬ所は窮屈

『燃ゆるばかりの緋の毛氈に裹まつて此處に轉がつて居たい、長いく春の日を夢も見ずうつら〜と寝込んで居ると、四邊の若草がすん〜と伸びる、伸びて〜伸びて〜我が姿を藏して了つたら面白からう、とは私の一友人の空想でしたが、面白いですネ。』

『其れア出来ん事ぢや、其の様に此處の草は伸びはせん哩、見る通りの瘠地ぢや、去年の葉蕨が此の春の野焼きに焼かれて居るが此の焼残りの莖を見い、一分の圓みも無いピロ〜蕨ぢやつたらしい、茅草は蕨より高うならぬものぢやからの。』

『空想ですよ、友達と言ふのは。』

『何ぢやつたつて彼ぢやつて、茅に體が藏れる事は此處では出来ん事ぢや、斷

念める様に友達に好う言うてやれ。』

『え〜〜那麼言つてやりませうよ。叔父様頂まで登りますか。お登りなさるんですか、其ンなら登りませう、あゝ佳い眺望ですネ。』

『おゝ結構々々、奈良は京都より都には好さ相ぢや、なせに、此處をお捨てなされたものぢやらうな。大和の國は廣い處ぢや、麥が大分流行と見える、青いのは多分麥ぢや、菜花も少し咲きかけて居る、併し段別は何程も無からう皆笠と菜花ほどもつきり衰れたものも無いわ、俺等の子供の時は何處もよう作つたものぢやつたが、近年は石油が用ひられるので、菜種油の入用が極々少うなつた、直も割に安いので作つても引合はぬぢやての。麥は郷里あたりでは馬の食ひ物と極つて居たぢやが、近年は胃病の脚氣のと病氣が多うなつ

て人間が麥を賞味する様に爲つて來た、官員達までが、麥飯を食はしやるけ
 なで、麥の捌けが昔より可い、丁度菜種と二つ釣瓶の上り下りぢや。農家に
 取つては得な方を作るまで、勘定は同じぢやけれど、春の眺めは菜花が滅つ
 て甚う寂しいものよ。』

『腹が北山です叔父様。』

『どの山ぢやの。』

『せうが無いな、お腹が空いて來ましたと言ふ事です。』

『俺も空いた、朝飯が食へなんだで……。』

二人は山を下りかけたが、空腹で足に堪へが無い、足に力が無いのに坂を下る
 のぢやから恐ろしく臍の底に響く、やつと平地に行き盡いて往來に出た。

『此處に入らうか。』

『さうですね、むさし野といふんですね、料理屋ですか旅人宿ですか、客商
 賣に相違はありません……叔父様思ひ出しました。此處ですよ、叔父様に葉
 書を送つて奈良見物の時には泊つて呉れと言つて來たのは。』

『ふう、あの「但し悪口は御免」と書いて有つたのぢやの、何も縁ぢや這入り
 うか。』

『だけれども、悪口を恐れる様では駄目ですネ、悪口を言ふ餘地が無い様にして
 置いたら好いでせうネ、折角葉書を寄したのは氣が利いて居ましたが、但し
 書は間が抜けてましたネ、悪口を言つては爲らんといふんでア窮屈ですから
 いッそ何處なりとも外に行きませう、勝手に悪口も賞口も言へる所に。』

(世三) 二月堂

手向山——百人一首製造所

菅公のケチ——違警罪

良辨杉——ニングワツダウ

『此の度はぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼、と叔父様御存じ?。』

『失禮なことを申すな、百人一首に在る菅家のお歌ぢや。菅家といへば天神様右大臣菅原の道真といふ御方で、牛と梅がお好きで後には鳴神様に爲つて臍をお取りなされたといふまで事明細に承知致して居るぢやぞ。』

『これは失敬。其の百人一首の歌を詠んだ處が此の手向山です、其れも御承知なんでせうけれども、抑も此八幡宮は……』

『さて其れは知らんぢやつたぞ、此のお社が百人一首の製造場ぢやつたのか、ン、成程歌でも出来さうな静かな神々しいお社ぢや。』

『楓の樹が澤山有るでせう、幣の代りに、此の楓を手向けやうといふ道真も吝ン坊でさネ。漢學者の貧乏育ちで餘りケチ／＼したもんだから、豪奢な藤原家の公達に嫌がられて毛蟲扱ひに摘み出されたんですよ。』

『不届なことを言ふ奴ぢや……。』

『だつて貴方、神様に参詣して置いて、其の神様の紅葉で幣の代用は酷いぢや有りませんか。』

『うゝ……。』

『今時うつかり菅家の例に倣つて賽銭がはりに楓でも折つて御覽なさい刑法の罪人ですよ、右大臣だつて學校の小使だつて、罰は同じです、尤も違警罪ですから大した前科にも爲りませんけれどネ。十銭にせよ半助にせよ科料を出すよりか、賽銭を獻げた方が安上りでせう。』

『愚かな事を申さいで、早く御拜を致せ、さあ〜行かう、おゝ何ぢや彼のお堂は恐ろしい大きな堂ぢやが、處もあらうに危い處を選つて建てたものぢやのッ。』

『さうですね、京都の清水見た様なものですが、何處なんだらう、地圖でも分りません此處等はゴチャ〜と堂ばかり有るんですから、一つ尋ねて見ませ

う、彼處から婆さんが来る、おい〜お婆さん〜、彼は何といふ寺なんだ
い、畜生狸婆聞えない風をして居る、おい〜。』

『不作法な奴ぢや、人様に物を尋ねるに其の様な言葉遣があるものか、聲でな
うてもおんなに遠方の人に聞えるものか、さう急かいでも此方イ向いて来る
のぢやわ。』

『早く来い〜、何をノロくさ歩くんだらう、奈良朝式の歩き方なんだらう、
天下泰平なもんだア。いゝや、おんなに地面はかり向いて来るのは何か拾ひ
物は無いかと狙つてるんだな、耳が遠くなると慾は深くなる彼の婆さんも年
寄りの例に漏れぬ因業の業つく張で、嫁と和尚と棺桶屋と乞食から死ぬのを
待たれて居る奴だ、屹度さうだ。おゝヤツと来た〜、もう聞えるだらう、』